

文化庁国立近現代建築資料館展覧会



報告書

令和6年度近現代建築資料(建築家「堀口捨己」)の展覧会制作に係る業務

- 01 もくじ
- 02 企画概要・基本情報
- 04 関連イベント
- 05 制作物
- 29 展示
 - ・ 展示構成
 - ・ 出展資料リスト
 - ・ 会場レイアウト
 - ・ 会場写真
- 60 広報
 - ・ 来場者集計
 - ・ アンケート
 - ・ 広報
- 74 実施記録
 - ・ 実施計画
 - ・ 業務記録



【企画趣旨】

堀口捨己は、1920年頃から1970年代まで活躍した近代日本を代表する建築家のひとりです。堀口は西欧の近代建築の動向をいち早く理解し、日本への導入を行うと共に、日本の茶室や数寄屋建築に関して、卓越した研究業績を残しました。近代建築と日本の伝統双方に対して、深い洞察を巡らせた日本最初の近代建築家といえることができるでしょう。

堀口捨己は、日本に本格的な近代建築を導入する端緒となる分離派建築会結成に際して中心的役割を果たしました。1920年代から30年代の建築作品では、西欧の近代建築の展開を鋭敏に学習して、オランダ表現主義から国際様式に至る変化を自らの創作に取り入れます。同時に、1930年代から茶室や数寄屋建築の研究に傾倒して、学位論文「書院造と数寄屋造の研究」（1944年）、著書『利休の茶室』（1949年）などの研究業績と著作を残します。欧米の近代に学ぶという風潮が主流であった時代に、独自の視点から、日本の文化や伝統に注目するという姿勢を世に広める役割を果たしました。

戦後、堀口は明治大学で教鞭をとりつつ、明治大学の一連の校舎や数寄屋建築の料亭など、近代建築と和風建築の両面において優れた作品を実現します。堀口は、茶の湯、和歌にも通じ、建築や庭園のデザインのみならず、広いジャンルで創造力を発揮しました。それは、堀口の稀有な探求心と創造力の結実でした。

本展覧会は、堀口の学生時代から晩年に至るまでの代表的作品のオリジナル図面に加えて、1920年代欧州視察時の写真、分離派建築会資料、数寄屋・庭園の実測研究資料等を展示して、堀口捨己の建築作品、思想、学術研究を総合的に紹介します。併せて、堀口捨己監修『茶室起こし絵図集全12巻』（墨水書房、1967年）に掲載された茶室の原寸模型（制作：公益財団法人窓研究所）を展示します。更に、堀口捨己研究の第一人者である藤岡洋保・東京工業大学名誉教授による寄稿およびギャラリートークが、堀口捨己の魅力を解説します。

尚、今回展示されている堀口捨己資料は、これまで遺族、協働者、研究者、大学の努力があればこそ、今日まで大切に保存されてきた資料群であり、その保存の経緯は日本のアーカイブズ文化にとって貴重な教訓であり、財産であります。展示を通じて、その保存と資料整理の経緯にも触れていただき、アーカイブズの役割をより一層ご理解いただけることを願っております。

【基本情報】

主催：文化庁

企画：文化庁国立近現代建築資料館

協力：公益財団法人東京都公園協会、一般社団法人日本建築学会関東支部、
公益財団法人窓研究所、ヘットシップミュージアム（アムステルダム）

会場：文化庁国立近現代建築資料館

〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内

会期：2024年8月9日（金）～10月27日（日）

休館日：毎週月曜日但し、祝日の月曜は開館し翌日休館。

（8月12日、9月16日、9月23日、10月14日開館、8月13日、9月17日、
9月24日、10月15日休館）※会期中、一部展示入れ替えがあります。

時間：10:00－16:30



ギャラリートーク

講師：藤岡洋保（東京工業大学名誉教授）

- （１）8月25日（日）13:00-14:00
- （２）8月25日（日）14:30-15:30
- （３）9月14日（土）13:00-14:00
- （４）9月14日（土）14:30-15:30
- （５）9月28日（土）13:00-14:00
- （６）9月28日（土）14:30-15:30

当館展示担当職員によるガイドツアー

8月22日、29日、9月5日、12日、19日、26日、10月3日、10日、17日

時間：14時～

講演「1923年：堀口捨己とアムステルダム派の出会い」

講師：アリス・ルーホルト氏（ヘットシップミュージアム創設者・名誉館長）

日時：2024年10月18日(金) 16:30 - 17:30

座席：先着30席（予約不要）

協力：日蘭建築文化協会後援駐日オランダ王国大使館

関連展覧会

『堀口捨己と明治大学校舎建築1955-65』展

主催：明治大学理工学部建築学科

共催：明建会

後援：日本建築学会関東支部

協力：堀口捨己建築アーカイブズ・文化庁国立近現代建築資料館

期日：2024年8月27日(火) - 30日(金) 9:00 - 17:30

会場：明治大学駿河台キャンパスグローバルフロント1F 多目的室（東京都千代田区神田駿河台1-1）

入場料：無料



制作物

建築家・堀口捨己の探求

モダニズム・利休・庭園・和歌

チラシ表面 | A4サイズ | 15,000部

モダニズム 利休 庭園 和歌

建築家・堀口捨己の探求

Explorations of HORIGUCHI Suteji: Modernism, Rikyu, Garden, Waka

2024.
8.9 Fri. – 10.27 Sun.

会場：文化庁国立近現代建築資料館
〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内

開館時間：10:00–16:30

休館日：毎週月曜日（但し、祝日の月曜は開館し翌日休館）

主催：文化庁

企画：文化庁国立近現代建築資料館

協力：公益財団法人 東京都公園協会

一般社団法人 日本建築学会 関東支部

公益財団法人 窓研究所

ヘットシップミュージアム（アムステルダム）

最新情報は公式ウェブサイトをご確認ください。

Open hours — 10:00–16:30

Closed on Mondays

(Open on holidays that fall on a Monday.

In which case the following day will be closed.)

Venue — National Archives of Modern Architecture,
Agency for Cultural Affairs
[4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo]

Organization — Agency for Cultural Affairs

Planning — National Archives of Modern Architecture

Cooperation — Tokyo Metropolitan Park Association

Kanto Chapter, Architectural Institute of Japan

Window Research Institute

Museum Het Schip

More information can be found on our official website.



文化庁

国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌

チラシ裏面 | A4サイズ | 15,000部

イベント Events (given only in Japanese)

ギャラリートーク

講師：藤岡洋保 [東京工業大学名誉教授]

会期中にギャラリートークを開催します。

日時、定員などの詳細は公式ウェブサイトをご確認ください。

ガイドツアー

当館職員によるガイドツアーを行います。日時は公式ウェブサイトをご確認ください。

モダニズム 利休 庭園 和歌

建築家・堀口捨己の探求

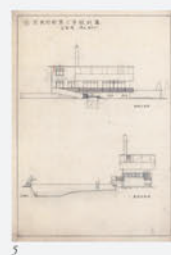
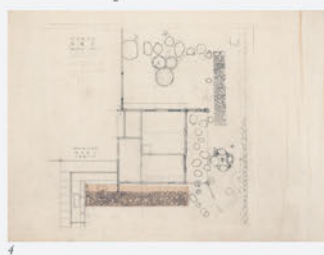
Explorations of HORIGUCHI Sutemi: Modernism, Rikyu, Garden, Waka



建築家・堀口捨己(1895-1984)は、国内最初の本格的近代建築運動とされる分離派建築会結成(1920年)に際して中心的役割を果たし、1930年代には日本を代表する国際様式建築を実現しました。西欧の近代建築の動向をいち早く理解するとともに、国内の茶室や数寄屋建築に関する卓越した研究業績を残し、第二次世界大戦後には、現代数寄屋建築を実践して大きな影響を残しました。堀口は、1920年頃から1970年代の日本建築界を代表する建築家であり、近代建築と日本の伝統建築双方に対して深い洞察を巡らせた稀有な建築家といえるでしょう。茶の湯、和歌にも通じ、建築や庭園のデザインのみならず、広いジャンルで創造力を発揮しました。そこに、堀口の稀有な探求心と創造力の結実を見ることができます。

本展覧会は、堀口の学生時代から晩年に至るまでの代表作品のオリジナル図面に加えて、1920年代欧州視察時の写真、分離派建築会展資料、茶室や庭園の実測研究資料、原寸茶室模型等の展示を通して、建築家・堀口捨己の建築、思想、創造世界を総合的に紹介します。

Architect HORIGUCHI Sutemi (1895-1984) played a central role in the formation of the Bunriha Kenchiku Kai (1920s), the first authentic modern architectural movement in Japan. In the 1930s, he realized some of the leading works of International Style architecture in Japan. In addition to his early understanding of modern architectural trends in the west, he undertook superlative research on Japanese teahouses and sukiya-style architecture. After the Second World War, his implementation of modern sukiya-style architecture was highly influential. From the 1920s to the 1970s, HORIGUCHI was a leading architect in the Japanese architectural world. His deep insight into both modern architecture and traditional Japanese architecture made him an exceptional architect. Well versed in the tea ceremony and waka poetry, his creativity was not limited to the design of architecture and gardens, but encompassed a wide range of genres. Here, we can see the fruits of Horiguchi's uncommon spirit of inquiry and creativity. Through the display of original drawings of exemplary works from his student days through to his later years, as well as photographs he took during a tour of Europe in the 1920s, items from the Bunriha exhibition, material from his surveys of teahouses and gardens, and a full-size replica of a teahouse based on HORIGUCHI's publication, this exhibition comprises a comprehensive introduction to the architecture, thinking, and creative world of architect HORIGUCHI Sutemi.



1. 和歌 Waka | 1951 2. 紫雲荘平面図及立面図 Shienso Plans and Elevations | 作成年未詳 date unknown 3. 分離派建築会「分離派建築会宣言と作品」若渡書店 Bunriha Kenchiku Kai, Bunriha Kenchiku Kai Manifesto and Works, Published by Iwanami Shoten | 表紙画 堀口捨己 Illustrated by HORIGUCHI Sutemi | 1920 4. 妙喜庵待庵庭園図実測図 Surveyed Drawing of Tai-an Teahouse, Myoki-an | 1936 5. 若狭邸立面図 Wakasa House Elevations | 作成年未詳 date unknown 6. 吉川邸透視図 Kikkawa House Perspective Drawing | 1925 7. 常滑市立陶芸研究所模型写真 Tokoname Ceramics Research Institute, Model Photography | 撮影年未詳 date unknown



休館日：毎週月曜日
但し、祝日の月曜は開館し翌日休館。
8月12日、9月16日、9月23日、10月14日 開館
8月13日、9月17日、9月24日、10月15日 休館

Closed on Mondays
Open on holidays that fall on a Monday.
In which case the following day will be closed:
Open on 12th Aug., 16th Sep., 23rd Sep., 14th Oct.
Closed on 13th Aug., 17th Sep., 24th Sep., 15th Oct.

アクセス Access

東京メトロ千代田線「湯島」駅1番出口より徒歩8分
8-min. walk from Exit 1 of Yushima Station (Tokyo Metro Chiyoda Line).

入館方法 Entry

国立近現代建築資料館への入場方法は2つあります。
There are two ways to enter the National Archives of Modern Architecture.

A 展覧会のみ観覧(平日のみ利用可)

湯島地方合同庁舎正門よりご入場ください。
入場料無料。都立旧岩崎邸庭園には入場できません。
A. To view the exhibition only (open on weekdays only).
Please enter from the main gate of the Yushima Local Common Government Offices. Admission is free. Visitors are not allowed entry into the Tokyo Metropolitan Kyu-Iwasaki-tei Gardens.

B 旧岩崎邸庭園と同時観覧(土日祝・平日利用可)

都立旧岩崎邸庭園よりご入場ください。
旧岩崎邸庭園入園料(一般400円)が必要となります。有料。
B. To view both the exhibition and Kyu-Iwasaki-tei Gardens, please enter via the Kyu-Iwasaki-tei Gardens (Admission 400 yen).

文部科学省

国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs



建築家・堀口捨己の探求
モダニズム・利休・庭園・和歌

ポスター | B2サイズ | 150部

モダニズム 利休 庭園 和歌

建築家・堀口捨己の探求

Explorations of HORIGUCHI Suteji: Modernism, Rikyu, Garden, Waka

2024.
8.9 Fri. – 10.27 Sun.

会場: 文化庁国立近現代建築資料館
〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内

開館時間: 10:00–16:30
休館日: 毎週月曜日(但し、祝日の月曜は開館し翌日休館)

主催: 文化庁
企画: 文化庁国立近現代建築資料館
協力: 公益財団法人 東京都公園協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益財団法人 窓研究所
ヘットシップミュージアム(アムステルダム)

最新情報は公式ウェブサイトをご確認ください。

Open hours — 10:00–16:30
Closed on Mondays
(Open on holidays that fall on a Monday.
In which case the following day will be closed)

Venue — National Archives of Modern Architecture,
Agency for Cultural Affairs
[4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo]

Organization — Agency for Cultural Affairs
Planning — National Archives of Modern Architecture
Cooperation — Tokyo Metropolitan Park Association
Kanto Chapter, Architectural Institute of Japan
Window Research Institute
Museum Het Schip

More information can be found on our official website.

文部科学省
国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

すきびとの
おこしあぐみたて
すきびとの
ひとなみにて
けふはたのいも
けふもまた
かつらのにわに
おりたちて
ふるきいとなみの
まことにふれむ
すきびとの
そのみのきびしさ
いふとしを
かきかきいも
このこともの

建築家・堀口捨己の探求
モダニズム・利休・庭園・和歌

湯島正門側 | 1200H×2400W | 1点



建築家・堀口捨己の探求
Explorations of HORIGUCHI Sutemi: Modernism, Rikyu, Garden, Waka

モダニズム 利休 庭園 和歌

国立近代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

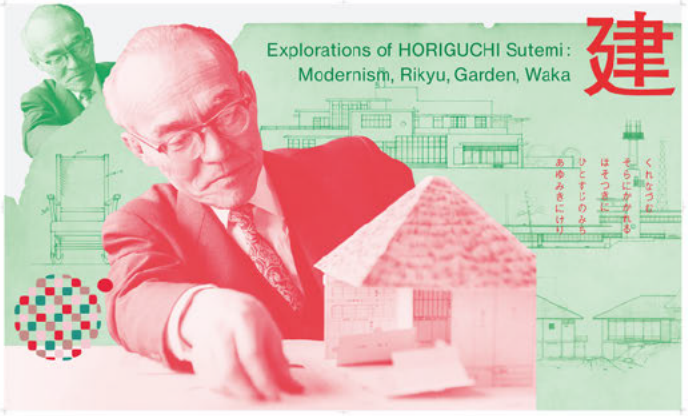
入館方法のご案内 Entry to the National Archives of Modern Architecture.

A 展覧会のみ観覧——
平日のみ利用可 入場料無料
高島地方合同庁舎正門よりご入場ください。都立旧岩崎邸庭園には入場できません。
A. To view the exhibition only (open on weekdays only). Please enter from the main gate of the Yushima Local Common Government Offices. Admission is free. Visitors are not allowed entry into the Tokyo Metropolitan Kyu-Iwasaki-tei Gardens.

B 旧岩崎邸庭園と同時観覧——
土日祝・平日利用可 旧岩崎邸庭園入園料有料
都立旧岩崎邸庭園よりご入場ください。
旧岩崎邸庭園入園料 (一般 400円) が必要となります。
B. To view both the exhibition and Kyu-Iwasaki-tei Gardens, please enter via the Kyu-Iwasaki-tei Gardens (Admission 400 yen).

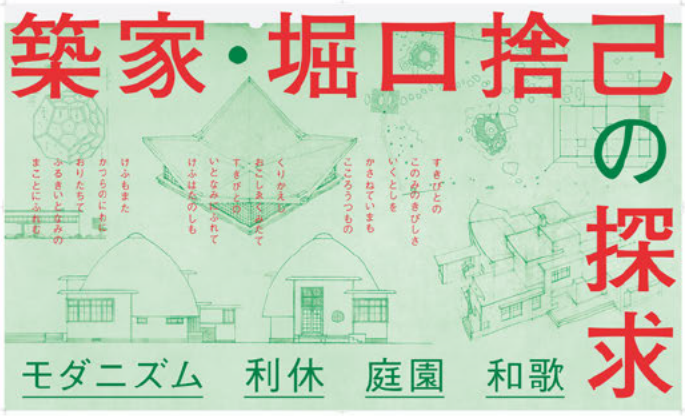
2024. **8.9** Fri. – **10.27** Sun.
開館時間 Open hours: 10:00 – 16:30
休館日: 毎週月曜日 (但し、祝日の月曜は開館し翌日休館。
8月12日, 9月16日, 9月23日, 10月14日 閉館 / 8月13日, 9月17日, 9月24日, 10月15日 9時開
Closed on Mondays Open on holidays that fall on a Monday.
Open on 12th Aug., 16th Sep., 23rd Sep., 14th Oct. / Closed on 13th Aug., 17th Sep., 24th Sep., 15th Oct.

岩崎庭園側ガラス面 | 885H×4480W | 1点



Explorations of HORIGUCHI Sutemi:
Modernism, Rikyu, Garden, Waka

建



建築家・堀口捨己の探求

モダニズム 利休 庭園 和歌

タイトルウォール | 2425Hx2515W | 1点

建築家・堀口捨己の探求

Explorations of HORIGUCHI Sutemi: Modernism, Rikyu, Garden, Waka

2024. 8.9 Fri. - 10.27 Sun.

開館時間: 10:00 - 16:30
休館日: 毎週月曜日
(但し、祝日の月曜は開館し翌日休館)

主催: 文化庁
企画: 文化庁国立近現代建築資料館
協力: 公益財団法人 東京都公園協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益財団法人 恵研研究所
ヘッドシップミュージアム (アムステルダム)

Open hours — 10:00 - 16:30
Closed on Mondays
(Open on holidays that fall on a Monday.
In which case the following day will be closed.)
Venue — National Archives of Modern Architecture,
Agency for Cultural Affairs
[4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo]
Organization — Agency for Cultural Affairs
Planning — National Archives of Modern Architecture
Cooperation — Tokyo Metropolitan Park Association
Kyoto Chapter, Architectural Institute of Japan
Window Research Institute
Museum Het Schip

国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

モダニズム 利休 庭園 和歌

建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌

駐車場 | 1200H×2400W | 1点

モダニズム 利休 庭園 和歌

建築家・堀口捨己の探求
Explorations of HORIKUCHI Suteki: Modernism, Rikyu, Garden, Waka

2024.
8.9 Fri. - 10.27 Sun.
会場: 文化庁国立近現代建築資料館
〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内

開館時間: 10:00-16:30
休館日: 毎週月曜日(但し、祝日の月曜は開館し翌日休館)
主催: 文化庁
企画: 文化庁国立近現代建築資料館
協力: 公益財団法人 東京都公園協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益財団法人 建築研究所
ヘトリップミュージアム(アムカルダム)
最新情報は公式ウェブサイトをご覧ください。

Open hours: 10:00-16:30
Closed on Mondays
(Open on holidays that fall on a Monday
in which case the following day will be closed)
Venue: National Archives of Modern Architecture
Agency for Cultural Affairs
[4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo]
Organization: Agency for Cultural Affairs
Planning: National Archives of Modern Architecture
Tokyo Metropolitan Park Association
Kanto Chapter, Architectural Institute of Japan
Window Research Institute
Museum Het Schip
More information can be found on our official website.

文化庁
国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

岩崎邸正門看板 | 860H×410W | 1点

モダニズム 利休 庭園 和歌

建築家・堀口捨己の探求
Explorations of HORIKUCHI Suteki: Modernism, Rikyu, Garden, Waka

2024.
8.9 Fri. - 10.27 Sun.
会場: 文化庁国立近現代建築資料館
〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内

開館時間: 10:00-16:30
休館日: 毎週月曜日(但し、祝日の月曜は開館し翌日休館)
主催: 文化庁
企画: 文化庁国立近現代建築資料館
協力: 公益財団法人 東京都公園協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益財団法人 建築研究所
ヘトリップミュージアム(アムカルダム)
最新情報は公式ウェブサイトをご覧ください。

Open hours: 10:00-16:30
Closed on Mondays
(Open on holidays that fall on a Monday
in which case the following day will be closed)
Venue: National Archives of Modern Architecture
Agency for Cultural Affairs
[4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo]
Organization: Agency for Cultural Affairs
Planning: National Archives of Modern Architecture
Tokyo Metropolitan Park Association
Kanto Chapter, Architectural Institute of Japan
Window Research Institute
Museum Het Schip
More information can be found on our official website.

文化庁
国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

誘導看板 | 728H×5151W | 4点

モダニズム 利休 庭園 和歌

建築家・堀口捨己の探求
Explorations of HORIKUCHI Suteki: Modernism, Rikyu, Garden, Waka

2024.
8.9 Fri. - 10.27 Sun.
会場: 文化庁国立近現代建築資料館
〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内

開館時間: 10:00-16:30
休館日: 毎週月曜日(但し、祝日の月曜は開館し翌日休館)
主催: 文化庁
企画: 文化庁国立近現代建築資料館
協力: 公益財団法人 東京都公園協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益財団法人 建築研究所
ヘトリップミュージアム(アムカルダム)
最新情報は公式ウェブサイトをご覧ください。

Open hours: 10:00-16:30
Closed on Mondays
(Open on holidays that fall on a Monday
in which case the following day will be closed)
Venue: National Archives of Modern Architecture
Agency for Cultural Affairs
[4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo]
Organization: Agency for Cultural Affairs
Planning: National Archives of Modern Architecture
Tokyo Metropolitan Park Association
Kanto Chapter, Architectural Institute of Japan
Window Research Institute
Museum Het Schip
More information can be found on our official website.

文化庁
国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

国立近現代建築資料館 入館方法のご案内 Entry to the National Archives of Modern Architecture.

国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture

入場方法は2つあります。
There are two ways to enter the Archives.

B 旧岩崎邸庭園と同時観覧(土日祝・平日利用可)
都立旧岩崎邸庭園よりご入場ください。
旧岩崎邸庭園入園料 有料(一般400円)
B. To view both the exhibition and Kyu-Iwasaki-tei Gardens, please enter via the Kyu-Iwasaki-tei Gardens (Admission 400 yen).

A 展覧会のみ観覧(平日のみ利用可)
湯島地方合同庁舎正門よりご入場ください。
入場料無料。都立旧岩崎邸庭園には入場できません。
A. To view the exhibition only (open on weekdays only). Please enter from the main gate of the Yushima Local Common Government Offices. Admission is free. Visitors are not allowed entry into the Tokyo Metropolitan Kyu-Iwasaki-tei Gardens.

休館日: 毎週月曜日(但し、祝日の月曜は開館し翌日休館)
5月12日、8月16日、9月23日、10月14日 開館 / 6月13日、9月17日、9月24日、10月15日 休館
Closed on Mondays. Open on holidays that fall on a Monday.
Open: 12th Aug, 16th Sep, 23rd Sep, 14th Oct. / Closed on 13th Aug, 17th Sep, 24th Sep, 15th Oct.

大型パネル「はじめに」 | 1456H×1030W(B0) | 1点

はじめに

堀口捨己の全体像に触れる貴重な機会

小林克弘

文化庁国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官
東京都立大学名誉教授

堀口捨己は、1920年頃から1970年代まで活躍した近代日本を代表する建築家のひとりです。堀口は西欧の近代建築の動向をいち早く理解し、日本への導入を行うと共に、日本の茶室や数寄屋建築に関して、卓越した研究業績を残しました。近代建築と日本の伝統双方に対して、深い洞察を巡らせた日本最初の近代建築家といえるでしょう。

堀口捨己は、日本に本格的な近代建築を導入する端緒となる分離派建築会結成に際して中心的役割を果たしました。1920年代から30年代の建築作品では、西欧の近代建築の展開を鋭敏に学習して、オランダ表現主義から国際様式に至る変化を自らの創作に取り入れます。同時に、1930年代から茶室や数寄屋建築の研究に傾倒して、学位論文「書院造と数寄屋造の研究」(1944年)、著書『利休の茶室』(1949年)などの研究業績と著作を残します。欧米の近代に学ぶという風潮が主流であった時代に、独自の視点から、日本の文化や伝統に注目するという姿勢を世に広める役割を果たしました。

戦後、堀口は明治大学で教鞭をとりつつ、明治大学の一連の校舎や数寄屋建築の料亭など、近代建築と和風建築の両面において優れた作品を実現します。堀口は、茶の湯、和歌にも通じ、建築や庭園のデザインのみならず、広いジャンルで創造力を発揮しました。それは、堀口の稀有な探求心と創造力の結実でした。

本展覧会は、堀口の学生時代から晩年に至るまでの代表的作品のオリジナル図面に加えて、1920年代欧州視察時の写真、分離派建築会資料、茶室・庭園の実測研究資料等を展示して、堀口捨己の建築作品、思想、学術研究を総合的に紹介します。併せて、堀口捨己監修『茶室おこし絵図集 全12巻』(墨水書房、1963-67年)に掲載された茶室の原寸模型(所蔵：公益財団法人 窓研究所)を展示します。更に、堀口捨己研究の第一人者である藤岡洋保・東京工業大学名誉教授による寄稿およびギャラリートークが、堀口捨己の魅力を解説します。

尚、今回展示されている堀口捨己資料は、これまで遺族、協働者、研究者、大学の努力があればこそ、今日まで大切に保存されてきました。その保存の経緯は日本のアーカイブズ文化にとって貴重な教訓であり、財産であります。展示を通じて、その保存と資料整理の経緯にも触れていただき、アーカイブズの役割をより一層ご理解いただけることを願っております。

Introduction

A Rare Opportunity to Experience an Overview of Sutei Horiguchi

KOBAYASHI Katsuhiko

Chief Senior Specialist for Architectural Documents,
Emeritus Professor of Tokyo Metropolitan University

Horiguchi Sutei was a leading architect of modern Japan, active from the 1920s to the 1970s. Horiguchi had an early understanding of trends in modern architecture in the west, which he introduced to Japan. He also undertook superlative research on Japanese teahouses and *sukiya*-style architecture. With deep insight into both modern architecture and Japanese tradition, he may be considered the first modern architect in Japan.

Horiguchi Sutei played a central role in the formation of the Bunriha Kenchiku Kai (Japanese Secession), which introduced authentic modern architecture to Japan. In his architectural works from the 1920s and 1930s, he was astutely aware of the development of modern architecture in the West, incorporating a transformation from Dutch Expressionism to the International Style in his own creative production. At the same time, from the 1930s onward he devoted himself to the study of teahouses and *sukiya*-style architecture, and his research and writing includes the dissertation "A Study of the Shoin Style and the Sukiya Style" (1944) and the book *Rikyu's Teahouses* (1949). In an era when the prevailing tendency was to learn from European and American modernity, his unique perspective played a role in attracting wider public attention to Japanese culture and tradition.

After the war, while teaching at Meiji University, Horiguchi realized outstanding works in both modern and Japanese-style architecture, including a series of buildings on the Meiji University campus and a *sukiya* style *ryotei* (Japanese-style restaurant). Well versed in the tea ceremony and *waka* poetry, Horiguchi's creativity was not limited to the design of architecture and gardens, but encompassed a wide range of genres. These are the fruits of Horiguchi's uncommon spirit of inquiry and creativity.

Through the display of original drawings of exemplary works from his student days through to his later years, as well as photographs he took during a tour of Europe in the 1920s, items from the Bunriha exhibition, and measured surveys of teahouses and gardens, this exhibition comprises a comprehensive introduction to the architecture, thinking, and academic research of Horiguchi Sutei. In addition, a full-scale replica of a teahouse (produced by the Window Research Institute), which was published in the 12-volume book series *Miniature Architectural Papercraft of Teahouse* (Bokusuishobo, 1963-67) edited by Horiguchi Sutei, is on display. Furthermore, the appeal of Sutei will be deciphered through contributions and a gallery talk by FUJIOKA Hiroyasu, professor emeritus at Tokyo Institute of Technology and the leading researcher on Horiguchi.

All the material on Horiguchi Sutei displayed in this exhibition has been carefully preserved until now thanks to the efforts of the bereaved family, collaborators, researchers, and universities. The circumstances of their preservation provide valuable lessons and assets for the culture of Japanese archives. We hope that visitors to this exhibition will learn about the process of preservation and organization of these materials, and thereby gain a better understanding of the role of archives.

大型パネル「表現者・堀口捨己の世界」 | 1456H×1030W(B0) | 1点

表現者・堀口捨己の世界

藤岡洋保

東京工業大学名誉教授・工学博士
近代建築史専攻

堀口捨己^{すてみ} (1895–1984) は日本近代を代表する建築家です。彼は、日本建築史や庭園史、茶の湯研究の大家で、歌人でもありました。その作品や著作、装丁などにおける彼の「表現」は、多彩な分野にわたる博識と鋭い感性を統合したもので、そこには、独創的で壮大、華麗な世界がうかがえます。

堀口は、1920年2月に東京帝大の同級生5人と分離派建築会を立ち上げました。当時の彼はドイツ表現主義に傾倒し、そのデザインは個性の表現を重視したものでした。1923年7月に横浜から出航し、約半年間ヨーロッパ各国の新建築を歴訪した際に、自由曲面を多用するアムステルダム派の建物や茅葺き屋根の独立住宅に関心を抱きましたが、翌年1月にオランダを再訪した時には、幾何学的なヴォリュームの構成をテーマにしたデ・ステイルの建築を見ていることから、当時の西欧でモダニズムが勃興しつつあるのに気づいたことがうかがえます。1924年2月にパリでル・コルビュジェの『建築へ』(1923)を購入したこともそれを裏づけます。この頃に表現主義からモダニズムにシフトしはじめたのです。その後の彼は、日本のモダニズムのリーダーとして、設計や執筆を積極的に行いました。

なお堀口が、1930年代から40年代前半には数寄屋建築や茶の湯研究にいそしみ、戦後に名古屋の料亭・八勝館などで数寄屋建築を設計したことから、日本帰郷して和風建築家になったといわれることがあります。

しかし、彼は、「茶室の思想的背景と其構成」(『建築様式論叢』板垣鷹穂・堀口捨己編、六文館、1932)で、茶室とアテネのパルテノンを同列に置いて比較し、茶室は、茶の湯の作法、つまり機能に対応した非相称の美を体現したものなのでモダニズムを先取りしており、美に奉仕するためだけにつくられたパルテノンよりも現代的な意味がある建築だと主張しています。このユニークな見解には、彼の戦略が込められていました。「日本帰郷」したのではなく、日本の茶室こそが、西洋に先んじてモダニズムを実践した建築であって、それを武器に西洋の建築家と渡り合おうとしていたのです。

建築と庭園を「人工物と自然物による空間構成」と見て、一体として認識するなど、堀口の思考は常識を平然と飛び越えるものでした。そして、彼の意匠の特徴は、非相称や水平・垂直のモチーフの対比などによる「強い表現」にあります。

The World of HORIGUCHI Sutemi,
Seeker of "Expression Emphasizing Contrasts"

FUJIOKA Hiroyasu

Professor Emeritus and Doctor of Engineering, Tokyo Institute of Technology,
Architectural Historian (Modern Architecture)

HORIGUCHI Sutemi (1895–1984) was one of Japan's leading modern architects. He was also a distinguished scholar of the history of Japanese architecture and gardens, and of the tea ceremony, as well as being a poet. The "expression" in his works, writings, and even book designs is a synthesis of his erudition and acute sensitivity across diverse fields, revealing a world of creative grandeur and brilliance.

In February 1920, together with five classmates from Tokyo Imperial University, HORIGUCHI founded the *Bunriha Kenchiku Kai* (literally, The Secessionist Architecture Group). At the time, he was an ardent admirer of German Expressionism, which prioritized the expression of personal emotion in design.

He set sail from Yokohama in July 1923, and spent about half a year visiting new architecture in various European countries. He was initially interested in expressionistic designs such as those of the Amsterdam School, which made extensive use of freeform surfaces constructed of bricks, and in freestanding houses with thatched roofs. But when he returned to the Netherlands in January the following year and visited the architecture of De Stijl, which comprises compositions of geometric volumes, he became aware of the emergence of European modernism. This is corroborated by his purchase of Le Corbusier's *Vers Une Architecture* (1923) in Paris in February 1924. It was about that time he began a shift away from Expressionism toward Modernism. From then onward, he was actively designing and writing as a leader of Japanese Modernism.

It is sometimes said that HORIGUCHI returned to Japan and became a Japanese-style architect, because during the 1930s and first half of the 1940s he was involved in research on the tea ceremony and *sukiya* (teahouse) architecture, and after the Second World War he designed *sukiya*-style architecture for the *Hasshokan ryotei* (traditional Japanese restaurant) in Nagoya.

However, in "The Ideological Background and Composition of the Teahouse," contained in *Essays on Architectural Style*, eds. ITAGAKI Takao and HORIGUCHI Sutemi (Rokubunkan, 1932), he makes a direct comparison between the tiny teahouses in Japan and the Parthenon in Athens, one of the greatest masterpieces of Western architecture, contending that the traditional teahouse anticipates modernism because it deals with the function of the tea ceremony, emphasizing asymmetry in its aesthetic, thereby giving a small hut a more modern significance than the Parthenon, which was created solely in service of beauty. This unique viewpoint was part of his strategy. He was not "returning to Japan," but rather he saw the Japanese teahouse as an architecture that predated the West in "materializing modernism", which he would use as a weapon to compete with Western architects.

In defining architecture and gardens as "spatial compositions of artificial and natural elements" and perceiving them as a unity, HORIGUCHI's thinking serenely transcended common sense. Characterized by asymmetry and the contrast of horizontal and vertical motifs, his designs are characterized by a "strong expression."

大型パネル「堀口捨己建築資料について」 | 1456H×1030W(B0) | 1点

堀口捨己建築資料について

青山(高瀬)道乃

元・文化庁国立近現代建築資料館 研究補佐員

現・早稲田大学大学院 創造理工学研究所 建築学専攻博士後期課程

2023年1月に明治大学と東京工業大学に所在していた資料のうち、堀口捨己の設計活動の業績に関与すると思われる資料を文化庁国立近現代建築資料館に移送した。その後、国立近現代建築資料館として所蔵すべきものであると確認できたものから順次寄贈を進めており、「堀口捨己建築資料」として資料群を構成する予定である。

明治大学で教鞭をとりつつ設計活動をしていた堀口は、1965年の定年退職時に、駿河台校舎の研究室にあった資料を大森の自邸に、聖橋校舎の研究室にあった資料を生田キャンパスに建設された工学部校舎に運びよう指示した。しかしその資料はあまり顧みられず大学紛争時には毀損も懸念されたが、堀口研究室の最後の卒業生で同大の助手(のちに教授)だった木村儀一(建築計画)が守り続けた。その資料の一部は木村企画(後援明大建築卒業生)の展覧会「堀口捨己の建築展」(*)で公開された。木村は学内にて「堀口記念室」を設けて資料を保存すべきことを再三訴えたが、実現はなされなかった。一方、大森の自邸が取り壊される際、遺族が東京工業大学大学院教授の藤岡洋保(元・明大助手)に資料の確認と引き取りを依頼し、網羅的に藤岡研究室に移された。

これらの資料については、科研費を得て、木村と藤岡によって資料整理・保全・データベースの作成が行われている。明治大学分については1997-1999年堀口捨己図面史料に関する基礎的研究として実施され、その成果は論文「明治大学所蔵堀口捨己資料の内容とその建築史的重要性」(*)にまとめられた。東工大分については2006-2008年堀口捨己資料(自邸所蔵分)に関する研究として実施され、成果は同名称の報告書(*)にまとめられた。また、上記の資料や現存建物の調査をもとに、藤岡が『表現者・堀口捨己-総合芸術の探求-』(*)を執筆し、日本建築学会賞(論文)を受けた。

これらの資料を散逸させないため、木村儀一・藤岡洋保・岩橋幸治・山崎綱介が「堀口捨己建築アーカイヴズ」を組織し、資料の保存や管理を行ってきた。同組織は、展覧会特別展 小出邸と堀口捨己-1920年代の創作活動、その造形と色彩-(*)や、分離派建築会100年:建築は芸術か?(*6)、1923: Horiguchi meets the Amsterdam School(*)の主催者からの依頼に応じ、資料の一部を展示のために出納や貸し出しも行った。

以上のように同組織により資料が継承されてきたが、メンバーが高齢化した今後については一体として保存活用がなされるよう、国立近現代建築資料館への寄贈を決定した。当資料館では、堀口の多様な活動を研究・検証できるよう、資料群を一体として収蔵・公開することを第一の目的としつつ、継承の過程についても調査記録を行いながら資料整理を進めている。

*1 本展覧会は1995年に明治大学駿河台図書館にて開催された。また、続く2000年にはギャラリー・タイセイにて「堀口捨己展」が開催された。図録は、堀口捨己展、ギャラリー・タイセイ、2001

*2 木村儀一、藤岡洋保、岩橋幸治、山崎綱介、中山伸:明治大学所蔵堀口捨己資料の内容とその建築史的重要性、日本建築学会計画系論文集、第69巻、第578号、pp.163-168、2004

*3 藤岡洋保:平成18-20年度科学研究費補助金(基礎研究(C))研究成果報告書・堀口捨己資料(自邸所蔵分)に関する研究、東京工業大学理工学研究所建築学専攻藤岡研究室、2009

*4 藤岡洋保:表現者・堀口捨己-総合芸術の探求-、中央公論美術出版、2009

*5 東京都歴史文化財団江戸東京たてもの園:小出邸と堀口捨己:1920年代の創作活動、その造形と色彩:江戸東京たてもの園特別展、東京都歴史文化財団江戸東京たてもの園、2019

*6 分離派100年研究会:分離派建築会100年:建築は芸術か?、朝日新聞社、2020

*7 A. Roegholt et al.: Sutemi Horiguchi, Bunriha and the Amsterdam School, Museum Het Schip, 2023

上記註以外は、国立近現代建築資料館による堀口捨己建築アーカイヴズへのヒアリングに基づいている。

On HORIGUCHI Sutemi's Architectural Materials

AOYAMA TAKASE Michino

Research Assistant, National Archives of Modern Architecture (April 2022-March 2024)

Doctoral Course, Graduate school of Creative Science and Engineering, Waseda University

In January 2023, materials previously held at Meiji University and the Tokyo Institute of Technology, which are believed to be related to the achievements of HORIGUCHI Sutemi's design activities, were transferred to the National Archives of Modern Architecture, established by the Agency For Cultural Affairs. Subsequently, the donated items are each being assessed for inclusion in the collection of the National Museum of Modern and Contemporary Architecture, and are intended to comprise a collection known as the "HORIGUCHI Sutemi Architectural Materials."

HORIGUCHI, who had been teaching at Meiji University along with his design activities, instructed that when he retired in 1965, the materials in his lab at Surugadai Campus be moved to his own home in Omori, and the materials in his laboratory at Hijiribashi Campus be moved to the Faculty of Engineering building constructed on the Ikuta Campus. However, no one paid much attention to these materials, and there were fears that they might have been damaged during the period of university protests, but KIMURA Giichi (architectural planning), one of the last graduates of HORIGUCHI Lab and an assistant (later a professor) at the university, kept them safe. Some of the materials were shown to the public in the "HORIGUCHI Sutemi Architecture Exhibition,"**1 planned by KIMURA (and sponsored by architecture graduates of Meiji University). KIMURA repeatedly advocated for the establishment of a "HORIGUCHI Memorial Room" within the university in order to preserve the materials, but this was never realized. On the other hand, when the home in Omori was demolished, the bereaved family asked Tokyo Institute of Technology graduate school professor FUJIOKA Hiroyasu (a former assistant professor at Meiji University) to verify and retrieve the materials, which were entirely transferred to FUJIOKA Lab.

With the support of a Grant-in-Aid for Scientific Research, KIMURA and FUJIOKA have been organizing, preserving, and creating a database of these materials. A study of the Meiji University collection was undertaken from 1997 to 1999 as basic research on the HORIGUCHI Sutemi's drawings and historical materials, and the results have been summarized in the paper "The Content and Meaning of the HORIGUCHI Sutemi Collection at Meiji University."**2 The Tokyo Institute of Technology collection was conducted from 2006 to 2008 as "Research on the Materials of Architect HORIGUCHI Sutemi," and the results have been summarized in a report of the same title.**3 Based on the above materials and research on existing buildings, FUJIOKA wrote HORIGUCHI Sutemi, Expressionist: In Search of the Total Work of Art,**4 which received the Architectural Institute of Japan Award (thesis).

In order to prevent the HORIGUCHI materials from being lost, KIMURA Giichi, FUJIOKA Hiroyasu, IWAHASHI Koji, and YAMAZAKI Taisuke have established the "HORIGUCHI Sutemi Architectural Archives" for their preservation and management. The same group has also loaned some of its materials for display at the request of the organizers of special exhibitions, such as "House of Koide and Sutemi Horiguchi - The Shapes and Colors on His Creative Works During the 1920s" and "100 Years of BUNRIHA: Can Architecture Be Art?"**5 and "1923: HORIGUCHI meets the Amsterdam School."**6

As described above, this group has inherited the materials, but as the members have aged, they decided to donate the materials to the National Archives of Modern Architecture in order for them to be preserved and utilized as a whole. In this museum, the primary objective is to collect and exhibit HORIGUCHI's materials as a whole so that his various activities can be studied and verified, but while the materials are organized the process of their inheritance is also being investigated and documented.

*1 This exhibition was held at Surugadai Library of Meiji University in 1995. The exhibition "HORIGUCHI Sutemi" was held at Galerie Taisei in 2000. The catalog is HORIGUCHI Sutemi Exhibition, Galerie Taisei (2001).

*2 KIMURA Giichi, FUJIOKA Hiroyasu, IWAHASHI Koji, YAMAZAKI Taisuke, and NAKAYAMA Shin, "The Content and Meaning of the HORIGUCHI Sutemi Collection at Meiji University," Transactions of AII, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering, vol. 69, no. 578 (2004): 163-168.

*3 FUJIOKA Hiroyasu, 2006-2008 Grant-in-Aid for Scientific Research, Report of Research Results, "Research on the Materials of Architect HORIGUCHI Sutemi," FUJIOKA Lab, Department of Architecture, Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology (2009).

*4 FUJIOKA Hiroyasu, HORIGUCHI Sutemi, Expressionist: In Search of the Total Work of Art, Chuokoron Bijutsu Shuppan (2009).

*5 Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Edo-Tokyo Open-Air Architectural Museum, "House of Koide and Sutemi Horiguchi - The Shapes and Colors on His Creative Works During the 1920s": Special Exhibition at Edo-Tokyo Open-Air Architectural Museum (2019).

*6 100 Years of Bunriha Study Group, "100 Years of BUNRIHA: Can Architecture Be Art?" Asahi Shimbun (2020).

*7 A. Roegholt, et al., Sutemi Horiguchi, Bunriha and the Amsterdam School, Museum Het Schip (2023).

Aside from the above notes, all information is based on interviews by the National Archives of Modern Architecture with the HORIGUCHI Sutemi Architectural Archives.

章解説パネル1章 | 1500H×600W

1-1 | 1188H×420W

分離派建築会設立と表現主義の影響

Bunriha Kenchiku Kai and the Influence of Expressionism

1920-29

堀口捨己(ほりぐち すてみ、1895年1月6日-1984年8月18日)は、岐阜県原田郡上保村に生まれる。中学までは岐阜にて、高校時代は岡山にて育ち、1917年東京帝国大学建築学科に入学し、卒業後は大学院に進み近代建築史を専攻した。1920年には、5名の同級生と共に結成した分離派建築会の運動で中心的な役割を果たし、当時の工芸技術に偏重していた建築の在り方に反抗する。1921年には、平和記念東京博覧会(1922年開催)工芸課技術員として第二会場池塔、動力館・機械館などを担当して、実作の機会に恵まれる。1923年7月から翌年1月まで、ヨーロッパ各地に赴き、当時の西欧の近代建築の実作を熱心に見て回り、併せて、近代建築の動向に関する情報収集を行った。帰国後、建築設計に本格的に取り組み、小出邸(1925年)、紫煙荘(1926年)、双鐘居(1927年)などの作品を世に問う。1920年代の作品群は、西欧の近代建築の動向を学びながら自らの表現を模索する姿が見える。例えば、平和記念東京博覧会では曲線を用いた造形で表現主義の影響、紫煙荘の外観ではオランダのベルヘンで見た曲面茅葺屋根をもつ住宅やアールデコの幾何学的な構成の影響、双鐘居ではフランク・ロイド・ライトの影響などが見られる。

ヨーロッパからの帰国後には「現代オランダ建築」(岩波出版、1924年)を出版する。そこには西欧における近代建築の動向をいち早く日本に伝えるという使命感、新たな建築をつくるという気概が感じられる。また、紫煙荘と双鐘居の竣工後には、自ら作品集を編集出版しており、紫煙荘作品集の中では「建築の非都市的なものについて」という論考を添えて、関東大震災後の住宅にあり方として、田園的な環境に立つことの意味や自然素材の重要性を説く。ここには、堀口が、オランダの建築家ヤル・コルビュジエなど、西欧の近代建築家たちが、メディアを有効に活用することで近代建築家の理念を広めていたという現実に学んだことが見て取れる。

HORIGUCHI Sutei (6 January 1895-18 August 1984) was born in Kaminoh Village, Mushihiro District, Gifu Prefecture, Japan. He was raised in Gifu until junior high school and then in Okayama during high school. In 1917 he entered the Department of Architecture at Tokyo Imperial University, and after graduating he continued with postgraduate studies in the history of modern architecture. In 1920, he and five of his classmates played a central role in the Bunriha Kenchiku Kai movement, which rebelled against the engineering-oriented architecture of the time. In 1921, as an engineer in the construction division of the Tokyo Peace Exhibition (held in 1922), he had the opportunity to be involved with real projects, and was in charge of buildings including the Power Pavilion and Machinery Pavilion and Ford Tower at the second venue.

From July 1923 until April the following year, he traveled through various parts of Europe, eagerly observing the built examples of Western modern architecture at that time, in addition to gathering information on trends in modern architecture.

After returning to Japan, he began to grapple with architectural design in earnest, producing such works as the Koide House (1925), Shierso (1926), and Soshokyo (1927). His designs of the 1920s reveal a search for his personal expression while learning from Western modern architecture. For example, one can see the influence of Expressionism in the curvilinear forms used for the Tokyo Peace Exhibition; the influence of Art Deco geometric compositions, and of houses with curved thatched roofs in Bergen, the Netherlands, in the exterior of Shierso; and the influence of Frank Lloyd Wright in Soshokyo.

After his return from Europe, he published the book *Modern Dutch Architecture* (Iwanami Publishing, 1924). This reveals his sense of obligation to quickly convey to Japan the trends in Western modern architecture, and his determination to create a new type of architecture. In addition, after the completion of Shierso and Soshokyo, he edited and published a collection of his own works. The section on Shierso includes an essay titled "On Non-Urban Architecture," in which he explains the significance of being located in a rural environment and the importance of using natural materials when building houses after the Great Kanto Earthquake (1923). Here one can see that HORIGUCHI learned from the ways that Western modern architects, including the Dutch architects and Le Corbusier, were effectively using mass media to spread their ideas.

上部写真
双鐘居 居間の絨毯デザイン / Soshokyo Carpet Design in the Living Room

分離派建築会 結成前後

Before and After the Formation of
Bunriha Kenchiku Kai

1917年9月に東京帝国大学工科大学建築学科に入学した堀口は、1920年7月の卒業前に、同期16人中、石本喜久治、瀧澤眞弓、森田慶一、山田守、矢田茂の5名と共に、分離派建築会を結成した。その活動は日本初の本格的な近代建築運動の芽生えとされる。彼らは、当時の工芸技術中心の考え方に反抗し、芸術表現としての建築という理想を提示し、出版物や展覧会を通じて、その考えを広めた。「分離派」という名称は、教授であった伊東忠太の建築史講義でウィーン分離派の話聞いて感激したこと由来するという。

分離派建築会第一回作品展は、1920年7月に日本橋白木屋で開催された。堀口は、分離派建築会「分離派建築会宣言と作品」(岩波書店、1920年)の編集を担当し、宣言文の考案に加え、表紙に掲載された「斎場」卒業制作、「ある会堂」美術館への草案」などの作品を発表し、重要な役割を果たした。この時期の堀口の作品には、変化のある白いヴァリウム、大きな屋根、アーチ型の開口、特定の伝統的様式の排除などの特徴が見られる。分離派建築会の活動は1928年の第7回展まで続くことになる。



分離派建築会第一回展覧会、1920年(撮影: 青柳) 左より堀口
Bunriha Kenchiku Kai First Exhibition in 1920 (Photo by Aoyama) Above Left is HORIGUCHI



「分離派建築会宣言と作品」(岩波書店) 1920年
Bunriha Kenchiku Kai Declaration and Works
(Dainippon Shoten, 1920)



「分離派建築会宣言と作品」内の宣言の頁
Page of Declaration, Bunriha Kenchiku Kai
Declaration and Works

In September 1917, HORIGUCHI entered the Department of Architecture at Tokyo Imperial University. Before graduating in July 1920, he established the Bunriha Kenchiku Kai together with 16 of his classmates, including ISHIMOTO Kikui, TAKIZAWA Mayumi, MORITA Keichi, YAMADA Mamoru, and YADA Shigeru. Their activities are considered to be the budding of Japan's first authentic modern architecture movement. Opposed to the engineering and technology-based thinking of that time, they presented the ideal of architecture as an artistic expression, disseminating this notion through publications and exhibitions. The origin of the name "Bunriha" is said to be due to their being deeply impressed by the Vienna Secession, which they first heard about in lectures on the history of architecture given by professor ITO Chuta.

The first exhibition of works by the Bunriha Kenchiku Kai was held in July 1920 at the Nihonbashi Shirokiya Department Store. HORIGUCHI was in charge of editing the Bunriha Kenchiku Kai's *Bunriha Kenchiku Kai Declaration and Works* (Iwanami Shoten, 1920). In addition to drafting the text of the declaration, he played an important role in publishing of works such as "Saio / Funeral Hall," which appeared on the cover, his graduation project, "A Meeting Hall," and "Draft for a Museum." HORIGUCHI's work during this period can be seen to be characterized by varied white volumes, large roofs, arch-shaped apertures, and the elimination of specific traditional styles.

The activities of the Bunriha Kenchiku Kai would continue until their seventh exhibition in 1928.

建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌

1-2 | 420H×297W

平和記念東京博覧会

The Tokyo Peace Exhibition

1922 | 東京都台東区 Taito, Tokyo | 未詳 Unknown | 現存せず Demolished

平和記念東京博覧会は、第一次世界大戦終結後、平和の記念および日本産業の発展を願って、東京府の主催により、1922年3月10日から7月31日まで上野公園で行われた博覧会である。上野公園中心部から不忍池周辺に多くの展示施設が建てられ、それらは伊東忠太、佐野利器が顧問となり、東京府技師が中心となって設計された。画期的だったのは、大学を卒業したばかりの堀口捨己や瀧澤真弓らが設計職員として応用されたことである。

会場は、上野公園中心部の第一会場、不忍池周囲の第二会場から成り、堀口は第二会場内、不忍池の西側全面に建ち並ぶ展示施設群一帯から順に電気興業館、動力館・機械館、交通館・航空館、鉱産館・林業館一に加えて「油塔」を設計した。これらが、堀口にとって初めての実施作品であったが、幸運にも立派な規模のデビュー作に恵まれたことになる。規模のみならず、動力館・機械館では木造のアーチ型トラス構造を用いて展示に適した無柱空間を作りつつ、外観では曲面主体の表現主義的な造形を実現し、質においても優れた作品であった。

The Tokyo Peace Exhibition was held in Ueno Park from 10 March until 31 July 1922, under the auspices of the Tokyo Prefectural Government, to commemorate the peacetime following the end of World War I, and to promote the development of Japanese industry. Many exhibition facilities were built, ranging from the center of Ueno Park to the edge of Shinobazu Pond, designed by Tokyo Prefecture engineers with advice from ITO Chuta and SANJO Toshikata. One pioneering aspect was the appointment to the design team of university graduates such as HORIGUCHI Sutemi and TAKIZAWA Mayumi.

The central area of Ueno Park was the first venue, and the edge of Shinobazu Pond was the second venue. In the second venue, Horiguchi designed a group of exhibition facilities aligned along the entire west edge of Shinobazu Pond, comprising, in order from the north, the Electric Industry Pavilion, Power Pavilion and Machinery Pavilion, Transportation Pavilion and Aviation Pavilion, and the Mining and Forestry Pavilion, as well as the Pond Tower.

These were HORIGUCHI's first realized works, and he was fortunate to be able to make his debut at such an impressive scale. Superlative works not only in scale, but also in quality, the Power Pavilion and Machinery Pavilion used arch-shaped timber truss structures to create column-free spaces suitable for exhibitions, while their exteriors were implemented as expressionistic forms primarily composed of curved surfaces.

1 第二会場 油塔・展示館・車道
The Second Exhibition Venue,
Pond Tower | Photos by Unknown



2 第二会場 動力館・機械館・
展示施設等集まる一帯 | 未詳
The Second Exhibition Venue,
Model of Power Pavilion and
Machinery Pavilion and
Pond Tower |
Photos by Unknown

1-2

1-3-1 | 420H×297W

渡欧と 『現代オランダ建築』の出版

European Tour and Publication of
Modern Dutch Architecture

堀口は、1923年7月から翌年1月にかけて、ヨーロッパ各地に赴き、パルテノン神殿やイスタンブールのアヤ・ソフィアなどの歴史的な名作と共に、当時の西欧の近代建築の実作を熱心に見て回った。残されている写真の数からすると、近代建築の数が圧倒的に多く、その訪問国も、オランダ、ベルギー、ドイツ、チェコ、ハンガリーと広範囲にわたる。併せて、近代建築の動向に関する情報収集集の確であり、例えば、オランダでは、アムステルダムには「ウエンデエンヘン」という雑誌、ロッテルダムには「デ・スタイル」誌という対照的な出版物があり、そうしたメディアを通じて多様な近代建築の主義がなされていることを正確に把握できていた。また、雑誌や著作による主張が近代建築運動にとって重要であることも理解していた。

1923年から1924年に渡欧した際に見聞したオランダ表現主義を中心とする近代建築は、帰国後に『現代オランダ建築』（岩波書店、1924年）として出版された。その序文を読むと、オランダに続いて他の国の建築の動向も紹介する意向であったことがわかる。しかし、設計の実務の忙しさの中で、オランダ以外の出版は実現しなかった。

From July 1923 until April the following year, HORIGUCHI traveled throughout Europe, eagerly observing the built works of Western modern architecture at that time, along with historical masterpieces such as the Parthenon and the Hagia Sophia in Istanbul. As may be deduced from the number of photos he left behind, he saw an overwhelmingly large number of works of modern architecture, and visited a wide range of countries, including the Netherlands, Belgium, Germany, Czechoslovakia, and Hungary. In addition, he was able to gather accurate information about trends in modern architecture. For example, through media such as the two contrasting publications in the Netherlands, *Wendingen* magazine in Amsterdam and *De Stijl* journal in Rotterdam, he was able to precisely grasp the diverse claims being made about modern architecture. He also appreciated the importance for the modern architecture movement of advocacy through magazines and books.

After returning to Japan, the observations of modern architecture made during his visit to Europe from 1923 to 1924, focused on Dutch Expressionism, were published as *Modern Dutch Architecture* (Iwanami Shoten, 1924). Reading the preface to the book reveals that his intention was to introduce architectural trends in other countries, after the Netherlands. However, due to becoming busy with design practice, publications about countries other than the Netherlands never materialized.

1-3

1-3-2 | 420H×297W



1-3

渡欧後に堀口が撮影した建築群。
Photos by HORIGUCHI
on the tour.

1 家業並みの住宅(ワグネル・ベルリン)
House with Thatched Roof
(Berlin, Netherlands)

2 集合住宅(ミケル・デン・ラウラ設計、
アムステルダム)
Housing (Designed by Michel
de Klerk, Amsterdam)

3 公共浴場(アウグスト・デュック設計、
アムステルダム)
Public Bath
(Designed by Duuk, Hilversum)

4 集合住宅(クラウス・アケメス設計、
アムステルダム)
Housing (Designed by Klink
and Cramer, Amsterdam)

5 シュタイン・タウの教会
(オットー・ワグネル設計、ライプツィヒ)
Church at Stein
(Designed by Otto Wagner, Wien)

6 アインツル・邸(ロベール・アケメス設計、
ブリュッセル)
Socialist House (Designed by
Joseph Hoffmann, Brussels)

7 アインツル・邸(ロベール・アケメス設計、
ブリュッセル)
Socialist House (Designed by
Joseph Hoffmann, Brussels)

8 ベンセン・大工屋敷記念館
(ヨセフ・マリア・オブリッヒ設計、
ドイツ)
Monument Tower for the marriage
(Designed by Joseph Maria O'Brien,
Darmstadt, Germany)

9 AEGタービン工場
(ペーター・ベッセル設計、ベルリン)
AEG Turbine Factory
(Designed by Peter Behrens, Berlin)

10 ワグネル・グロピウスの仕事場
(未詳)
Work Space of Walter Gropius
(Location Unknown)

1-4 | 420H×297W

小出邸

Koide House

1925 | 東京都文京区 Bunkyo, Tokyo | 木造 Wooden・2F | 延床面積 TFA 148.5m² |

1996年に解体され、江戸東京たてもの園に複製保存

1996 Demolished and Moved to Edo-Tokyo Open-Air Architectural Museum

仮設であった平和記念東京博覧会施設を除くと、堀口による初の恒久的な実施作品であり、最初の住宅作品である。外観は、宝形屋根と水平な庇を特徴とし、敷地に対して東西南北に合わせた斜めに配置している点は、その後の住宅作品に通じる特徴である。玄関ホールは、天井の格子にはめ込まれた照明、水平な板による格子など、抽象的な構成への関心が見られる。玄関における下駄箱・傘立て・外巻かけを一体化した立体造形や南東和室の収納の壁面も、線と面を組み合わせた抽象的デザインである。鶯鶯、銀、赤、黒などの色彩の使用では、色に関する関心も現れている。

この住宅で試みられた諸要素が、紫雲荘に現れるという意味で、堀口の出発点といえる作品である。実施図面内の平面図上の客間は、江戸東京たてもの園の平面図では、食堂と記載されており、長年使用される中で使われ方が変わったものと思われる。

Leaving aside the temporary facilities for the Tokyo Peace Exhibition, this is HORIGUCHI's first permanent realized work, and his first residential work. The exterior is characterized by a hipped roof and horizontal eaves, and it is aligned with the cardinal points so as to be diagonally arranged within the site, a feature that continues in subsequent residential works. In the two rooms on the north and south of the entrance hall, an interest in abstract composition is evident in the spaces created by a regular sequence of columnar walls and ceiling lattices, the lighting embedded in the ceiling latticework, and the decorative shelves made of horizontal boards. The three-dimensional object that integrates shoe storage, umbrella stand, and coat rack in the entrance hall, and the storage wall in the Japanese-style room to the southeast, are also abstract designs combining lines and surfaces. An interest in color is evident in the use of olive, silver, red, and black.

In the sense that the various elements HORIGUCHI experimented with in this residence also appear in Shienso, this work can be considered his point of departure. The guest room shown on the floor plans in the construction documents is described as a dining room in the floor plan at the Edo-Tokyo Open-Air Architectural Museum, suggesting that the function of the room changed over many years of use.

1 外観 | 撮影 | 未詳
Exterior | Photo by Unknown



2 客室 | 文京区江戸東京たてもの園複製資料館
Drawing Room | Photo by SAMA

1-4

1-5 | 1188Hx420W

紫烟荘

Shienso

1926 | 埼玉県川口市 Kawaguchi, Saitama |
木造 Wooden・平屋一部2階建て Flat, partly 2F |
延床面積 TFA 107m² |
竣工2年後に焼失 Burnt down two years after completion

堀口の初期の代表作であり、呉服商・牧田清之助(1887-1947)の馬場の休憩所である。牧田は、『現代オランダ建築』(岩波書店、1924年)を見て、堀口に茅葺屋根の洋館の設計を依頼した。

敷地全体の配置図を見ると、本屋以外に、南東に隣接する付属屋、北側に離れて馬小屋が建つ。本屋外観は、緩い曲面の茅葺屋根という田園的な雰囲気と、水平な軒を備えた幾何学的な形態の組み合わせからなる。内部は、天井の高い居間を中心に、書斎、サンルーム(図面上はベランダと表記)、テラスと水面を取り囲む。居間では、テラスに面する円形と長方形を組み合わせた開口部、絨毯の華やかな幾何学的なパターンなど、当時欧米で流行っていたアールデコ・デザインとの類似性も見られる。家具図からは、堀口が細部まで自身のデザインを徹底しようとしたことがわかる。茅葺屋根の中には、約5畳の和室が納められており、屋根から飛び出た窓から玄関へのアプローチを眺めることができる。

堀口は、1927年に『紫烟荘圖集』(洪洋社)にて、写真と『建築の非都市的なものについて』という論考を発表する。ここにメディアを重視するという姿勢や、田園を尊重し日本の茶室を評価するという、後の堀口の建築思考の萌芽が表れている。



外観 | 撮影: 未知 | Exterior | Photo by Unknown



居間 | 撮影: 未知 | Interior | Photo by Unknown

写真・出版: 『紫烟荘圖集』洪洋社、1927。/ Sources: Shienso Drawing Collection (Koyosha)

An exemplary work from HORIGUCHI's early years, this is a rest area for the horse stable of dry-goods merchant MAKITA Seinosuke (1887-1947). Having read *Modern Dutch Architecture* (Iwanami Shoten, 1924), MAKITA commissioned HORIGUCHI to design a Western-style building with a thatched roof.

The overall site plan shows that, in addition to the main building, there is an adjoining outbuilding to the southeast and a detached stable some distance to the north. The exterior of the main building comprises a combination of a gently curved thatched roof that suggests a rural ambience, and a geometric form with horizontal eaves. The interior is centered on a high-ceilinged living room, with a study, a sunroom (called a veranda on the plans), a terrace, and an enclosed area of water. In the living room, the combination of circular and rectangular openings facing the terrace and the beautiful geometric pattern of the carpet resemble the Art Deco design that was popular in Europe and the United States at that time. The furniture drawings show HORIGUCHI's attentiveness to his own designs, down to the smallest detail. Within the thatched roof is a Japanese-style room of approximately five tatami-mats in size, and the window projecting through the roof provides a view of the approach route to the entrance.

In 1927, HORIGUCHI published photographs and an essay titled "On Non-Urban Architecture" in *Shienso Drawing Collection* (Koyosha, 1927). Here, we can see the seed of HORIGUCHI's later architectural thinking in his stance of prioritizing mass media, his respect for the countryside, and his appreciation of the Japanese tea-house.

1-6 | 1188Hx420W

双鐘居

Soshokyo

1927 | 東京都文京区 Bunkyo, Tokyo |
木造 Wooden・2F | 延床面積 TFA 512m² |
現存せず Burnt down

紫烟荘と同じ施主、牧田清之助のために改修設計された大邸宅である。双鐘居という名称は、この住宅から、近くの寺と教会両方の鐘の音をきくことができるという立地に由来する。南北に長い住宅であり、その中心部では、深いポーチのついた玄関を入ると、正面に小さな光庭、左手に広間、右手に食堂という構成であり、光庭の奥に大きな客間がある。玄関回りはじめ、外観は、フランク・ロイド・ライトの初期住宅を連想させる部分が多い。

広間や客間の壁面は装飾的な要素も多く、家具や照明器具は、図面にみられるように、細かくデザインされている。絨毯のデザインも堀口自らが行っており、その図面も残っている。絨毯デザインのパターンは、紫烟荘では、輪郭が円形であるがより細かい要素は三角形や四角形であったが、双鐘居では、細かい要素が円形であり、それらがより自由なパターンで集合するという構成になっている。これらのデザインは、1920年代の西欧の抽象絵画を思わせる。



外観 | 撮影: 未知 | Exterior | Photo by Unknown



居間 | 撮影: 未知 | Living Room | Photo by Unknown



居間の絨毯デザイン | Carpet Design in the Living Room

This is renovation design of a mansion for the same client as Shienso, MAKITA Seinosuke. The name Soshokyo (double-bell house) originates in its location, where one can hear from the house the bells of both a nearby temple and a church. The house is long from north to south, having entered the central entrance hall, with its deep porch, in front is a small light garden, there is a reception room on the left and a dining room on the right, with a large guest room beyond the light garden. The exterior, including the entrance area, has many aspects that are reminiscent of Frank Lloyd Wright's early houses.

The walls of the reception room and guest room contain many decorative elements, and the furniture and lighting fixtures have been precisely designed, as can be seen in the drawings. HORIGUCHI also designed the carpets himself, drawings of which have survived. The design of the carpet pattern at Shienso has circular contours with smaller elements of triangles and squares, whereas at Soshokyo, the smaller elements are circular and arranged in a freer pattern. These designs are reminiscent of Western abstract paintings of the 1920s.

章解説パネル 2 章 | 1500Hx600W |



国際様式への傾倒

Devotion to the International Style

1930-39

堀口の作風は、「吉川邸」(1930年)以降、2つの点で大きく変化する。第一点は、建築のみならず庭園のデザインを一体的に考えるという傾向が強くなることである。「岡田邸」(1933年)では、住宅の内部に合わせて和洋の庭園デザインを巧みに使い分けるとい手法が見られる。建築と庭園を共に全体を構成する要素としてとらえるという考え方は、その後の堀口の作風における基本方針になっていく。

第二に建築デザインにおいては、1920年代に見られた表現主義的な要素や装飾的な要素が消え去っていく。この点は、西欧における近代建築の展開とも軌を一にする。ちなみに西欧では、1910年代末から20年代にかけて第一次世界大戦による社会不安もあり、曲面や鋭角を多用して感情移入を行った表現主義が主流であったが、20年代にはオランダのデ・ステイルに見られる線と面による抽象的な構成、あるいは幾何学的な表現を重視するアル・デコ(1925年様式ともいわれる)などの動向が強まる。更に20年代後半には、白い箱型、非装飾、非対称性、機能重視の合理的表現が主流になり、それが「国際様式(インターナショナル・スタイル)」と呼ばれて近代建築運動の主流となっていく。堀口は「大島測候所」(1938年)と「若狭邸」(1939年)という、国際様式を実践した作品によって、日本の近代建築を代表する存在になった。

堀口のこうした変化自体が日本の近代建築受容の特徴を示しているように思える。しかし、よく観察してみると、ミース・ファン・デル・ローエやヴァルター・グロピウスのような近代建築を主導した人物たちも、1920年代には、表現主義から国際様式への変遷を遂げている。むしろ、「様式なき様式」という考えを主張する堀口は、心から国際様式に心酔していたのかどうか、なぜ30年代後半には茶室研究を行い始めるのか、という点を考えることに、日本の近代建築受容の特性を発見する手掛かりがある。

Following the Kikkawa House (1930), HORIGUCHI's style changed greatly in two respects. First, there was a strong tendency to consider not only the architecture but also the design of the garden as an integral part of the house. The Okada Residence (1933) displays a skillful use of Japanese and Western garden design ideas to suit the interior of the house. This approach, in which architecture and gardens are considered as elements that together make up a unified whole, would become a fundamental principle in HORIGUCHI's subsequent style.

Second, the expressionistic and decorative elements that may be seen in his architectural designs from the 1920s disappeared. This coincides with the development of modern architecture in Western Europe. Incidentally, in Western Europe from the end of the 1910s to the 1920s, due to the social unrest caused by the First World War, mainstream architecture was Expressionist, conveying emotion through the frequent use of curved surfaces and sharp angles, but during the 1920s there was an increasing tendency toward Art Deco style (also known as 1925 style) with abstract compositions or geometric expressions comprising lines and surfaces, as seen in De Stijl in the Netherlands. Furthermore, in the late 1920s the rational expression of white boxes, lack of decoration, asymmetry, and emphasis on function became mainstream. Known as the "International Style," this became the mainstream movement of modern architecture. HORIGUCHI's Oshima Island Weather Station (1938) and Wakasa Residence (1939) were implementations of the International Style, making him a leading figure of modern architecture in Japan.

This change in HORIGUCHI himself might be seen as exemplifying the traits of Japan's reception of modern architecture. However, closer inspection reveals that other leading figures in modern architecture, such as Ludwig Mies van der Rohe and Walter Gropius, also underwent a transformation from Expressionism to the International Style during the 1920s. Instead, clues to the traits of Japan's reception of modern architecture might be discovered through a consideration of whether or not HORIGUCHI, who advocated the notion of "style without style," genuinely admired the International Style, and why he began conducting research on teahouses in the late 1930s.

上部写真
大島測候所 外観 | 撮影・未詳 / Exterior of Oshima Island Weather Station Main Building | Photo by unknown

2-1 | 1188Hx420W

2-1

吉川邸

Kikkawa House

1930 | 東京都品川区 Shinagawa, Tokyo |
鉄筋コンクリート造一部鉄骨造 RC, partly Steel-2F |
延床面積 TFA 983m² | 現存せず Demolished

大崎の高台約3000坪の敷地に建つ、旧岩国藩主の吉川家の大邸宅である。設計は、1926年に駿河台の敷地で設計が始まり、初期案では、紫煙荘を思わせる大屋根が一部に設けられていた。この大屋根付き案は、分離派展にも出品されている。

配置は、敷地北側の門から入り、西側に設けられた玄関に至るが、その間の壁は滑らかな動線のために曲面壁となっている。この玄関の位置と住宅の主要部である、客間、食堂、居間、和室を南面配置することで平面計画の方が決まった。平面的な広がりに対して、中庭を導入することで、動線上の変化や換気通風などの環境的問題の解決を行っている。外観の大きな特徴である深い庇による水平・垂直の強調は、堀口が今まで以上に国際様式へと関心を移した証である。竣工後に堀口は「一混泥土住宅図案集」(1930年、構成社書房)を刊行し、コンクリート構造の意義を認めている。ただ、構造方式と平面計画の整合性、単純かつ抽象的なヴォリュームといった「近代建築の理念」に対する執着はあまり感じられない。また、後の堀口で重要な特色となる、庭園デザインと建築の統合という方法論は、この住宅において如実に表れている。



外観 |
撮影・渡辺義雄
Exterior | Photo by
WATANABE Yosihiro

玄関ホール |
撮影・渡辺義雄
Entrance Hall | Photo
by WATANABE Yosihiro

図典
『一混泥土住宅図案集』
構成社書房、1930年
Source: One Concrete
House Drawing Collection
(Koseisha Shobo)

Built on a site of approximately 3000 tsubo (9900 square meters) on high ground in Osaki, this is the mansion for the Kikkawa family, the former feudal lords of the Iwakuni domain. The design was begun in 1926 for a site in Surugadai, and the initial proposal included a large roof that was somewhat reminiscent of Shienso. This proposal with a large roof was also displayed at the Bunriha Exhibition.

The site is accessed through a gate on the north side, leading to the entrance on the west side, and the walls in between are curved so as to produce a smooth circulation path. The floor plan was determined by the location of the entrance and the main parts of the house, including the guest room, dining room, living room, and Japanese-style room arranged on the south side of the house. Introducing a courtyard garden to the expansive plan solved environmental problems related to changes in the circulation paths and ventilation. The emphasis on horizontal and vertical lines due to the deep eaves, a major feature of the exterior, may be adduced to show that HORIGUCHI's interests were shifting even further toward the International Style. After the completion of construction, HORIGUCHI published One Concrete House Drawing Collection (Koseisha Shobo, 1930), in which he acknowledged the significance of the concrete structure. However, there is little sense of an adherence to the "ideals of modern architecture" in the consistency of the structural system and floorplan, or the simplicity and abstraction of the volumes. The methodology of integrating garden design and architecture, which would become an important feature of HORIGUCHI's later work, is truly evident in this residence.

2-2 | 420H×297W

岡田邸

Okada House

1933 | 東京都品川区 Shinagawa, Tokyo |

和風 Japanese Style Block: 木造 Wooden・1F、洋館 Western Style Block: 鉄筋コンクリート造 RC・1F |
延床面積 TFA 166㎡ | 現存せず Demolished

敷地の西側が和館、東側が洋館という構成であり、渋井清（浮世絵研究者）が芸術者のために建てた実家である。工務店の設計に基づいて和館の工事がかなり進んだ時点で、案に満足していなかった地主が、堀口に設計を依頼して、和館の設計変更及び洋館の追加がなされた。結果的には、中底型の住宅の東側に洋館のスペースが付くという構成になった。

この住宅の大きな課題は、和洋共存をどう解決するかということであった。堀口は、道路側では和館と洋館が同時に見えないようにし、庭では、和館の前に様々な草花が彩を生み出す「草庭」の実現を試み、洋館前は芝生庭として、両者の間に細長い小水面を作ることで、両者が共存することの違和感を避けた。竣工後に出版された作品集『一宅と其庭園』（渋井社、1936年）において、設計主旨文「住宅の和洋折衷と云う事」の中で、和洋の並立は好ましくないが、両者から裝飾的な要素を排除して、抽象的な構成にまで還元すれば、共存する違和感がなくなり、自然な親近性をもつと述べている。

This house was built by SHIBUI Kiyoshi (a scholar of ukiyoe woodblock prints) for his geisha mistress, comprising Japanese-style wing to the west of the site and Western-style wing to the east. The Japanese-style wing was originally designed by the contractor, but after considerable progress on its construction, the client became dissatisfied with the design. He commissioned HORIGUCHI to redesign the Japanese-style wing and add a Western-style wing. The resulting composition was a courtyard-style house with a single-span Western-style wing attached to the east side.

The major theme of this house was how to resolve the coexistence of Japanese and Western styles. HORIGUCHI avoided a sense of incongruity by preventing the Japanese-style wing and the Western-style wing from being visible from the street simultaneously, and by creating a "grass garden" with a variety of colorful flowers in front of the Japanese-style wing, and a lawn garden in front of the Western-style wing, with a small strip of water between the two. In the design statement "Declaration of a House that Merges Japanese and Western Styles" contained in *One House and Its Garden* (Koyosha, 1936), a collection of his works published after the completion of construction, he stated that the juxtaposition of Japanese and Western styles is undesirable, but if the decorative elements are removed from both and they are reduced to abstract compositions, the coexistence would no longer feel incongruous and they would have a natural affinity.

2-2

2-3 | 1188H×420W

大島測候所

Oshima Island Weather Station

1938 | 東京都大島町 Oshima, Tokyo |

庁舎・参考室 Administration & Reference Building: 鉄筋コンクリート造 RC・2F、延床面積 TFA 549.25㎡ / 観測塔 Observation Tower: 鉄筋コンクリート造 RC・5F、延床面積 TFA 47.75㎡ | 現存せず Demolished

伊豆大島に作られた中央気象台の測候所関連の複合施設であり、元々の庁舎・参考室・観測塔に加えて、官舎および他の地区の観測所すべてを堀口が設計した。堀口の兄が気象学者だった関係で、堀口は日本各地の測候所を設計する機会に恵まれたが、この大島測候所が最大であった。

水平な線を強調した施設群と観測塔の垂直な線の対比的構成、および観測塔の直方体をずれた円筒形による幾何学的構成が、この作品の近代的なデザイン性を高めている。円筒形は、上部の観測機器への風の影響を少なくするために採用されており、ずれば、意図的にシンメトリーを崩すためであった。庁舎・参考室の外観は水平連続窓を強調した外観も近代建築らしい表現であり、また、その外壁は、1寸角の白いタイル張り仕上げ、全6棟の官舎は薄黄色塗りペンキ仕上げという色も近代のイメージを高めている。ただ、堀口の文章では、単に目的を満たすだけではなく記念性をもたせたいといった記述も見られる。大島測候所は、そうした記念性の願望があつてこそ、単なる国際様式建築の一例であることを超えて、近代建築の強い姿を後世に伝えたのであった。



外観全景 |
撮影：米津
Exterior of the Main Building |
Photo by Uematsu

観測室 |
撮影：米津
Observation Room |
Photo by Uematsu

This is a weather station complex for the Central Weather Bureau built on Oshima island in Izu, for which HORIGUCHI designed the former village office, archive, and observation tower, as well as all of the government buildings and other weather stations in the area. Because his brother was a meteorologist, HORIGUCHI was given opportunities to design weather stations throughout Japan, culminating with the Oshima Island Weather Station.

The modern design aspects of this work are emphasized by the contrasting composition of the horizontal lines of the facility buildings and the vertical lines of the observation tower, as well as the geometric composition of the rectangular volume and offset cylindrical form of the tower. The cylindrical form was adopted to reduce the effects of wind on the observation equipment in the upper part, and its misalignment was intended to break the symmetry. The emphasis on continuous horizontal windows on the exterior of the government office and archive is also a typical expression of modern architecture. The exterior walls are clad with 1-sun (30mm) square white tiles and all six government buildings are finished in light yellow paint, which also enhances the modern image. However, in HORIGUCHI's writings it may be seen that, in addition to simply fulfilling a purpose, he wanted to give a sense of commemoration. It is precisely because of this desire for a sense of commemoration that the Oshima Island Weather Station transcends being merely an example of International Style architecture, conveying a strong image of modern architecture to future generations.

2-3

2-4 | 1188H×420W

2-4

若狭邸

Wakasa House

1939 | 東京都目黒区 Meguro, Tokyo |
木造、一部鉄筋コンクリート造 Wooden, partly RC・地下1階、
地上2階 1B, 2F | 建築面積 8A 116.5m²、延床面積 TFA 223.7m² |
現存せず Demolished

東京都目黒区の約700坪の敷地に建ち、竣工時は国内で最も近代的设计の特徴を備えた住宅であった。住宅を南面させるため、敷地に対しては細長い平面が約45度傾かれた形に配置されており、住宅から伸び出細長いプールがこうした斜めの配置を強調する。

この住宅では、白い外壁（仕上げは、モザイクタイル）、箱型ヴォリューム、横長の開口、ガラスブロックを用いた2層分の開口部、吹き抜け、屋上庭園、斜路など、国際様式（インターナショナル・スタイル）と呼ばれていた近代建築の多くの要素を見ることができ、戦前の日本の近代住宅の代表作という評価を受けてきた。しかし、当初はすべて鉄筋コンクリート造の計画であったが、日中戦争に伴う資材統制が始まり、大半が木造に変更されたという経緯があった。展示図面の中には、すべて鉄筋コンクリート造の初期案もあり、比較すると、構造の変更にもかかわらず、デザインが大きく変更されていないことがわかる。屋上庭園の防水も木造陸屋根の上に防水を行っているため、後には、切妻屋根が設けられることになった。



表外観 | 撮影：渡辺義雄 / South Exterior | Photo by WATANABE Yoshio



居間 | 撮影：渡辺義雄 / Living Room | Photo by WATANABE Yoshio

Built on a site of approximately 700 tsubo (1860 square meters) in Meguro-ku, Tokyo, this house was, at the time of its completion, one of the most characteristically modern designs in Japan. In order to have the house face south, the long, narrow plan was rotated about 45 degrees in relation to the site, and a long, narrow pool extended out from the house so as to emphasize this diagonal layout.

With white exterior walls (finished with mosaic tiles), a box-shaped volume, horizontal openings, a two-level opening filled with glass blocks, an atrium, a rooftop garden, a ramp, and many other elements of what was becoming known as the International Style of modern architecture, this house is regarded as a masterpiece of pre-Second World War Japanese modern houses. However, though it was originally planned to be constructed entirely of reinforced concrete, due to wartime restrictions on the use of materials, it was changed to a mostly timber structure. Some of the drawings in the exhibition show early proposals for a structure entirely of reinforced concrete, but despite the structural changes, the final design was largely unchanged. The waterproofing for the rooftop garden was placed on top of the timber flat roof, which was later replaced by a gabled roof.

2-5 | 420H×297W

2-5

忠霊塔設計競技応募案

Competition of Chureito Memorials to War Dead

1939 | 設計図案懸賞 応募案 Entry for Design Competition | 実現せず Unbuilt

忠霊塔とは、国家や君主のために忠誠心をもって出兵し戦死した者の納骨堂と霊を弔うための塔から成る。1939年、発足したばかりの財団法人大日本忠霊顕彰会は、護国のために戦死した人々の分骨を安置して忠霊を顕彰するため、国内各地の市町村及びアジア各地の戦跡に忠霊塔を建設することとなり、その設計図案を広く一般から募集した。

雑誌『現代建築』第10号（1940年4月発行）は、この設計競技の内容と応募案を40頁にわたって特集し、堀口捨己案（東京市の忠霊塔）が堀口自身の解説文付きで大きく取り上げている。

堀口案は、靖国神社を玉川沿いを想定した広い敷地に移動して軸線の突き当りに配置し、軸線を挟んで、忠霊塔、国史館、体育施設などを左右対称に配置した国民広場を整備するという壮大な計画であった。忠霊塔施設の中央には、コの字型配置の壁に囲まれた塔が建つ。解説によれば、塔の外観は、相輪塔を想像させるが、佛教的表現を意図したものではなく、五つの相輪は、東洋の五族興隆を象徴し、オリンピックマークのように5大陸つまり世界を表象するものであった。しかし、相輪塔、バラ窓のような円形開口、列柱などの要素を見ると、堀口の作品の中でも最も歴史主義的な印象を与える。

The Chureito Memorial comprises an ossuary and a tower for mourning the souls of those who fought and died in loyal service to their nation and ruler. In 1939, in order to honor the spirits and enshrine the ashes of those who died in war, defending their nation, the newly established Dainihon Churei Kenshokai decided to construct Chureito Memorials in cities, towns, and villages throughout Japan, as well as at battlefields sites in Asia, and solicited design proposals from the general public.

The magazine *Gendai Kenchiku*, No. 10 (April 1940) published a 40-page feature on the submissions to this design competition, highlighting the proposal by HORIGUCHI Sutemi (for the Tokyo Chureito) with a commentary written by HORIGUCHI himself.

HORIGUCHI proposed a grand plan that relocated Yasukuni Shrine to a large site beside the Tama River, set at the end of an axis, and created a national public plaza with the Chureito, a national history museum, and a cluster of sports facilities arranged symmetrically across this axis. In the center of the Chureito facility stands a tower surrounded by walls in a U-shaped arrangement. According to his written explanation, the exterior of the tower is reminiscent of pagoda finials, but the intention was not a Buddhist expression. The five finials symbolize the prosperity of the five Asian races, and like the Olympic logo, symbolize the five continents, that is to say, the world. However, elements such as the pagoda finials, the circular opening like a rose window and the colonnade give it the most historicist impression among all of HORIGUCHI's works.

章解説パネル3章 | 1500Hx600W



「日本」の探求
Searching for "Japan"

1936-58

堀口は、「大島測候所」や「若狭邸」などの、日本における国際様式の代表的な作品を実現することと並行して、1930年代後半から40年代にかけて茶室や数寄屋建築の研究に傾倒して、学位論文「書院造と数寄屋造の研究」(1944年)、著書「利休の茶室」(岩波書店、1949年)などの研究業績と著作を残した。欧米の近代に学ぶという風潮が主流であった時代に、日本独自の文化や伝統にも注目するという姿勢と距離を世に広めることになる。

こうした「日本的なもの」への関心は、近代建築の探求の放棄ではなく、むしろ「日本的なもの」が、素材の重視や抽象的構成といった点で近代建築に通じ、かつ、近代建築に新たな展開と視座を与えるという積極的意味を備えているという理解に基づいていた。

日本文化の持つ、例えば檜皮葺や白木柱に見られる簡素・無装飾性、量感による規格性などの要素は、西洋文化に対して独自性と普遍性を併せ持つとともに、それは日本が先駆けて実行してきたことである。^(*)「日本的なもの」によって、西洋から一方的に学ぶのではなく、西洋と対等に渡り合えると考えに至ったのである。

この時期の堀口は、利休、茶室あるいは和歌など日本の古典文化に一層深く傾倒していくが、それは決して余技などではなく、真剣に向き合うことによって古きものを知悉するとともに自らの美の表現を研ぎ澄ました。戦中戦後ということもあって、多くの実作を手掛けているとはいえない。しかし、八勝館みやぎの間(1950年)や後のさくらの間・さくの間(1958年)などにおいて、数寄屋研究から学んだことを、実践に結び付けることになる。これらの作品によって、堀口は、現代数寄屋建築設計の第一人者という評価を得ることになる。

^(*) 堀口の茶室研究に関する説明は、喜岡洋保「表現者・堀口捨己 総合芸術の探求」(中央公論美術出版、2009年)の「2 日本への関心」84-123頁を参照した。

In parallel with the realization of exemplary International Style works in Japan, such as Oshima Island Weather Station and the Waikasa House, from the late 1930s to the 1940s HORIGUCHI devoted himself to the study of teahouses and sukiya-style architecture, and has left us his research findings and publications, including his dissertation "Study of Shoin-style and Sukiya-style Architecture" (1944) and the book *Rikyu's Tearooms* (Iwanami Shoten, 1949). In an era when the mainstream tendency was to learn from Western modernity, he propagated an attitude and viewpoint of paying attention to Japan's unique culture and traditions.

This interest in "Japan-ness" was not an abandonment of the pursuit of modern architecture, but rather based on an understanding that "Japan-ness" was similar to modern architecture in its emphasis on materials and abstract compositions, and has the positive significance in providing new developments and perspectives for modern architecture.

Elements of Japanese culture, such as the simplicity and lack of ornamentation seen in cypress-bark roofing and untreated wooden posts, and standardization due to the tatami-mat module, have both uniqueness and universality with regard to Western culture, and Japan has been a pioneer in their implementation.^(*) He came to believe that, rather than unilaterally learning from the West, "Japan-ness" would enable competing with the West on an equal footing.

During this period, HORIGUCHI became more deeply devoted to classical Japanese culture, such as Rikyu, the teahouse, and waka poetry. This was not merely a hobby, but rather a serious effort that enabled him to become familiar with old things and to hone his own expression of beauty. During the postwar period, he was not able to realize many works. However, he put into practice what he had learned from his studies of sukiya in works such as Miyuki no ma (1950) and the later Sakura no ma and Kiku no ma (1958). These works earned HORIGUCHI a reputation as the leading figure in modern sukiya architectural design.

^(*) For an explanation of HORIGUCHI's research on teahouses, see "Interested in Japan," chapter two of FUJIOKA Hiroyasu, HORIGUCHI Suteki, Expressionist: In Search of the Total Work of Art (Chuooron Bijutsu Shuppan, 2009), 84-123.

上左写真
数寄屋にて 1958年7月 | 撮影: 栗田 / Kikun | Photo by Unknown

3-1 | 420Hx297W

茶室への関心の高まり

Growing Interest in Teahouses

3-1

堀口は、早くから茶室への関心を示している。『紫雲荘図集』(洪洋社、1927年)に掲載された「建築の非都市的なものについて」において、驚きと敬意を示しつつ「非常に優れた洗練された徹底した伝統を作り上げたもの」として茶室建築を挙げている。また、「建築様式論叢」(六文館、1932年)掲載の「茶室の思想的背景と其構成」では、茶の湯を日常生活の形式を借りて美を求める「生活構成の芸術」と呼び、その「表現の可能な野は遙かに広い」ものであるとして、日常生活の中に取り込まれた総合芸術の姿を見ている。生活構成のものとなるのは庭園(露地)、建築(茶室)や道具であり、床の間があり人の動作が介在する調和した芸術であると茶の湯を称揚している。この昭和初期という時代には日本は国際的孤立と国威発揚の風潮の中で、「日本的なもの」への関心を高めていた。堀口は西洋の永遠なる美の規範としてギリシャ・アテネのパルテノン神殿と対比しつつ、茶室の持つ非相称性に日本が育んだ精神的な美を見出した。このような非相称性、さらに簡素・明快な平面計画と構造、素材美の尊重と自然調和といった「日本的なもの」の要素はモダニズム建築に通ずるものであり、時代を超えた普遍的価値を模索する合理主義的思考にも見合う。堀口はモダニズムと日本の建築的伝統とを関連付けて茶室・数寄屋建築を探求した嚆矢といえる。

HORIGUCHI showed an early interest in teahouses. In the essay "On Non-Urban Architecture," published in *Shienso Drawing Collection* (Koysha, 1927), he expresses surprise and respect while referring to teahouse architecture as having "created a superbly refined and comprehensive tradition." In "The Composition and Ideological Background of the Teahouse," published in *Essays on Architectural Style* (Rokubunkan, 1932), he called the tea ceremony "an art of life composition" that seeks beauty by borrowing forms from everyday life, and he described its "broad expressive possibilities" as taking the appearance of a total work of art that may be incorporated into everyday life. He extolled the tea ceremony as a harmonious art form that interposes human movement between garden (*ryō*), architecture (*chashitsu*), and utensils, as well as tokonoma alcoves. During the early Showa period, Japan was experiencing international isolation and increasing national pride, with a rising interest in "Japan-ness." In contrast with the Parthenon in Athens, Greece, regarded as the Western criterion for eternal beauty, in the asymmetry of the teahouse HORIGUCHI found a spiritual beauty cultivated in Japan. Aspects of "Japan-ness"—such as asymmetry, as well as simple and lucid floorplans and structures, respect for the beauty of materials, and harmony with nature—are common to modernist architecture, as well as being compatible with rational thinking in pursuit of universal values that transcend time. HORIGUCHI may be considered a pioneer in the search for commonalities between modernism and the Japanese architectural traditions of the teahouse and sukiya architecture.

3-2 | 420Hx297W

茶室の実測調査

Survey Drawings of Teahouses

3-2

堀口は、戦局に半々物資統制や建築にかかわる制限が深刻化し、設計活動もままならない中、茶の湯や茶室の研究にますます傾倒していった。桃山・江戸初期に遡る文献資料を丹念に紐解きつつ、如庵、忘茶斎、孤蓬庵山雲床茶庭、待庵、湘南亭、聚光院閑恩の茶庭など実測を精力的に行い、茶室に関する多くの研究成果を著している。『現代建築・千利休特輯号』(現代建築社、1940年)では、利休を「三百五十年前の文化人」であり「創意に満ちた知識人」「決して過去の人間ではない独創的な工芸家・建築家」として、そこにモダニズムにも通じる、色褪せない新しい総合芸術家の姿を見ている。その遺構「妙喜庵待庵」について「露り口から中に入った時…背すじの中へサツト何もかもを受けた感じで…ぞくぞくとして我を忘れた」と深い賞讃を示している。また、この時期に大和小泉の慈光院に滞在して石州茶室と書院等の研究を行っている。日本の伝統的建築として茶室・数寄屋への見識を広げるとともに表現者としての模索と探求を深めた。このことが戦後に続く彼の思考と活動の方向を定めたことになる。

As wartime restrictions on materials and architecture became increasingly severe, HORIGUCHI was unable to continue his design activities, and he devoted himself to the study of the tea ceremony and the teahouse. While painstakingly unraveling documents dating back to the Momoyama and early Edo periods, he energetically undertook measured surveys of places including Jo-an teahouse, Bo-en tea garden, Koho-an Sanunpo tea garden, Tai-an teahouse, Shonan-tei-teahouse, Juko-in Kan-in tea garden, and published many of his research findings on the teahouse. In *Modern Architecture: Sen no Rikyu Special Edition* (Gendai Kenchiku-sha, 1940), he describes Rikyu as "a cultural figure from 350 years ago," "an intellectual full of originality," and "a creative artisan and architect who was never a man of the past," and in connection to modernism, he saw a total artist whose newness would never fade. He expressed his deep admiration for the remains of the Tai-an teahouse at Myōkō-an temple, writing, "When I entered through the nijiriguchi... I immediately felt something in my spine... I shuddered and lost control of myself." Moreover, during this period, he was staying at Jiko-in temple in Yamato-Kozuru in order to study the Sekishu teahouse and shōin. In addition to improving his discernment of the teahouse as traditional Japanese sukiya architecture, he intensified his explorations as an expressionistic artist. This set the direction for his thinking and activities that continued after the war.

3-3 | 1188Hx420W

3-3

八勝館 八事店

Hashshokan Yagotomise

1950, 1953, 1958 | 愛知県名古屋市 Nagoya, Aichi | 木造 Wooden・1F

八勝館は名古屋郊外の風光明媚な景勝地に立地する1925年創業の高級料亭である。堀口は1950年の「みゆきの間」、「残月の間」を皮切りに、1953年「湯殿」、1958年に「さくらの間」「きくの間」を手掛けるなど、20年近くにわたり八勝館の様々な施設を設計している。それらは、堀口が戦中期に行った茶室・数寄屋研究の成果が存分に発揮されたもので、古典への深い知識と洞察に依拠しつつ現代性を併せ持つ、彼の戦後を代表する作品群となっている。

Hashshokan is a high-quality ryotei restaurant established in 1925, located in a scenic area on the outskirts of Nagoya. HORIGUCHI designed various facilities at Hashshokan over a period of nearly 20 years, beginning with the Miyuki no ma and Zangetsu no ma in 1950, followed by the Yuden in 1953, then the Sakura no ma and Kiku no ma in 1958. As the fruits of HORIGUCHI's research on tea houses and sukiya architecture during the wartime period, these are exemplary postwar works that fully demonstrate his deep knowledge and insight into the classics as well as modernity.



みゆきの間 床の間
撮影：渡辺義雄
Miyuki no ma, interior
Photo by WATANABE Yoshio

みゆきの間 Miyuki no ma

「みゆきの間」は、1950年に名古屋で第1回の国民体育大会が開催される際に昭和天皇皇后陛下の御宿泊所として建てられた座敷である。16畳の主座敷と10畳の次の間からなり、敷地の高低差により高床になっている。東、南側に幅1間の入側がまわり、その隅に月見台となる濃緑が庭側に張り出すようにつく。広間と次の間境には、堀口自らの考案により、鍍金の障子紙を張った、島々が連なる海を思わせる文様の障子が立てられている。翌1951年度の日本建築学会賞作品賞を受賞している。

Miyuki no ma was built in 1950 as accommodation for the Showa Emperor and Empress when the first National Sports Festival of Japan was held in Nagoya. Comprising a 16-tatami-mat main room and 10-tatami-mat antechamber, it has a raised floor due to the differences in elevation on the site. There is a 1-kan (1.5 meter) wide entrance on the east and south sides, and attached adjacent is an open engawa projecting into the garden, which serves as a moon-viewing platform. At the boundary between the large room and the antechamber, there are fusuma sliding doors covered with fabric inset with pieces of gold leaf in a design reminiscent of a chain of islands on the sea, designed by HORIGUCHI himself. The following year, in 1951, it received a design award from the Architectural Institute of Japan.

さくらの間 Sakura no ma

「さくらの間」は斜面に張り出すように増築された五畳寄座敷の座敷である。3畳半の主座敷と7畳半の次の間、2畳の踏み込みからなり、次の間から主座敷へと続く空間の広がりおよび庭との一体感が得られるように構成されている。堀口の数寄屋造りが完成域に達したことが感じられる作品といえる。各部屋境の障子はすべて引き込めるように設計され、また縁側の椅子に座ったときと座敷に座ったときで視線が同じになるように縁側を下げている。天井は蛍光灯を用いて格子状ルーバーに和紙を張っている。

Sakura no ma is an extension projecting across sloping ground, with a tiled, hipped roof. It comprises a 3.5-tatami-mat main room, a 7.5-tatami-mat antechamber, and a 2-tatami-mat alcove, composed so as to produce a spatial expansion from the antechamber to the main room, as well as a sense of unity with the garden. This work shows that HORIGUCHI's sukiya-style architecture had attained a highly accomplished level. The fittings between each of the rooms are all designed to slide away, and the engawa is lowered so that the sightlines are the same when sitting on a chair in the engawa and when sitting on the tatami mats. The ceiling has latticed louvers covered with washi paper, and uses fluorescent lighting.

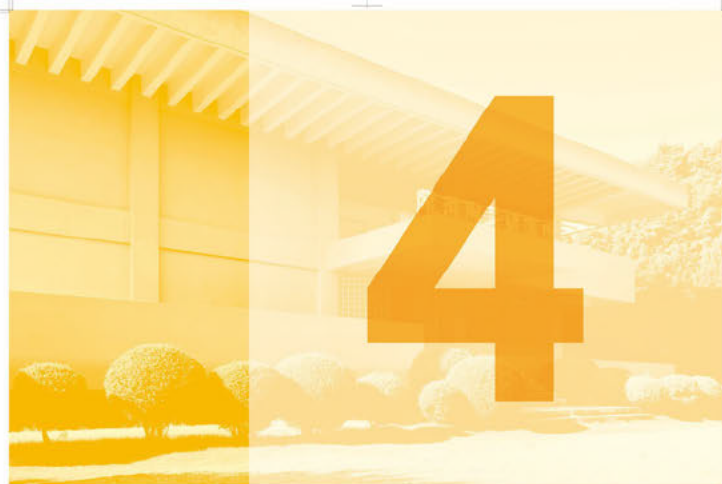
きくの間 Kiku no ma

「きくの間」は二部屋であったものを改築してひとつの空間として再構成したものである。24畳の主座敷に入側と間口2間の床が付き、格天井や長押を用いた格式ある座敷となっている。「さくらの間」とともに堀口の数寄屋として高い完成域に達しており、同時に現代の照明設備や空調設備を用いて、使い勝手と機能性に気を配ったものとなっている。

The Kiku no ma is a reconstruction of two rooms into a single space. It comprises a 24-tatami-mat main room with a 2-kan wide alcove on the entry side, and a formal tatami-mat room with a coffered ceiling and nagashi beams. Together with the Sakura no ma, it shows the attainment of a highly accomplished level in HORIGUCHI's sukiya-style architecture, while at the same time paying attention to convenience and functionality by using modern lighting and air-conditioning equipment.

建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌

章解説パネル 4 章 | 1500Hx600W



伝統と近代の境界を超えて

Transcending the Boundaries between Tradition and Modernity

1954-84

この時期の堀口捨己の作品は、一見、木造を主とした現代数寄屋建築と鉄筋コンクリートを用いたモダニズム建築に大別される。しかし、各要素がロジカルに構成されている点、伝統や様式に縛られず機能に対応した技術を活用している点、そして色や幾何学形態を用いた独自の表現という点では、表面的に異なる二つの作風はかけ離れたものではなかった。壮年期の茶室と庭園研究において近代建築史の観念を通して伝統を解釈したように、堀口にとっては歴史の中の書院造・数寄屋造と同時代のモダニズム建築は繋がっており、伝統と近代の境界を超えて数寄屋建築もまた同時代の建築であった。

堀口は、1949年に明治大学教授に着任して建築学科の創設に貢献し、1965年の退官までに同大学の駿河台、和泉、生田の各キャンパスの校舎を設計した。時期を同じくして手掛けたのが静岡雙葉学園であった。これらの校舎群は、戦前の邸宅や測候所と比べて規模が大きく、大スパンの骨組構造、バルコニー、外部のスロープや階段といった、目的に合った要素の組み合わせと構成が、堀口の戦後モダニズム建築における大きな特徴となっている。

堀口は、過去の様式建築からの脱却を志し「様式なき様式」を追求する一方で、色による視覚効果を大切に。かつて紫雲荘や双鶴居の絨毯に表された豊かな色彩は、形を変えて立体的に展開され、サンパウロ日本館（1954年）のネオン照明、静岡雙葉学園の礼拝堂（1962年）の天井やガラスブロック、常滑市立陶芸研究所（本館）（1961年）の玄関ホール天井照明とガラスブロック、展示室の内装などにその特徴がみられる。

1963年から1967年には「茶室おこし絵図集」（全12巻）（墨書書房）を監修し、万葉公園（1955年）、欄居（1965年）、有楽苑（1972年）、清恵庵（1973年）といった実作においても建築史、庭園史、茶の湯、和歌の造詣を存分に発揮し、周囲の景観を取り込んだ自然物と時間的なものと共にある建築を残した。

At first glance, HORIGUCHI Sumi's works from this period can be broadly divided into contemporary *sukiya* (teahouse) architecture made mainly of wood, and modern architecture that uses reinforced concrete. However, these two superficially different styles were not so far apart, in terms of the logical composition of each component, in terms of the adoption of technology that corresponds to function rather than being bound by tradition or style, and in terms of the distinctive expression of colors and geometric forms.

In the same way that HORIGUCHI interpreted tradition through the concepts of modern architectural history in studies of teahouses and gardens undertaken during his mature years, he considered historical *shoin* style and *sukiya* style to be connected to the modernist architecture of his time, and also considered *sukiya* architecture to be of his time, transcending the boundaries of tradition and modernity.

HORIGUCHI became a professor at Meiji University in 1949, and contributed to the founding of its Department of Architecture. By the time of his retirement in 1965, he had designed educational buildings on that university's Surugadai, Izumi, and Ikuta campuses. During the same period, he worked on the design of buildings for Shizuoka Futaba Gakuen. In comparison to the scale of his prewar residences and weather stations, these educational buildings are composed of large, long-span frames and comprise purpose-built elements such as balconies and exterior ramps or stairs, which are major features of HORIGUCHI's postwar modernist architecture.

While HORIGUCHI pursued a "style without style" that aspired to overcome architectural styles of the past, he also paid attention to the visual effects of color. The abundant colors previously used in the carpets of Shienso and Soshokyo were transformed into three-dimensional shapes, as can be seen in the neon lighting of the Japanese Pavilion for the Sao Paulo Exposition (1954), the ceiling and glass blocks of the Shizuoka Futaba Gakuen chapel (1962), and the ceiling lighting, glass blocks in the entrance hall, exhibition room of the main building of Tokoname Ceramics Research Institute (1961).

From 1963 to 1967, he supervised the production of the 12-volume book series *Miniature Architectural Papercraft of Teahouses* (Bokusui Shobo), and also comprehensively demonstrated his knowledge of architectural history, garden history, the tea ceremony, and waka poetry in works such as Manyo Park (1955), Kariya Teahouse (1966), Uraizen Garden (1972), and Seikei-in (1973), as well as his knowledge of the surrounding landscape. He left behind architecture that is in harmony with natural objects and temporal things while incorporating the surrounding landscape.

上野平典
常滑市立陶芸研究所 外観 | 撮影：文化庁国立近代建築資料館 / Exterior of Tokoname Ceramics Research Institute | Photo by NAMA

4-1 | 420Hx297W

サンパウロ日本館

Japanese Pavilion for Sao Paulo Exposition

1954 | ブラジル サンパウロ Sao Paulo, Brazil |
日本館 Main Building: 木造一部鉄骨造 Wooden, Partly Steel - 1F, 展示場 Exhibition Hall:
木造 Wooden - 1F | 建築面積 BA 570m² | 日本館と庭園のみ現存 Partly Existing

1954年1月から1年間、サンパウロ市でサンパウロ400年記念祭と博覧会が開催された。博覧会場となる180万平米のイブラペラ公園の敷地計画と恒久的な各種施設が建築家・オスカー・ニーマイヤーを中心に創られた。日本館は在ブラジルの聖市400年祭典日本人協力会によって建てられたもので、国内の池に突き出た崎の敷地を得て、展示場（非現存）、日本館と庭園が創られた。

当初より展示場は仮設施設として、日本館は恒久施設として計画された。所蔵資料から日本館のみ鉄骨の小屋組みであることが確認できる。また、1953年6月の透視図には枯山水が描かれている一方、10月の透視図では庭に池が描かれた。案の変更と同時に、敷地内の玄関・水屋、日本館と展示場の位置関係が調整されたことが資料から読み取れる。

The city of Sao Paulo commemorated its 400th anniversary with an exposition that opened in January 1954 and lasted for one year. It was held in the 18 million square meter Ibirapuera Park, for which architect Oscar Niemeyer was in charge of the site planning and the design of various permanent facilities. The Japanese Pavilion was built by the Japanese Association for the 400th Anniversary of the Holy City of Brazil, and the exhibition hall (demolished), Japanese Pavilion, and garden were constructed on a promontory that juts into a pond in the park.

From the outset, the exhibition hall was planned as a temporary facility, while the Japanese Pavilion was planned as a permanent facility. From archival documents, it may be ascertained that only the Japan Pavilion used a steel-framed roof. A perspective drawing dated June 1953 depicts a *karensansui* (dry landscape garden), while a perspective drawing dated October 1953 depicts a pond in the garden. At the same time as changes were being made to the proposal, it may be ascertained from the documents that there were adjustments to the site locations of the *genkan* (entrance), *mizuya* (preparation room), Japanese pavilion, and exhibition venue.

サンパウロ400周年祭 402号
Poster of Sao Paulo Exposition



4-2 | 1188H×420W

4-2

万葉公園・
万葉館・万葉亭

Manyo Park, Manyo-kan, Manyo-tei

万葉館 Manyo-kan

1955 | 神奈川県足柄下郡 Ashigarashimo-gun, Kanagawa |
補強コンクリートブロック造一部鉄筋コンクリート造 RC・RC・1F |
建築面積 BA 79.464㎡ | 現存せず Demolished

万葉亭 Manyo-tei

1955 | 神奈川県足柄下郡 Ashigarashimo-gun, Kanagawa |
木造 Wooden・1F | 建築面積 BA 17.3㎡ | 現存 Existing

万葉集の中に温泉地として足柄の土肥が詠まれていることから、湯河原に万葉公園が計画された。万葉集の歌から「舟塗りの大橋」、「尾花逆さき」、「黒木もて造れる室」が引用され、園内に「万葉橋」、草葺きで皮付き柱を用いた茶屋「万葉亭」、蔵かな行まいの「万葉館」がランドスケープと一体で創られた。堀口は、園内の道に万葉集にでてくる草木を植え、各々に万葉集の歌を示し、自然風物を歌とともに享受しながら散策できる公園を構想していた。

所蔵資料から、「万葉神社」、「滝」、「引き水（湧き水の取り入れ）」の配置計画や、現存しない万葉館のかつての雄姿と、そこで展示された文化財の一部を知ることができる。



1, 2 万葉亭内観 | 撮影：未詳 / Manyo-tei interior | Photo by Unknown
3, 4 万葉亭内観 | 撮影：未詳 / Manyo-tei interior | Photo by Unknown

Manyo Park was planned in Yugawara, because this area is described in the *Manyōshū* (the oldest known collection of waka poetry) as a hot spring resort, formerly known as *Ashigara no Toi*. The *ni-nuri no ohashi* (vermillion painted bridge), *obana-gyaku buki* (silver grass covered roof), and *kuroki-mote-zukuru shitsu* (room made of unbarked wood) were taken from poems in the *Manyōshū*. Inside the park, the Manyo Bridge, the Manyo-tei tea house with its thatched roof and unbarked wooden posts, and the solemn-looking Manyo-kan were built so as to be unified with the landscape. HORIGUCHI envisioned a park in which visitors could stroll along paths lined with plants and trees that are mentioned in the *Manyōshū*, each representing one of its waka poems, and enjoy thereby the natural ambience of the park along with the poems.

From the materials in the collection, one can learn about the planned layout of Manyo Shrine, the waterfall, and the springwater intake, as well as the former appearance of the no-longer extant Manyo Hall, and some of the cultural assets that were exhibited there.

4-3 | 1188H×420W

4-3

静岡雙葉学園

Shizuoka Futaba Gakuen

静岡雙葉学園講堂・体育館

Shizuoka Futaba Gakuen Auditorium and Gymnasium
1957 | 静岡県静岡市 Shizuoka | 鉄骨鉄筋コンクリート造 SRC・4F |
建築面積 BA 846㎡・延床面積 TFA 2750㎡ | 現存せず Demolished

静岡サンモール修道会 修道院・礼拝堂

Shizuoka Saint-Maur Monastery (Monastery and Chapel)
1962 | 静岡県静岡市 Shizuoka | 修道院様 Monastery: 鉄筋コンクリート造 RC・B1F・4F, 礼拝堂様 Chapel: 鉄筋コンクリート造 RC・B1F・2F |
現存せず Demolished

静岡雙葉学園普通教室棟

Shizuoka Futaba Gakuen Classroom Building
1964 | 静岡県静岡市 Shizuoka | 鉄筋コンクリート造 RC・B1F・5F |
建築面積 BA 533㎡・延床面積 TFA 3167㎡ | 現存せず Demolished

旧駿府城の内濠と外濠に挟まれて位置するカトリックの修道院と女子中学校・高等学校の校舎である。1957年に講堂・体育館、1962年に修道院・礼拝堂、1964年に普通教室棟が完成した。

講堂・体育館は敷地内北東に位置する。体育館の上部に講堂がある。温暖な気候を活かし、各階南側に吹きさらしの露台が設けられ、東・西面にはスロープが張り出している。屋上に斜路で上がることができ、そこにはベンチとパーゴラが設けられた。堀口の校舎建築にみられる外部通路（階段・斜路）の傾向は、明治大学和泉体育館（1956年）に続くものであった。

修道院・礼拝堂は敷地内北西に位置する。修道院は地階、1・2階が食堂、裁縫室、集会室、客室等を含む共用・管理スペース、3・4階が居室である。一方、礼拝堂は、地階に講習室、1・2階に礼拝堂があり、露台を兼ねた渡り廊下で修道院と繋がっている。礼拝堂の玄関ホール、礼拝堂内部、2階ホール等の内装のタイル、ガラスブロック、塗装には、金・銀・赤・黄・青・緑の色が用いられた。当館が静岡雙葉学園に関して所蔵する資料は、主に修道院・礼拝堂の図面である。

普通教室棟は敷地中央に位置し、礼拝堂とは中庭を隔てて向かい合い、講堂・体育館とは視聴覚教室を含む渡り廊下で繋がっている。普通教室棟に関して当館が所蔵する資料は1956年時点の立面図4点と、配置図3点があり、初期時点から普通教室棟が計画され、少なくとも2度、配置計画に大きく変更があったことが判る。



講堂内観 | 撮影：未詳 / Interior | Photo by Unknown

Located between the inner and outer moats of the old Sunpu Castle in Shizuoka, these were buildings for a Catholic monastery and girls' junior and senior high school. The auditorium and gymnasium were completed in 1957, the monastery and chapel in 1962, and the classroom building in 1964.

The auditorium and gymnasium were located in the northeast part of the site, and the auditorium placed on the upper level of the gymnasium. Taking advantage of the warm climate, exterior balconies were installed on the south side of each floor, and ramps projected from the east and west sides. The rooftop was accessible by ramp, and contained benches and pergolas. HORIGUCHI's preference for external pathways (stairs and ramps) in school buildings continued with the Izumi Gymnasium at Meiji University (1956).

The monastery and chapel were located in the northwest part of the site. The ground, first, and second floors of the monastery contained common and administrative spaces, including a dining room, sewing room, meeting room, and guest room, with private rooms on the third and fourth floors. The chapel, on the other hand, had a training room on the ground floor and the chapel on the first and second floors, with an outdoor platform that also served as a corridor connecting to the monastery. Tiles, glass blocks, and paint in gold, silver, red, yellow, blue, and green colors were used for the interior design of the chapel entrance hall, chapel interior, and the hall on the second floor. The materials about Shizuoka Futaba Gakuen in the museum collection are mostly original drawings of the monastery and chapel.

The classroom building was located in the center of the site, facing the chapel across a courtyard, and connected to the auditorium and gymnasium by a sheltered exterior corridor that included an audiovisual classroom. The materials related to the classroom building held by the museum comprise four elevation drawings and three site layout drawings from 1956, indicating that the classroom building was part of the original plan, and that the site layout was changed at least twice.

4-4 | 1188H×420W

4-4

常滑市立陶芸研究所

Tokoname Ceramics Research Institute

1961 | 愛知県常滑市 Tokoname, Aichi |
鉄筋コンクリート造 RC・B1+2F |
建築面積 BA 354m²・延床面積 TFA 510.77m² |
現存 Existing

常滑市は古くから焼き物の産地であり、近代以降は土管、煉瓦、タイル等の陶業も栄えてきた。常滑市立陶芸研究所は陶芸の振興を目的とし、伊奈製陶株式会社創業者である伊奈長三郎の寄付により建設された。高台にあり、陳列室をもつ本館、宿直室、アトリエ、材料置き場、機械工場(窯場と機械室)から成る陶芸の研究・制作の専門機関として創られた。

本館は、深い庇、外壁や露台のモザイクタイル、光取りの屋根等の特徴がみられるが、これらはいずれも塩分を含む塩や潮風といった環境条件に対応したものとして堀口は解説している。当館の所蔵資料に含まれるのは主に常滑市立陶芸研究所の本館の青焼陶器である。これらから、陳列室の採光は、屋上にある硝子窓から取り入れた光を小屋根の天井に反射されルーバーを通じて投げたものであることや、吊階段の構造美を追求した設計上の工夫などが読み取れる。



模型写真 | 撮影: 未知 / Model | Photo by Unknown



模型写真 | 撮影: 未知 / Model | Photo by Unknown

Tokoname City has historically been a center of ceramics production, and in the modern era it has a flourishing ceramic industry of earthenware pipes, bricks, tiles, and so on. The Tokoname Ceramics Research Institute was built with a donation from INA Chozaburo, the founder of INAX Corporation, for the purpose of promoting ceramic art. Located on high ground, it is a specialized institution for ceramic research and production, comprising a main building with a showroom, a dormitory, an atelier, a material warehouse, and a machinery area (containing a kiln and a machine room).

The main building is characterized by deep eaves, mosaic tiles on the exterior walls and balconies, and a light-catching roof, all of which were designed to deal with the harsh environmental conditions of salt-laden fumes and sea breezes. The museum collection comprises mainly blueprint drawings of the main building of the Tokoname City Ceramic Research Institute. These drawings show the innovative design for the aesthetics of the suspended staircase, and the way that natural illumination in the showroom enters through glass windows on the roof, passing through louvers to reflect on the ceiling of the small roof.

4-5 | 1188H×420W

4-5

清恵庵

The "Seikeian" Tea Ceremony House

1973 | 佐賀県佐賀市 Saga |
木造 Wooden・1F | 建築面積 BA 65.5m²・延床面積 TFA 57.4m² |
現存 Existing | 共同: 早川正夫建築設計事務所 Collaborate with
Hayakawa Architect & Associates

堀口は1940年代前半に「庭の在り方」(『国際観光』、1940年)、「庭作りの伝え書き」(『1』)を執筆し、古橋の記念にこれらを含む「庭と空間構成の伝統」(鹿島研究所出版会、1965年)を上梓した。また、1968年の明治大学建築学科での講義「造園1」(『2』)では、庭園を「自然物を素材として含んで、大体系空間芸術であるが、時間的なものに関係がある」(『3』)と定義した。

清恵庵は、佐賀県立佐賀城公園内の外濠に面した場所に建てられ、四畳半の茶室と、七畳半の広間をもつ。公園内に育っていた落葉樹の樹木を活かし、公園を外露地と見立て、敷地を生垣で囲んで内露地が作られた。外濠の水面と蓮が生い茂る眺めは、広間の借景となっている。外堀に通じる階段は小舟でのアプローチを演出しているなど、周囲の自然物による景観と時間的なものが建築に取り込まれた。

リコーの創業者である市村清(1900-1968)の遺志により故郷佐賀県に寄贈され、県民の生涯学習(『4』)に開かれた茶室として、佐賀県立博物館 佐賀県立美術館が管理している。

- *1 「作庭記その他の伝書について」を含む論文。戦災で出版が叶わなかった『書院と茶室』のために書いた。
- *2 1968年4月26日に明治大学工学部教授であった木村徳蔵(1926-1984)が執筆。令和5年度の当館事業にて同オープンパブリックの媒体交換を実施した。
- *3 「自然物」は、植物、動物といった生命をもっているものと石を指す。「時間的なもの」は、自然物の成長、水の流れなどの流動的で移り変わるものを指す。
- *4 当時は、茶道、生け花、俳句、陶芸鑑賞などの多目的な社会教育の用途が目的とされた。



撮影: 未知 / 共同: 早川正夫建築設計事務所 / Courtesy of Hayakawa Architect & Associates

In the early 1940s, HORIGUCHI wrote *The Way of the Garden* (Kokusai Kanko, 1940) and *Written Traditions of Garden Making*^{*1}, and these two works were included in *Traditional Garden and Space Compositions* (Kajima Institute Press, 1965), published to commemorate his 70th birthday. Furthermore, in a 1968 lecture titled "Landscape Gardening 1"^{*2} in the Department of Architecture at Meiji University, he defined the garden as "largely a spatial art that includes natural objects as its materials, but is related to temporal things."^{*3}

Seikeian was built on a location facing the outer moat of Saga Castle Park, and contains a four-and-a-half-tatami-mat tearoom and a seven-and-a-half-tatami-mat hall. Taking advantage of the deciduous mulberry trees, the park was considered to be the outer tea garden, and the site was surrounded with a hedge to create the inner tea garden. The dense growth of lotus plants on the water surface of the outer moat becomes borrowed scenery for the hall. The stair leading to the outer moat creates an approach route for small boats, and the surrounding landscape of natural objects and temporal things have been incorporated into the architecture.

It was bequeathed by ICHIMURA Kiyoshi (1900-1968), the founder of Ricoh, to his hometown in Saga Prefecture, and is managed by the Saga Prefectural Museum and the Saga Prefectural Art Museum as a tea house open to lifelong learning^{*4} for people living in the prefecture.

- *1 The texts include "On Sakuteki and Other Ancient Treatises." It was written for Shoin and Teahouse, which was never published due to wartime damage.
- *2 Recorded on 26 April 1968 by KIMURA Norikuni (1926-1984), a professor at the School of Engineering, Meiji University. The open-reel recordings were converted to other media in 2023.
- *3 "Natural objects" refers to living things such as plants and animals, as well as stones. "Temporal things" refers to things that are fluid and changeable, such as the growth of natural things and the flow of water.
- *4 At the time, the intention was that it would be used to provide diverse social education in arts such as tea ceremony, ikebana flower arrangement, haiku poetry, and ceramics.

大型パネル「ごあいさつ」 | 1456H×1030W(B0) | 1点

ごあいさつ

文化庁国立近現代建築資料館は、昨年度、開館から10周年の節目を迎えました。開館以来、世界にも誇るべき我が国の建築と建築家に関する優れた資料を、建築家ご自身や建築事務所の方々等との信頼関係を築きながら収集し、毎年2回の展覧会によってその魅力を発信してまいりました。既によく知られていますように、我が国の建築領域は、伝統的技法を含む技術面はもちろん、自然や風景と調和した着想・デザインも相まって世界でも類を見ない強みとなっています。

実際、建築領域のノーベル賞ともいわれるプリツカー賞では、日本人建築家の受賞者が9人と世界一を誇っています。

文化庁としては、建築物やそれらが形成する街並みについて、起草から施工、メンテナンスなどの創造から保存継承、改修改築等の一連のプロセス全体について、我が国の重要な文化と捉え、その建築文化を世界に発信する取組を一層強化していきます。

我が国の建築領域の関係者がこれまでに創り上げてきた優れた建築物は、あらゆる場所に存在しており、社会の基盤として機能しています。こうした建築物に関する資料は、実は社会基盤自体の設計資料であり、文化的魅力の源泉となるほか、社会基盤に関する重要情報を含む、いわゆる“安全保障”にも関わるものとして適切に収集・管理されることが不可欠のものです。私どもは、こうした大切な資料についての使命感を持って、今後さらに強力に取組を推進・発展させていきます。

さて、この度は、開館10周年を超えて新しいフェーズに入る本資料館として、近現代日本建築の原点に改めて立ち返るべく、近代日本を代表する建築家のひとり堀口捨己(1895-1984)に関する展覧会を開催します。

堀口は、近代建築を日本に導入しつつ、一方で、茶道や数寄屋建築といった日本の伝統的な文化の再評価に尽力しました。そして、自ら多くの和歌をも詠みました。近代という国際化が進む時代にあって、日本が生んだ独自の伝統文化を大切に考えた人物でした。その考えは、現代の私たちにとっても重要な伝統と革新を如何に両立させて行くかという観点からも、大きな影響と重要な意味を残したと言えます。

本資料館は今後、アーカイブ、展示、発信に係る様々な関連団体との連携を強化し、多様な取組の場としての充実を目指しています。建築だけに閉じない多様性を持ち、国際社会を意識しながら日本の近代建築を象徴する建築家であった堀口捨己の生きる姿勢は本資料館が目指すところと重なるものであります。

本展において、日本近代が生んだ稀有な建築家・堀口捨己の貴重な資料群をご鑑賞いただき、近現代建築の面白さと日本伝統文化の魅力の双方を、存分に味わっていただければ幸いです。そして、建築が、歴史、伝統、諸芸術と深いかわりをもつ「文化」であることも再認識いただけるものと確信しております。

文化庁国立近現代建築資料館長 [文化庁企画調整課長] 寺本恒昌

Greetings

The Agency for Cultural Affairs' National Archives of Modern Architecture celebrated its tenth anniversary last year. Since its opening, the National Archives of Modern Architecture has been collecting excellent material about Japanese architecture and architects, which are highly regarded worldwide, while building relationships of mutual trust with architectural offices and the architects themselves, conveying their appeal through biannual exhibitions. As is already well known, Japan's architectural field has a strength that is unparalleled worldwide, not only in terms of technology, including traditional methods, but also in terms of concepts and designs that are in harmony with nature and the landscape.

In fact, the Pritzker Prize, regarded as the Nobel Prize of the architectural field, has been awarded to nine Japanese architects, the highest number of any nation in the world.

The Agency for Cultural Affairs considers the entire process of creation, preservation, and renovation of buildings as well as the cityscapes of which form a part, from drafting through to construction and maintenance, as an important part of Japanese culture, and will further strengthen efforts to disseminate this architectural culture to the world.

Excellent buildings created by people involved in the architectural field in Japan may be found everywhere, and they function as the foundation of society. The materials related to these buildings are, in fact, the design documents for social infrastructure itself. In addition to having a cultural appeal, they include important information on social infrastructure. It is imperative that they are properly collected and managed, as they relate to the so-called "security" of the nation. With a sense of duty toward these important materials, we will continue to promote and develop our efforts ever more vigorously.

On the occasion of the National Archives of Modern Architecture entering a new phase following its tenth anniversary, we once again return to the origin of modern and contemporary Japanese architecture by presenting an exhibition about HORIGUCHI Sutei (1895-1984), one of the leading architects of Japan's modern era. While introducing modern architecture to Japan, HORIGUCHI also devoted himself to a reappraisal of traditional Japanese culture, such as the tea ceremony and *sukiya*-style architecture. He also composed many *waka* poems. In the modern era of increasing globalization, he was someone who highly valued the distinctive traditional culture that emerged in Japan. His ideas can be said to have had great influence and important significance for perspectives on how to reconcile essential traditions with innovation, which is also important for us in the contemporary era.

In future, the National Archives of Modern Architecture aims to strengthen cooperation with various affiliated organizations for archiving, exhibiting, and disseminating information, and to develop it into a venue for undertaking various initiatives. With a diversity that was not limited to architecture, and an awareness of the international community, the attitudes of HORIGUCHI Sutei overlap with the goals of the National Archives of Modern Architecture.

By seeing this collection of valuable materials about HORIGUCHI Sutei, an uncommon architect born during Japan's modern era, we hope that visitors to the exhibition will fully appreciate the attraction of modern and contemporary architecture as well as the appeal of traditional Japanese culture. We are confident they will be reminded that architecture is a "culture" deeply related to history, tradition, and artistic accomplishment.

TERAMOTO Tsunemasa

Director, National Archives of Modern Architecture (NAMA), Agency for Cultural Affairs
(Chief of Planning and Coordination Division, Agency for Cultural Affairs)

致词

文化庁国立近現代建築資料館が去年迎えた開館10周年の里程碑。自開館以来、我一直在与建筑师本人和建筑事务所的各位等建立信赖关系的基础上，收集有关在世界上都应引以为傲的我国建筑和建筑师卓越资料，并通过每年两次的展览会传播其魅力。众所周知，我国的建筑领域，不仅在包含传统技法的技术方面，与自然和景观和谐共存的构思和设计方面，在世界上也都具有罕见的优势。

实际上，在被誉为建筑界诺贝尔奖的普利兹克奖中，日本建筑师的获奖者多达九人，位居世界之首。

文化庁认为，建筑物及其形成的街景，从起草到施工、维护等的创建、保存和传承、翻修改建等一系列过程，皆为我国的重要文化，并将进一步加强向世界传播该建筑文化的努力。

我国建筑领域的相关人员所创造的杰出建筑物遍布各地，作为社会的基础设施发挥着作用。这些建筑物的相关资料，实际上是社会基础设施本身的设计资料，除了是文化魅力的源泉外，也包含了与社会基础设施有关的重要资讯，作为与所谓的“安全保障”息息相关的存在，必须妥善收集和管理。我们秉持对这些重要资料的使命感，今后将会更有力地推进和发展相关工作。

此次，作为开馆10周年后进入新阶段的本资料馆，为了重新回到近現代日本建築の原点，我们将举办关于代表近代日本的建筑师堀口捨己(1895-1984)的展覧会。

堀口在将近代建筑引入日本的同时，也致力于重新评价茶道和数寄屋建筑等日本传统文化。并且，他自己也创作了许多和歌。他是在国际化进程日益加快的近代，重视日本独特传统文化的人物。从如何平衡重要的传统与革新这一观点而言，可以说他的思想在对现代的我们产生了重大的影响和重要的意义。

本资料馆今后将加强与档案、展示、传播等各种相关团体的合作，以充实作为多样化活动场所为目标。具有不局限于建筑的多樣性，同时关注国际社会，象征着日本近代建築的建築師堀口捨己の生存態度与本資料館の目標相契。

希望大家在本次展覧会中欣赏到日本近代诞生的稀有建築師堀口捨己の珍贵資料文獻，充分感受近現代建築の趣味和日本傳統文化の魅力。并且，深信大家也能再次认识到建築はと歴史、傳統、各種藝術有深層關聯的“文化”。

文化庁国立近現代建築資料館館長 [文化庁企画調整課長]

寺本恒昌

인사말

문화청 국립근현대건축자료관은 작년에 개관 10주년이라는 중요한 국면을 맞이했습니다. 개관 이후 세계에서도 자랑할 만한 일본의 건축과 건축가에 관한 뛰어난 자료를 건축가 본인이나 건축 사무소 관계자분들과 신뢰 관계를 구축하면서 수집하여, 매년 2번의 전람회를 개최해 매력을 알렸습니다. 이미 잘 알려진 바와 같이 일본의 건축 영역은 전통적인 기법을 포함한 기술 면은 물론 자연, 풍경과 조화를 이룬 작심, 디자인도 어우러져 세계에서도 유례없는 강점을 지니고 있습니다.

실제로 건축 영역의 노벨상이라고 불리는 프리츠커상은 일본인 건축가 수상자가 9명으로 세계에서 가장 많습니다.

문화청은 건축물과 건축물이 형성하는 거리들, 기원부터 서글, 유지보수 등의 창조부터 보존 및 계승, 수리 및 개축 등과 같은 일련의 과정 전체를 일본의 중요한 문화로 인식하고 이러한 건축 문화를 세계에 알리는 활동을 한층 강화해 나가겠습니다.

일본의 건축 영역 관계자가 지금까지 만들어 온 뛰어난 건축물은 다양한 곳에 존재하며 사회의 기반으로 자리 잡았습니다. 이러한 건축물에 관한 자료는 실제로 사회 기반 자체의 설계 자료이며, 문화적 매력의 원천이 될 뿐만 아니라 사회 기반에 관한 중요 정보를 포함하는, 이른바 “안전 보장”과도 관련 있는 것으로 적절한 수집, 및 관리를 필요로 합니다. 저희는 이러한 중요 자료에 관하여 사망관을 가지고 앞으로 더욱 강력하게 활동을 추진하고 발전시켜 나가겠습니다.

그러하여 이번에는 개관 10주년을 넘어 새로운 국면에 접어드는 본 자료관으로서, 근현대 일본 건축의 원점으로 다시 한번 되돌아가기 위하여 근대 일본을 대표하는 건축가 중 한 명인 호리구치 스테이(1895-1984)의 전람회를 개최합니다.

호리구치는 근대 건축을 일본에 도입하는 한편 다도와 다실 건축과 같은 일본의 전통적인 문화의 재평가를 위해 힘썼습니다. 그리고 직접 와카(和歌, 일본 전통 시)도 지었습니다. 근대라는 국제화가 확대되는 시대에 일본이 낳은 독자적인 전통문화를 소중한 것으로 생각해 인물이었습니다. 이러한 생각은 현대의 우리에게도 중요한 전통과 혁신을 어떻게 양립시켜 나갈지에 관한 관점에서 보았을 때도 지대한 영향과 중요한 의미를 남겼다고 할 수 있습니다.

본 자료관은 향후 아카이브, 전시, 공개와 관련한 다양한 관련 단체와 제휴를 강화하고, 다양한 활동의 장으로서 충실하도록 노력하고 있습니다. 건축만으로 끝나지 않는 다양성을 지니고 국제 사회를 의식하면서 일본의 근대 건축을 상징하는 건축가였던 호리구치 스테이의 살아가는 자세는 본 자료관이 목표로 하는 부분과 일치합니다.

본 전시에서 일본 근대가 낳은 희유한 건축가 호리구치 스테이의 귀중한 자료들을 감상해 주시고, 근현대 건축의 재미와 일본 전통문화의 매력 모두를 마음껏 만끽해 주신다면 기쁠 것 같습니다. 그리고 건축이 역사, 전통, 여러 예술과 깊이 연관되는 ‘문화’인 점도 다시 인식하게 되시리라 확신합니다.

문화청 국립근현대건축자료관 관장 (문화청 기획조정과장)

테라모토 츠네히사

大型パネル「謝辞」 | 1456H×1030W(B0) | 1点

謝辞

本展覧会の開催にあたり、
下記の機関、関係者各位にご協力を賜りました。
深く感謝を申し上げます。(敬称略、50音順)

一般社団法人 日本建築学会 関東支部
学校法人静岡雙葉学園 静岡雙葉中学校・高等学校
公益財団法人 窓研究所
公益財団法人岡田茂吉美術文化財団 MOA美術館
佐賀県立博物館 美術館
太閤山荘擁翠亭
東京都江戸東京博物館分館 江戸東京たてもの園
とこなめ陶の森 資料館
日蘭建築文化協会
八勝館
早川正夫建築設計事務所
Museum Het Schip
古田織部流 正伝会
明治大学 理工学部建築学科
湯河原町役場 観光課施設係

木村儀一
藤岡洋保
堀口家

青山(高瀬)道乃 渡辺奈美
岩橋幸治 山崎鯛介
中川大起 Alice Roegholt
宮下玄霸 Ton Heijdra

撮影者を含む写真のクレジットは、写真掲載頁のキャプションに記した。

Photography credits are indicated in captions on the pages on which the items are printed.

一部の写真については著作権者未詳のため、写真の諸権利をお持ちの方または団体の方は、文化庁国立近現代建築資料館までご連絡ください。

As some of the pictures were taken by unknown photographers, we kindly ask any individuals or organizations who have the rights thereof to contact National Archives of Modern Architecture, Agency of Cultural Affairs.

展覧会

建築家・堀口捨己の探求
モダニズム・利休・庭園・和歌

会期 2024年8月9日(金)–10月27日(日)

主催 文化庁

協力 公益財団法人 東京都公園協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益財団法人 窓研究所
Museum Het Schip

会場 文化庁国立近現代建築資料館

URL <http://nama.bunka.go.jp/>

企画・展示構成 文化庁国立近現代建築資料館
小林克弘[主任建築資料調査官]

王聖美[研究補佐員]

久下高豊[研究補佐員]

運営・資料保管 橋本純[主任建築資料調査官]

Lambiasi James[主任建築資料調査官]

秋岡安季[研究補佐員]

齋藤菜那[研究補佐員]

平川千絵子[事務補佐員]

室田恵実[事務補佐員]

北島真希子[事務補佐員]

翻訳 Thomas DANIELL

グラフィックデザイン 下田健斗

茶室現寸模型展示 公益財団法人 窓研究所
太閤山荘擁翠亭

小池周子／Amanek Inc.

映像 宮川貴光(ギャラリートーク撮影・編集)
小池周子／Amanek Inc.
(展示映像制作編集)

会場制作・設営 株式会社リーフ

株式会社芸宣

株式会社トップアート鎌倉

合同会社サムサラ

警備・美観管理 株式会社新東美装

建築家・堀口捨己の探求

建築家・堀口捨己の探求
モダニズム・利休・庭園・和歌

図録 | H 257×W257 (B5、64頁) | 4000部



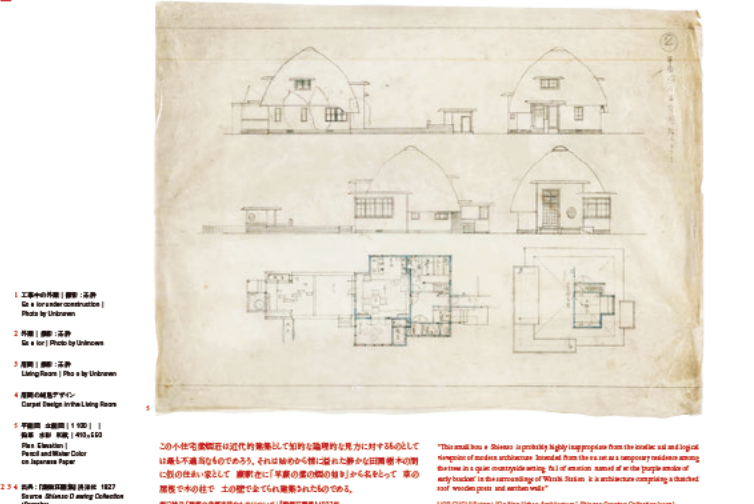
表紙



裏表紙



16頁



17頁



58頁



59頁



展示

1. 分離派建築会設立と表現主義の影響 1920-29	Bunriha Kenchiku Kai and the Influence of Expressionism
1-1 分離派建築会結成前後 Before and After the Formation of Bunriha Kenchiku Kai	
学生時代のスケッチ、アーカンススの葉 ー 1918 木炭、紙 475×630	Sketch at the University of Tokyo, Arkanthus Leaves Pencil on Paper
分離派建築会集合写真 1920 180×425	Group Photo at Bunriha Student Exhibition
第一回分離派建築会展覧会集合写真 1920 180×445	Group Photo at Bunriha Kenchiku Kai First Exhibition
「分離派建築会宣言と作品」 岩波書店 1920年	Bunriha Kenchiku Kai Declaration and Works (Iwanami Shoten, 1920)
「分離派建築会宣言と作品」内の宣言の頁	Page of Declaration, Bunriha Kenchiku Kai Declaration and Works
分離派建築会第三回展覧会ポスター 1923 プリント、紙	Poster, Bunriha Kenchiku Kai Third Exhibition
分離派建築会創立メンバーの卒業設計(抜粋) 出典: 東京帝國大學工學部建築學科内木葉會編『東京帝國大學工學部建築學科卒業計畫圖集』洪洋社、1928年 岸田日出刀建築資料より	Graduation Design Works of Bunriha Kenchiku Kai Members Source Graduation Design Works at the University of Tokyo, Koyosha, 1928
スクラップ帳 1920-1928 プリント、色鉛筆、紙 255×200 分離派建築会宣言、分離派建築会第七回展覧会チラシデザイン草案、同案内状を含む	Bunriha Kenchiku Kai Declaration, Flyer Design of Bunriha Kenchiku Kai Seventh Exhibition and its invitation
公会堂立面図 1 100 1920 水彩、紙 630×965	Public Hall, Elevation Water Color on Paper
大阪美術館設計競技、透視図 ー 1920 水彩、紙 640×970	Competition for Osaka Museum, Perspective Drawing Water Color on Paper
1-2 平和記念東京博覧会 The Tokyo Peace Exhibition	
第二会場、池塔 撮影: 未詳 複製	The Second Exhibition Venue, Pond Tower Photo by Unknown
動力館・機械館 出典: 「分離派建築会の作品 第二」、1921	Power Pavilion and Machinery Pavilion Source Works of Bunriha Kenchiku Kai Vol.2
鉱業館・林業館の内部写真 撮影: 未詳	Mining and Forestry Pavilion Photo by Unknown
会場俯瞰図 出典: 「中央美術」第八巻第五号、1922	Bird's Eye View Source Chuwa Bijyutu, Vol.8 No.5
平和記念東京博覧会 「堀口捨己の『日本』」建築文化8月号別冊、1998年	The Tokyo Peace Exhibition Horiguchi Sutei's "Japan", Kenchikubunka Special Issue of Aug., 1998
1-3 渡欧と『現代オランダ建築』の出版	European Tour and Publication of Modern Dutch Architecture
渡欧時に堀口が撮影した建築群	Photos by Horiguchi on the Tour 1. House with Thatched Roof(Bergen, Netherlands), 2. Housing (designed by Michel de Klerk, Amsterdam), 3. Housing(designed by Klerk and Cramer, Amsterdam), 4. Public Bath (designed by Dudok, Hilversum), 5. Chapel at Steinhof (designed by Otto Wagner, Wien), 6. Stoclet House(designed by Josef Hoffman, Brussels), 7. Work Space of Walter Gropius(location unknown), 8.Monument Tower to the marriage(designed by Joseph Maria Olbrich, Darmstadt, Germany), 9 Einstein Tower(designed by Eric Mendelsohn, Potsdam, Germany), 10. AEG Turbine Factory(designed by Peter Behrens, Berlin)
渡欧時の写真を整理したアルバム	Photo Album including Horiguchi's Photos taken in Europe
渡欧時の写真を整理したアルバム	Photo Album including Horiguchi's Photos taken in Europe
堀口捨己のパスポート 1923年7月から翌年3月の渡欧時に使用	Horiguchi's Passport on European Tour
オランダ発で出版された「ウェンディンヘン」、1921年第4・5号	Duch Magazine Wendingen, 1921 NO.4,5
オランダ発で出版された「ウェンディンヘン」のメンデルゾーン特集号、1920年第10号	Duch Magazine Wendingen, Special Issue of Eric Mendelsohn, 1920 NO.10 Influenced the Book Design of Horiguchi's Modern Dutch Architecture
堀口捨己「現代オランダ建築」の表紙デザインに影響を与えた	Horiguchi Sutei, Modern Dutch Architecture (Iwanami Publishing, 1924) Owned by HASHIMOTO Jun
堀口捨己「現代オランダ建築」岩波書店、1924年 所蔵: 橋本純	
1-4 小出邸 Koide House	
平面図・断面図・立面図・屋根伏図・面積表 1:100 1924 鉛筆、トレーシングペーパー 770×545	Plan, Section, Elevation, Roof Plan, Area Table Pencil on Tracing Paper
玄関ポーチ 撮影: 文化庁国立近現代建築資料館	Entrance Exterior Photo by NAMA
玄関ホール 撮影: 文化庁国立近現代建築資料館	Entrance Hall Photo by NAMA
客室 撮影: 文化庁国立近現代建築資料館	Drawing Room Photo by NAMA
客室展開図・平面図・天井伏図・電灯装飾詳細図 1:5・1:20 1924 鉛筆、トレーシングペーパー 770×550	Interior Elevation, Plan, Ceiling Plan, Detail of Lighting Fixture Pencil on Tracing Paper
外観 撮影: 未詳	Exterior Photo by Unknown
外観 撮影: 文化庁国立近現代建築資料館	Exterior Photo by NAMA
全体模型(江戸東京たてもの園の小出邸内にて展示) 撮影: 文化庁国立近現代建築資料館	Model exhibited at the Edo-Tokyo Open-Air Architectural Museum Photo by NAMA
矩計図・仕様書 1:20 1924 鉛筆、トレーシングペーパー 800×540	Detailed Section Pencil on Tracing Paper
1-5 紫烟荘 Shienso	
外観 撮影: 未詳 出典: 「紫烟荘図集」洪洋社、1927	Exterior Photo by Unknown
居間 撮影: 未詳 出典: 「紫烟荘図集」洪洋社、1927	Living Room Photo by Unknown
配置図・平面図 1:150 ー 鉛筆、水彩、和紙 380×555	Site Plan, Plan Pencil and Water Color on Japanese Paper
平面図・立面図 1:100 ー 鉛筆、水彩、和紙 410×550	Plan, Elevation Pencil and Water Color on Japanese Paper
テラス側矩計図 1 20 ー 鉛筆、水彩、和紙 550×820	Detailed Section of Terrace Side Pencil and Water Color on Japanese Paper
断面図・軸組図・梁伏図 1 100 ー 鉛筆、水彩、和紙 550×820	Section, Frame, Structure Plan Pencil and Water Color on Japanese Paper
家具詳細図 1 10 ー 鉛筆、水彩、和紙 555×780	Detail of Furniture II Pencil and Water Color on Japanese Paper
椅子・テーブル詳細図 1 10 ー 鉛筆、水彩、和紙 555×780	Detail of Chair and Table Pencil and Water Color on Japanese Paper
付属屋平面図・立面図・屋根伏図・展開図 1 100 1 20 ー 鉛筆、水彩、和紙 435×560	Plan, Elevation, Roof Plan, Interior Elevation of Annex Pencil and Water Color on Japanese Paper
客室詳細図 1 50 1 20 鉛筆、和紙	Detail of Guest Room Pencil on Japanese Water
仕様書 ー 1925 鉛筆、和紙 550×860	Specifications Pencil and Water Color on Japanese Paper

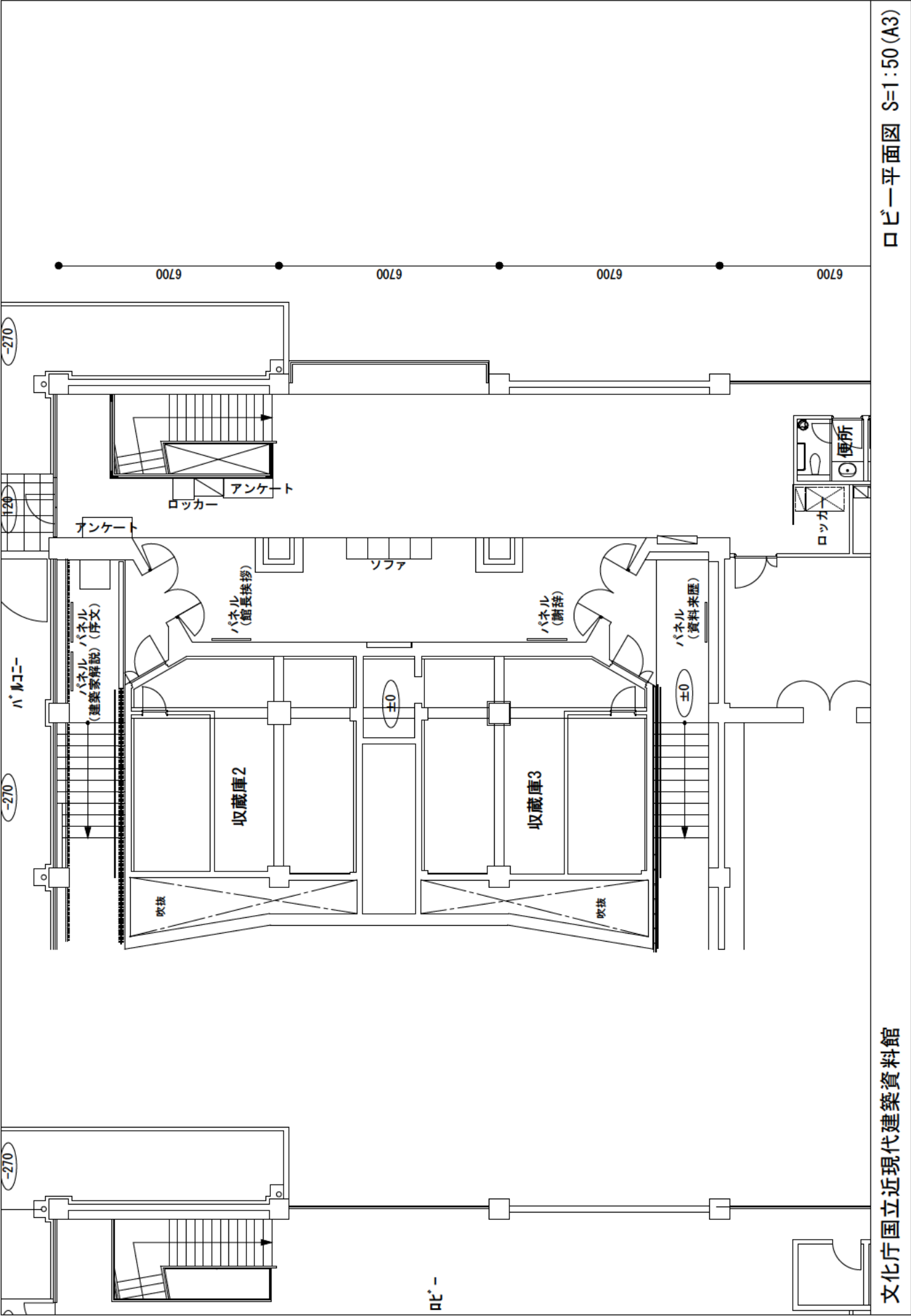
1-5 紫烟荘 Shienso	
工事写真 (2点) 撮影: 未詳	Construction Photos Photo by Unknown
外観 (5点) 撮影: 未詳	Exterior Photo by Unknown
居間の家具 (2点) 撮影: 未詳	urniture in the Living Room photo by unknown Source: <i>Shienso Drawing Collection</i> (Koyosha)
居間の絨毯デザイン ー 未詳 プリント、紙	Carpet Design in the Living Room Print on Paper
『建築画報』建築画報社、1927年7月	Kenchiku Gaho (Kenchiku Gaho-sha, July 1927)
『紫烟荘圖集』洪洋社、1927	<i>Shienso Drawing Collection</i> (Koyosha, 1927)
1-6 双鐘居 Soshokyo	
外観 撮影: 未詳	Exterior Photo by Unknown
居間 撮影: 未詳	Interior of Living Room Photo by Unknown
配置図 1:300 ー 鉛筆、水彩、和紙 490×560	Site Plan Pencil and Water Color on Japanese Paper
平面図・屋根伏図 1:100 ー 鉛筆、水彩、和紙 720×560	Plan, Roof Plan Pencil and Water Color on Japanese Paper
玄関前・中庭電灯器具現寸図・詳細図 1:2, 1:1 ー 鉛筆、和紙 560×790	Detail of Liting Fixture in the Entorance and Court Pencil on Japanese PaperJapanese Paper
立面図 1:100 ー 鉛筆、和紙 715×560	Elevation Pencil on Japanese Paper
寝室・書斎・居間前廊下電灯器具現寸図・詳細図 1:10, 1:5, 1:1 ー 鉛筆、和紙 560×775	Detail of Liting Fixture in Bed Room, Study and Corridor Pencil on Japanese Paper
外観 撮影: 未詳	Exterior Photo by Unknown
家具のデザイン 撮影: 未詳	Furniture Design Photo by Unknown
照明器具のデザイン 撮影: 未詳	Design of Liting Fixture Photo by Unknown
照明器具のデザイン 撮影: 未詳	Design of Liting Fixture Photo by Unknown
居間の絨毯デザイン ー 未詳 絵具、紙	Carpet Design in the Living Room Paint on Paper
『国際建築』国際建築協会、1928年10月	Kokusai Kenchiku (Kokusai Kenchiku Kyo-kai, Oct. 1928)
『住宅双鐘居』洪洋社、1930	<i>Soshokyo</i> (Koyosha, 1930)
■図録・図集スライド	
『分離派建築会宣言と作品』（岩波書店、1920）・紫烟荘図集（洪洋社、1927）・双鐘居図集（洪洋社、1930）・一混凝土住宅図面集（構成社書房、1930）	Bunriha Kenchiku Kai Declaration and Works (Iwanami Shoten, 1920), Shienso Drawing Collection (Koyosha, 1927), Soshokyo (Koyosha, 1930), One Concrete House Drawing Collection (Koseisha Shobo, 1930)
2. 国際様式への傾倒 1930-39 Devotion to the International Style	
2-1 吉川邸 Kikkawa House	
外観 撮影: 渡辺義雄 出典: 『一混凝土住宅図面集』構成社書房、1930年	Exterior Photo by WA ANABE Yoshio Source: <i>One Concrete House Drawing Collection</i> (Koseisha Shobo, 1930)
玄関ホール 撮影: 渡辺義雄 出典: 『一混凝土住宅図面集』構成社書房、1930年	Entrance Hall Photo by WA ANABE Yoshio Source One Concrete House Drawing Collection (Koseisha Shobo, 1930)
透視図 ー 1925.5 着彩、紙 680×490	Perspective Drawing Water Color on Paper
配置図 1:300 1928 鉛筆、和紙 570×390	Site Plan Pencil on Japanese Paper
1階平面図 1:100 1928 鉛筆、水彩、和紙 395×540	First Floor Plan Pencil and Water Color on Japanese Paper
南・西立面図 1:100 1928 鉛筆、水彩、和紙 395×535	South and West Elevation Pencil and Water Color on Japanese Paper
アイソメトリック図 ー ー 鉛筆、紙 580×660	Bird's Eye View Pencil on Paper
2階平面図 1:100 ー 鉛筆、水彩、和紙 395×540	Second loor Plan Pencil and Water Color on Japanese Paper
東・北立面図 1:00 ー 鉛筆、和紙 395×560	East and North Elevation Pencil on Japanese Paper
断面図1、断面図2 1:100 1928 鉛筆、水彩、和紙 560×800	Section 1, Section 2 Pencil and Water Color on Japanse Paper
ベランダその他立面図・断面図 1:20 ー 鉛筆、和紙 570×790	Elevation and Secition o Verandah Pencil on Japanese Paper
家具図 1:10 ー 鉛筆、和紙 570×790	urniture Drawing Pencil on Japanese Paper
『一混凝土住宅図面集』構成社書房、1930年	<i>One Concrete House Drawing Collection</i> (Koseisha Shobo, 1930)
2-2 岡田邸 Okada House	
玄関立面図・平面詳細図・断面詳細図 1:20 ー 鉛筆、和紙 400×550	Elevation, Detailed Plan, Detailed Section Pencil on Japanese Paper
平面図版下 1:100 ー インク、トレーシングペーパー 460×455	Plan for Print Ink on Tracing Paper
庭園内池・中庭塀詳細図 1:20 1933.4.27 鉛筆、和紙 400×550	Drawing of Pond in Garden and Fence of Court Pencil on Japanese Paper
庭園側外観 撮影: 渡辺義雄	Exterior facing the garden Photo by WATANABE Yoshio
洋室家具図第一案 肘掛椅子・家具配置図 1:10 ー 鉛筆、水彩、紙 315×470	First Scheme of Furniture in Western-style Room, Chair and Plot Plan Pencil and Water Color on Paper
洋室家具図第一案 服タンス・ベッド 1:10 ー 鉛筆、水彩、紙 315×470	First Scheme of Furniture in Western-style Room, Wardrobe and Bed Pencil and Water Color on Paper
洋室家具図第一案 飾台・電気スタンド 1:10 ー 鉛筆、水彩、紙 315×470	First Scheme of Furniture in Western-style Room, Table and Ligting Stand Pencil and Water Color on Paper
『一住宅と其の庭園』（洪洋社、1936年）	A Residence and Its Garden (Koyosha, 1936)
居間 撮影: 渡辺義雄	Living Room Photo by WATANABE Yoshio
2-3 大島測候所 Oshima Island Weather Station	
大島測候所 撮影・提供: 木村儀一	Oshima Island Weather Station Photo by KIMURA Giichi
大島測候所 撮影・提供: 木村儀一	Oshima Island Weather Station Photo by KIMURA Giichi
外観全景 撮影: 未詳	Exterior of the Main Building Photo by Unknown
執務室 撮影: 未詳	Working Room Photo by Unknown
配置図 1:300 ー インク、鉛筆、和紙 545×790	Site Plan Ink and Pencil on Japanese Paper
庁舎博物館・観測塔・附属屋一階平面図・面積表 1:100 ー 鉛筆、和紙 540×770	First Floor Plan, Museum, Observation Tower and Annex and Area Table Pencil on Japanese Paper
二階・塔屋・屋上平面図 1:100 ー 鉛筆、和紙 780×550	Second Floor Plan, Observation Tower and Roof Plan Pencil on Japanese Paper
中央气象台大島測候所附属官舎立面図 1:100 ー 鉛筆、和紙 530×780	Elevations, Foundation Plan, RoofnStructure and Detailed Section of Anex Pencil on Japanese Paper
南側立面図 1:100 ー インク、和紙 550×750	South Elevation Ink and Pencil on Japanese Paper
西立面図 1:100 ー 鉛筆、和紙 550×770	West Elevation Pencil on Japanese Paper
『大島測候所図集』1928年12月	Oshima Island Weather Station Drawing Collection (Dec. 1928)

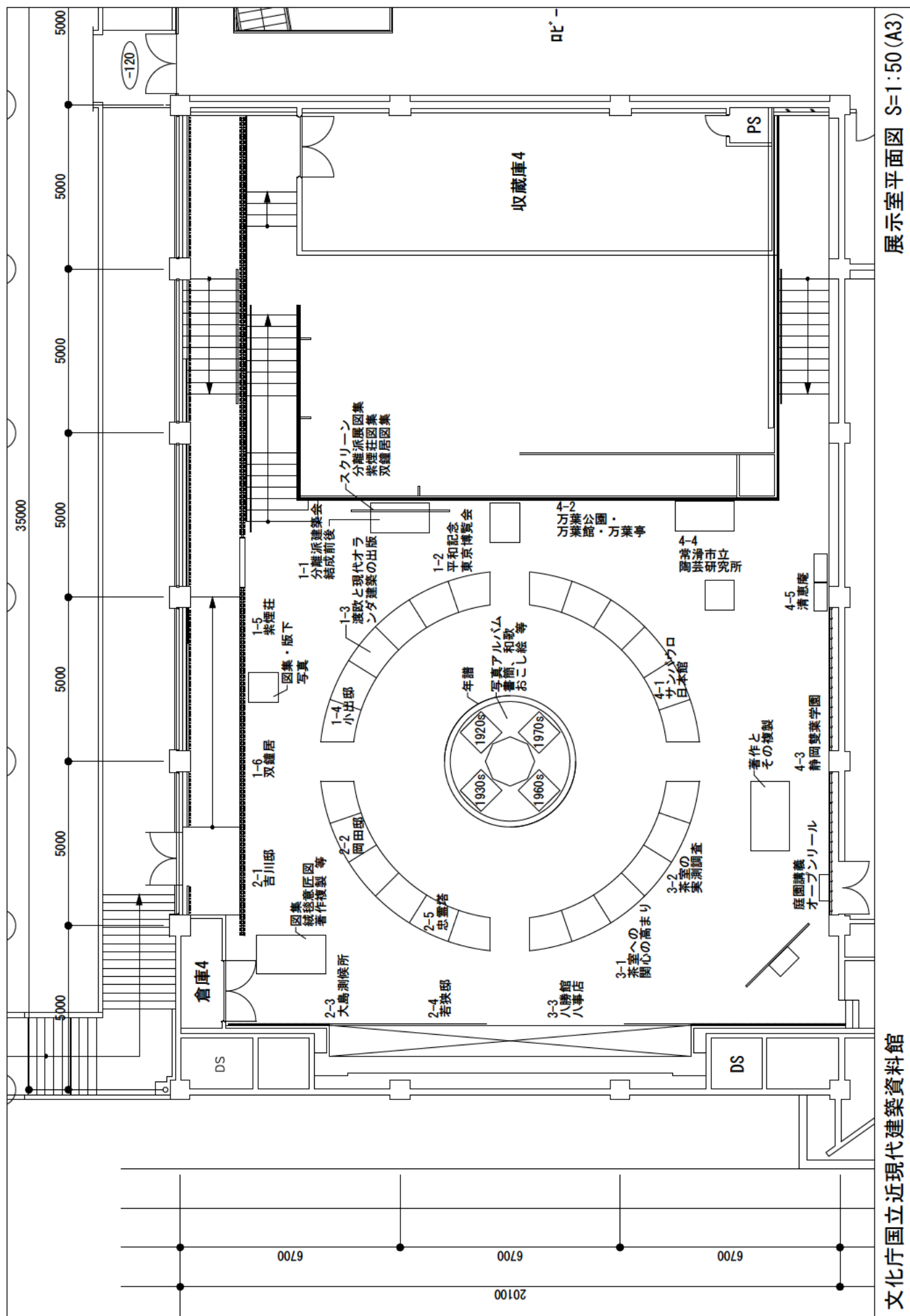
2-4 若狭邸 Wakasa House	
南側外観 撮影：渡辺義雄	South Exterior Photo by WATANABE Yoshio
居間 撮影：渡辺義雄	Living Room Photo by WATANABE Yoshio
南側・東側立面図 1:100 ー 鉛筆、和紙 390×545	South and East Elevation Pencil on Japanese Paper
北側・西側立面図 1:100 ー 鉛筆、和紙 390×545	North and West Elevation Pencil on Japanese Paper
配置図 1:200 ー 鉛筆、和紙 390×545	Site Plan Pencil on Japanese Paper
矩計図 1:20 ー 鉛筆、和紙 545×390	Wall Section Pencil on Japanese Paper
一階・二階平面図・屋根伏図 1:100 ー 鉛筆、和紙 390×545	First and Second Plan Pencil on Japanese Paper
居間展開図 1:50 ー 鉛筆、和紙 390×545	Interior Elevation of the Living Room Pencil on Japanese Paper
初期案（RC造）一階・二階平面図 1:100 ー 鉛筆、和紙 390×545	Early Scheme(RC Structure), First and Second Plan Pencil on Japanese
初期案（RC造）三階・屋上平面図・面積表 1:100 ー 鉛筆、和紙 390×545	Early Scheme(RC Structure), Third and Roof Plan Pencil on Japanese
2-5 忠霊塔設計競技案 Competition of Chureito Memorials to War Dead	
南側透視図 ー ー インク、鉛筆、紙 565×765	Perspective Drawing of the South Side Ink and Pencil on Paper
配置図 1:3000 ー インク、鉛筆、トレーシングペーパー 785×540	Site Plan Ink and Pencil on Tracing Paper
平面図 1:200 ー インク、紙 565×765	Plan Ink on Paper
断面図 1:200 ー インク、紙 565×765	Section Ink on Paper
東側透視図 ー ー インク、鉛筆、紙 560×830	Perspective Drawing of the East Side Ink and Pencil on Paper
3. 「日本」の探求 1940-1958 Searching for "Japan"	
3-1 茶室への関心の高まり Growing Interest in Teahouses	
慈照寺東求堂 実測図 1:20 1933 鉛筆、和紙 265×315	Togu-do Jishoji ,Survey Drawing Pencil on Japanese Paper
妙喜庵待庵 露地実測図 1:20 1936 鉛筆、和紙 575×780	Tai-an Myoki-an ,Survey Drawing Pencil on Japanese Paper
聚光院閑隠席 露地実測図 1:20 1936 インク、和紙 760×600	Kanin-seki Jukoin,Survey Drawing Ink on Japanese Paper
3-2 茶室の実測調査 Survey Drawings of Teahouses	
孤篷庵山雲床 庭園実測図 1:20 1936 インク、トレーシングペーパー 575×765	Sanunjo Koho-an,Survey Drawing Ink on Tracing Paper
龍光院 実測図 1:20 - 鉛筆、和紙 390×370	Ryokoin, Survey Drawing Pencil on Japanese Paper
仁和寺遼廓亭実測図 1:20 1936 インク、和紙 350×780	Ryokakutei Ninnaji,Survey Drawing Ink on Japanese Paper
仁和寺遼廓亭 実測図 1:20 1936 インク、和紙 320×780	Ryokakutei Ninnaji,Survey Drawing Ink on Japanese Paper
仁和寺遼廓亭 実測図 1:50 1936 インク、トレーシングペーパー 545×750	Ryokakutei Ninnaji,Survey Drawing Ink on Tracing Paper
如庵 実測図 1:20 1936 青焼（サイアノタイプ） 535×380 *8/8-9/16展示	Jo-an,Survey Drawing Blue Print Cyanotype
如庵 実測図 1:20 1936 青焼（サイアノタイプ） 375×540 *9/18-10/27展示	Jo-an,Survey Drawing Blue Print Cyanotype
慈光院 実測図 1:20 1943 インク、和紙 535×380	Jikoin, Survey Drawing Ink on Japanese Paper
慈光院 実測図 1:20 1943 インク、トレーシングペーパー 425×425	Jikoin, Survey Drawing Ink on Tracing Paper
慈光院 実測図 1:200 - 青焼（ジアゾタイプ） 480×470 *8/8-9/16展示	Jikoin, Survey Drawing Blue Print Diazo Type
春草廬 実測図 1:20 1936 インク、鉛筆、和紙 580×385	Shunsoro, Survey Drawing Ink and Pencil on Japanese Paper
春草廬 実測図 1:20 1936 インク、和紙 390×570	Shunsoro, Survey Drawing Ink on Japanese Paper
春草廬 実測図 1:20 1936 インク、和紙 590×390	Shunsoro, Survey Drawing Ink on Japanese Paper
3-3 八勝館八事店 Hasshokan Yagotomise	
みゆきの間 床の間 撮影：渡辺義雄	Miyuki no ma, Interior photo by WATANABE Yoshio
みゆきの間 庭園側外観 撮影：渡辺義雄	Miyuki no ma, Exterior facing the garden photo by WATANABE Yoshio
みゆきの間（3点） 撮影：藤岡洋保	Miyuki no ma Photo by FUJIOKA Hiroyasu
さくらの間 内観 撮影：渡辺義雄	Sakura no ma Photo by FUJIOKA Hiroyasu
きくの間（2点） 撮影：藤岡洋保	Kiku no ma Photo by Fujioka Hiroyasu
きくの間 展開図 1:20・1:50 1956 鉛筆、トレーシングペーパー 550×790	Kiku no ma, Elevation Pencil on Tracing Paper
きくの間 平面図・天井伏図 1:100 1956 鉛筆、トレーシングペーパー 390×540	Kiku no ma, Plan Pencil on Tracing Paper
きくの間 東側立面図・平面図・矩計図 1:20・1:50 ー 鉛筆、トレーシングペーパー	Kiku no ma, Plan, East Elevation, Detailed Section Pencil on Tracing Paper
さくらの間（2点） 撮影：藤岡洋保	Sakura no ma Photo by Fujioka Hiroyasu
さくらの間 矩計図 1:20 1956 インク、トレーシングペーパー 420×585	Sakura no ma, Detailed Section Ink on Tracing Paper
さくらの間 配置図・平面図 1:50・1:300 ー 鉛筆、トレーシングペーパー 390×560	Sakura no ma, Plan Pencil on Tracing Paper
さくらの間 南側・西側立面図 1:50 1956 鉛筆、トレーシングペーパー 395×560	Sakura no ma, South and West Elevation Pencil on Tracing Paper
さくらの間 北側・東側立面図 1:50 1956 鉛筆、トレーシングペーパー 395×550	Sakura no ma, North and East Elevation Pencil on Tracing Paper
■映像コーナー	
映像1 SUTEMI HORIGUCHI EN DE AMSTERDAMSE SCHOOL 制作：ヘットシップミュージ	Introduction Movie 1 SUTEMI HORIGUCHI EN DE AMSTERDAMSE SCHOOL
映像2 堀口捨己 庭園講義 1968年4月26日 制作：文化庁国立近現代建築資料館 制作	Introduction Movie 2 HORIGUCHI's Lecture National Archives of
■参考書誌コーナー	
明治大学講義「造園」音声 オープンリール6点 1968-1969	Audio Recording of "Zo-en" Lecture in Meiji University in 1968-1969
『庭と空間構成の伝統』（鹿島出版社、1965年）	Traditional Garden and Space Compositions (Kajima Publishing, 1965)
『現代建築1』日本工作文化連盟、1939年6月 一部抜粋複製	Modern Architecture (Nihon Kosaku Bunka Renmei, June 1939) Reprint
『現代建築2』日本工作文化連盟、1939年7月	Modern Architecture (Nihon Kosaku Bunka Renmei, July 1939)
『現代建築10』日本工作文化連盟、1940年4月 一部抜粋複製	Modern Architecture (Nihon Kosaku Bunka Renmei, April 1940) Reprint
『現代建築10』日本工作文化連盟、1940年4月 一部抜粋複製	Modern Architecture (Nihon Kosaku Bunka Renmei, April 1940) Reprint
『利休の茶室（復刻版）』（鹿島出版会、1968年）	Rikyū's Tearooms reprint (Kajima Publishing, 1968)
『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』（鹿島出版会、1974年）	The Spatial Composition of Houses and Gardens (Kajima Publishing, 1974)
SUTEMI HORIGUCHI BUNRIHA AND THE AMSTERDAM SCHOOL 図録（ヘットシップミュージ	Exsibition Catalogue of SUTEMI HORIGUCHI BUNRIHA AND THE
『建築文化53』彰国社、1951年4月	Kenchiku Bunka (Shokokusha, April. 1951)
行幸行啓新築図集（八勝館、『建築文化53』彰国社、1951年4月抜刷）	Hoshokan Drawing Collections, Kenchiku Bunka (Shokokusha, April. 1951)
『日本の美術 第83巻 茶室』（至文堂、1973年）	Japanese Art: Tearoom Edition (Shibundo, 1973)

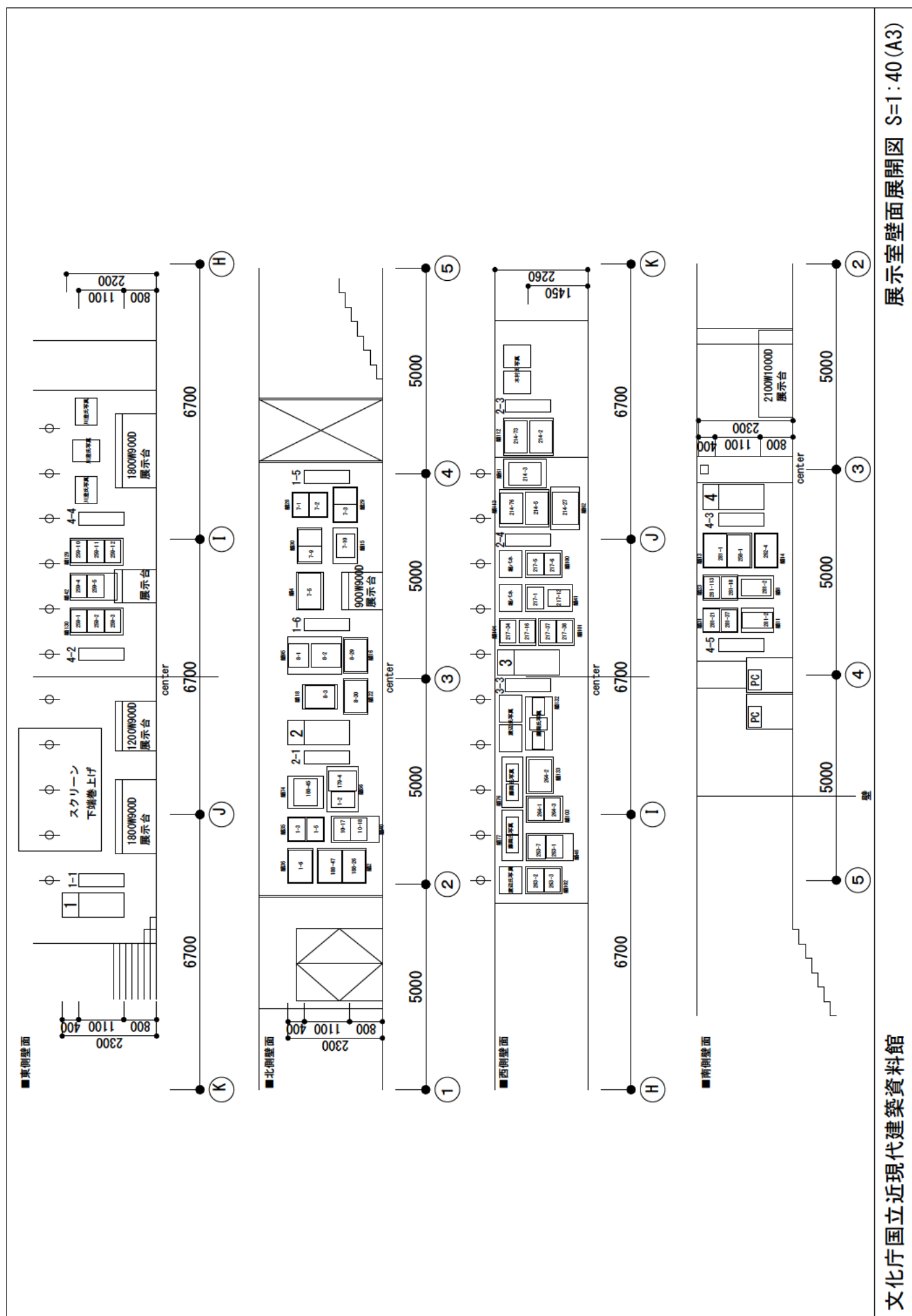
4. 伝統と近代の境界を超えて 1954-1984	Transcending the Boundaries between Tradition and Modernity
4-1 サンパウロ日本館 Japanese Pavilion for Sao Paulo Exposition	
サンパウロ市400周年記念祭ポスター	Poster, Sao Paulo Exposition
透視図 初期案 ー プリント 390×540	Exterior Perspective Drawing for Proposal Design Print on Paper
透視図ー プリント 3370×530	Exterior Perspective Drawing Print on Paper
立面図 (東側・北側) 1:100 1953 青焼 (ジアソタイプ) 570×685 *8/8-9/16展示	Elevations (East, North) Blue Print Diazo Type
断面 1:100 1953 青焼 (ジアソタイプ) 500×700 *8/8-9/16展示	Sections Blue Print Diazo Type
日本館 庭園平面図 1:100 1953 青焼 (サイアノタイプ) 540×690 *8/8-9/16展示	Main Building Garden Plan Blue Print Cyanotype
展示場 矩計 1:10, 1:50 1953 青焼 (ジアソタイプ) 565×805 *8/8-9/16展示	Exhibition Hall Sectional Detail Blue Print Diazo Type
鉄骨小屋組詳細図 1:20, 1:30 1953 青焼 (ジアソタイプ) 550×795 *8/8-9/16展示	Roof Truss Detail Blue Print Diazo Type
日本館 小屋伏及天井伏図 1:100 1953 青焼 (ジアソタイプ) 540×805 *9/18-10/27展示	Main Building Roof Truss and Ceiling Plan Blue Print Diazo Type
配置図 1:2000 1953 青焼 (ジアソタイプ) 575×805 *9/18-10/27展示	Site Plan Blue Print Diazo Type
立面図 1:100 1953 青焼 (ジアソタイプ) 545×805 *9/18-10/27展示	Elevations Blue Print Diazo Type
日本館 平面図 1:100 1953 青焼 (ジアソタイプ) 546×693 *9/18-10/27展示	Main Building Plan Blue Print Diazo Type
日本館 庭園及床下図 1:100 1953 青焼 (ジアソタイプ) 535×790 *9/18-10/27展示	Main Building Garden Plan and Under Floor Plan Blue Print Diazo Type
日本館 外観 撮影者未詳	Main Building Exterior Photo by Unknown
日本館 外観 撮影者未詳	Main Building Exterior Photo by Unknown
『国際建築』1953年12月	Kokusai Kenchiku (Kokusai Kenchiku Kyo-kai, Dec.1953)
『国際建築』1955年2月	Kokusai Kenchiku (Kokusai Kenchiku Kyo-kai, Feb.1955)
4-2 万葉公園・万葉館・万葉亭 Manyo Park, Manyo-kan, Manyo-tei	
万葉亭外観 (2点) 撮影: 未詳	Manyo-tei Exterior Photo by Unknown
万葉亭内観 (2点) 撮影: 未詳	Manyo-tei Interior Photo by Unknown
湯河原萬葉公園 配置図 1:300 1953-54 鉛筆、トレーシングペーパー 390×550	Manyo Park Site Plan Pencil on Tracing Paper
萬葉館 平面図 1:50 1954 鉛筆、トレーシングペーパー 390×550	Manyo-kan Plan Pencil on Tracing Paper
萬葉館 立面図 1:50 1954-1955 鉛筆、トレーシングペーパー 390×550	Manyo-kan Elevations Pencil on Tracing Paper
萬葉館 室内展開図 天井伏図 1:50 1954-1955 鉛筆、トレーシングペーパー 390×550	Manyo-kan Interior Elevation and Ceiling Plan Pencil on Tracing Paper
萬葉館 矩計図 1:20 1954-1955 鉛筆、トレーシングペーパー 390×550	Manyo-kan Detailed Section Pencil on Tracing Paper
茶屋 平面図 立面図 1:50 1953 鉛筆、トレーシングペーパー 390×550	Manyo-tei Plan and Elevations Pencil on Tracing Paper
茶屋 矩計図 1:20 1953 鉛筆、トレーシングペーパー 390×550	Manyo-tei Detailed Section Pencil on Tracing Paper
茶屋 水屋 土間 詳細図 建具 1:20 1:50 1953 鉛筆、トレーシングペーパー 390×550	Manyo-tei Details Pencil on Tracing Paper
萬葉館出陳目録	Item List of Manyo-kan
湯河原温泉万葉公園図集『建築文化No.107』(彰国社、1955年10月) 抜刷	Drawing Collection of Manyo Park (Offprint)
4-3 静岡雙葉学園 Shizuoka Futaba Gakuen	
講堂 内観 撮影: 未詳	Auditorium Interior Photo by Unknown
計画図 配置図 1:300 1961 鉛筆、トレーシングペーパー 550×790	Draft Site Plan Pencil on Tracing Paper
講堂・体育館 各階平面図 1:200 1955 鉛筆、トレーシングペーパー 540×785	Auditorium and Gymnasium Plans Pencil on Tracing Paper
校舎計画図 立面図 1:100 1956 鉛筆、トレーシングペーパー 550×810	Classroom Building Draft Elevations Pencil on Tracing Paper
修道院 礼拝堂 東側全景立面図 1:100 1961 鉛筆、トレーシングペーパー 390×540	East Elevation of Monastery and Chapel Pencil on Tracing Paper
礼拝堂 平面図 1:100 1961 鉛筆、トレーシングペーパー 390×545	Chapel Plans Pencil on Tracing Paper
礼拝堂 矩計図 正面玄関周り 1:20 1961 鉛筆、トレーシングペーパー 750×395	Chapel Entrance Sectional Detail Pencil on Tracing Paper
礼拝堂 断面図 1:100 1961 鉛筆、トレーシングペーパー 390×545	Chapel Sections Pencil on Tracing Paper
礼拝堂 天井伏図 天井詳細図 1:100, 1:20 1961 鉛筆、トレーシングペーパー 380×530	Chapel Ceiling Plans and Ceiling Detail Pencil on Tracing Paper
礼拝堂 祭壇周り 詳細図 1:20 1961 鉛筆、トレーシングペーパー 725×395	Chapel Detail of Alter Pencil on Tracing Paper
4-4 常滑市立陶芸研究所 Tokoname Ceramics Research Institute	
模型写真 撮影: 未詳	Model Photo by Unknown
本館 1階平面図及び別棟宿直室平面図 1:100 1960 青焼 390×540 *8/8-9/16展示	Main Building 1st Floor Plan and Annex Plan Blue Print Cyanotype
本館 平面図 2階 屋上 1:100 1960 青焼 390×540 *8/8-9/16展示	Main Building 2nd Floor and Rooftop Plan Blue Print Cyanotype
本館 陳列室 展開図 (西面・北面) 同部分平面 中央陳列ケース 1:50 1:20 1960 青焼 390×540 *8/8-9/16展示	Main Building Interior Elevations of Exhibition Room Blue Print Cyanotype
本館 ホール鋼製階段詳細図 1:10 1:20 1960 青焼 390×540 *8/8-9/16展示	Main Building Detail of Stairs in Entrance Hall Blue Print Cyanotype
本館 矩計図 3通り 正面入口 1:20 1960 青焼 540×390 *8/8-9/16展示	Main Building Sectional Detail Blue Print Cyanotype
透視図 ー 未詳 コンテ、絵具、インク、紙 303×538	Perspective Drawing Conte Crayon, Water Color, Ink on Paper
配置図 1:300 1960~1961 青焼 390×540 *9/18-10/27展示	Site Plan Blue Print Cyanotype
本館 玄関詳細図 1:20 1961 青焼 390×540 *9/18-10/27展示	Main Building Entrance Detail Blue Print Cyanotype
本館 ホール展開図 1:50 1960 青焼 390×540 *9/18-10/27展示	Main Building Interior Elevations of Entrance Hall Blue Print Cyanotype
本館 天井伏図 1:100 1960 青焼 390×540 *9/18-10/27展示	Main Building Ceiling Plan Blue Print Cyanotype
本館 トップライト詳細 1:50 1:20 1960 青焼 390×540 *9/18-10/27展示	Main Building Detail of Sky Light Blue Print Cyanotype
本館外観 撮影: 川澄明男	Main Building Exterior Photo by KAWASUMI Akio
本館外観 撮影: 川澄明男	Main Building Exterior Photo by KAWASUMI Akio
本館 2階 撮影: 川澄明男	Main Building 2nd Floor Photo by KAWASUMI Akio
常滑陶芸研究所図集『新建築』1961年10月号 (新建築社) 抜刷	Drawing Collection of Tokoname Ceramics Research Institute (Offprint)
本館外観 撮影: 文化庁国立近現代建築資料館	Exterior Photo by NAMA
本館内観 (3点) 撮影: 文化庁国立近現代建築資料館	Interior Photo by NAMA

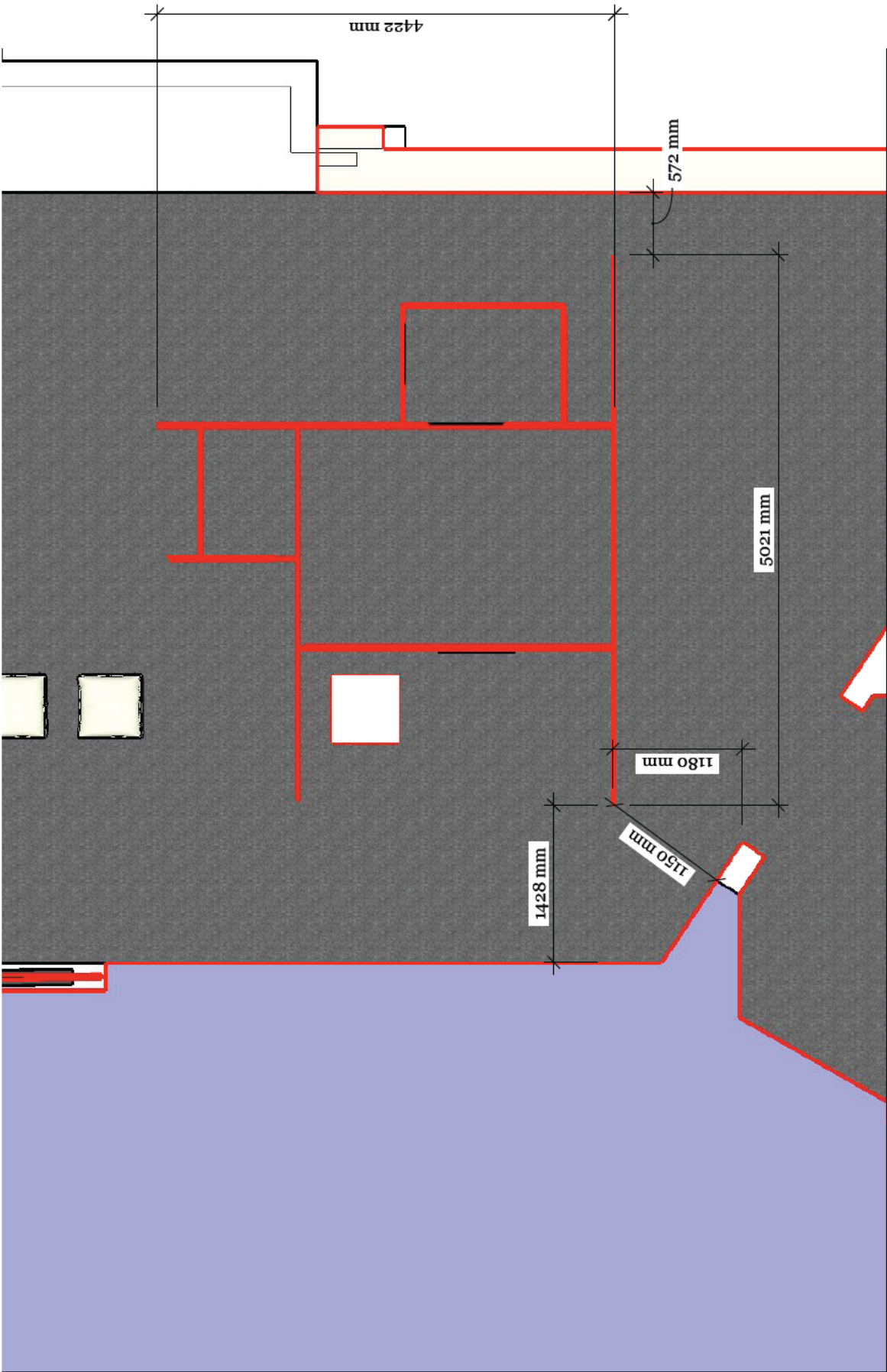
4-5 清恵庵 The “Seikeian” Tea Ceremony House	
茶室「清恵」設計図（28枚） 所蔵：早川正夫建築設計事務所	Drawings Courtesy of Hayakawa Architect & Associates
写真アルバム（27枚） 撮影：さとうつねお ©早川正夫建築設計事務所	Photo Album Photo by SATO Tuneo Courtesy of Hayakawa Architect & Associates
■中央円形 年譜コーナー	
「堀口捨己建築資料（1916-）」	Items of HORIGUCHI Sutemi's Architectural Materials 1916-
堀口捨己写真アルバム（1923年渡欧時、港での写真を含む）	Photo Album
堀口捨己写真（中学五年（第六高等学校）集合写真（31-60-23）、1916年肖像写真（31-60-52）、1917年頃東京帝国大学集合写真（31-60-8）、1918年肖像写真（31-60-22）、1919年肖像写真（31-60-32）、1921年肖像写真（31-60-9））	Portraits
分離派建築会展覧会目録（第二回展覧会目録（31-83-72）、第五回展覧会目録（未番）、第六回展覧会招待状（31-83-49））	Catalogues of Bunriha Kenchiku Kai Exhibition
大内秀一郎からの書簡 1924年2月	Letter from Ouchi Shuichiro Feb. 1924
稲垣鷹穂、堀口捨己編著『建築様式論叢』六文館、1932年	Essays on Architectural Style (Rokubun-kan, 1932)
スケッチ2点 1932 インク、紙 作者未詳	Sketch Ink on Paper Drawn by Unknown
「堀口捨己建築資料（1936-）」	Items of HORIGUCHI Sutemi's Architectural Materials 1936-
如庵実測図 1936 青焼き（サイアノタイプ）＊8/8-9/16展示	Survey Drawing of Jo-An Blue Print (Cyanotype)
如庵実測図 1936 青焼き（ジアゾタイプ）＊9/18-10/27展示	Survey Drawing of Jo-An Blue Print (Diazotype)
如庵実測要項寸法表1 未詳 青焼き（サイアノタイプ）＊8/8-9/16展示	Survey Drawing of Jo-An Blue Print (Cyanotype)
如庵実測要項寸法表2 未詳 青焼き（サイアノタイプ）＊9/18-10/27展示	Survey Drawing of Jo-An Blue Print (Cyanotype)
和歌（すきびとの） 年代未詳	Waka
堀口捨己写真アルバム（大島測候所現場写真含む）	Photo Album
和歌（うつしるの） 1951	Waka
遠州好後藤勘兵衛茶室 アイソメトリック 年代未詳	Isonometric Drawing of GOTO Kanbei teahouse
和歌（くりかえし） 年代未詳	Waka
堀口捨己編著『茶室おこし絵図集 第一集』墨水書房、1963年	Miniature Architectural Papercraft of Teahouses (Bokusuishobo, 1963)
『茶室おこし絵図集 第一集』表紙 堀口捨己編著『茶室おこし絵図集 第一集』墨水書房、1963年より	Cover
高台寺傘亭おこし絵	Miniature Architectural Papercraft of Karakasa-tei, Kodaiji Temple
高台寺傘亭参考写真	Photo of Karakasa-tei, Kodaiji Temple
高台寺傘亭参考写真	Photo of Karakasa-tei, Kodaiji Temple
高台寺傘亭額「安閑窟」	Photo of Karakasa-tei, Kodaiji Temple
和歌（けふもまた） 年代未詳	Waka
和歌（ひとありて） 1965年頃	Waka
「堀口捨己建築資料（1960-）」	Items of HORIGUCHI Sutemi's Architectural Materials 1960-
堀口捨己写真アルバム（1961年常滑市立陶芸研究所竣工式典の写真を含む）	Photo Album
堀口捨己写真アルバム（1965年古稀祝賀会及び『庭と空間構成の伝統』出版記念会の写真を含む）	Photo Album
堀口捨己写真アルバム（1969年建築学会大賞受賞式の写真を含む）	Photo Album
和歌（おちてくる） 1969年頃	Waka
和歌（くれなづむ） 1969年頃	Waka
和歌（いたるべき） 年代未詳	Waka
■ロビー参考展示	
後藤勘兵衛茶室（現・太閤山荘擁翠亭） 模型所蔵：公益財団法人窓研究所 模型設計：西澤徹夫建築事務所+岡本健デザイン事務所 パネル製作：東京スタジオ	The Goto Kanbei Teahouse (now Taikosanso Yousuitei) Courtesy of Window Research Institute Designed by Tezso Nishizawa Architects and Ken Okamoto Design Office Produced by TOKYO STUDIO Assembled by LEAF, GEISEN
解説映像 制作：文化庁国立近現代建築資料館 制作編集：小池周子/Amanek-inc. 取材協力：太閤山荘擁翠亭 写真提供：公益財団法人窓研究所 3分40秒	Introduction Movie National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs, Japan Edited by KOIKE Shuko/Amanek-inc. Cooperated by Taikosanso Yousuitei, Window Research Institute

出展数：247点
出展プロジェクト：19品





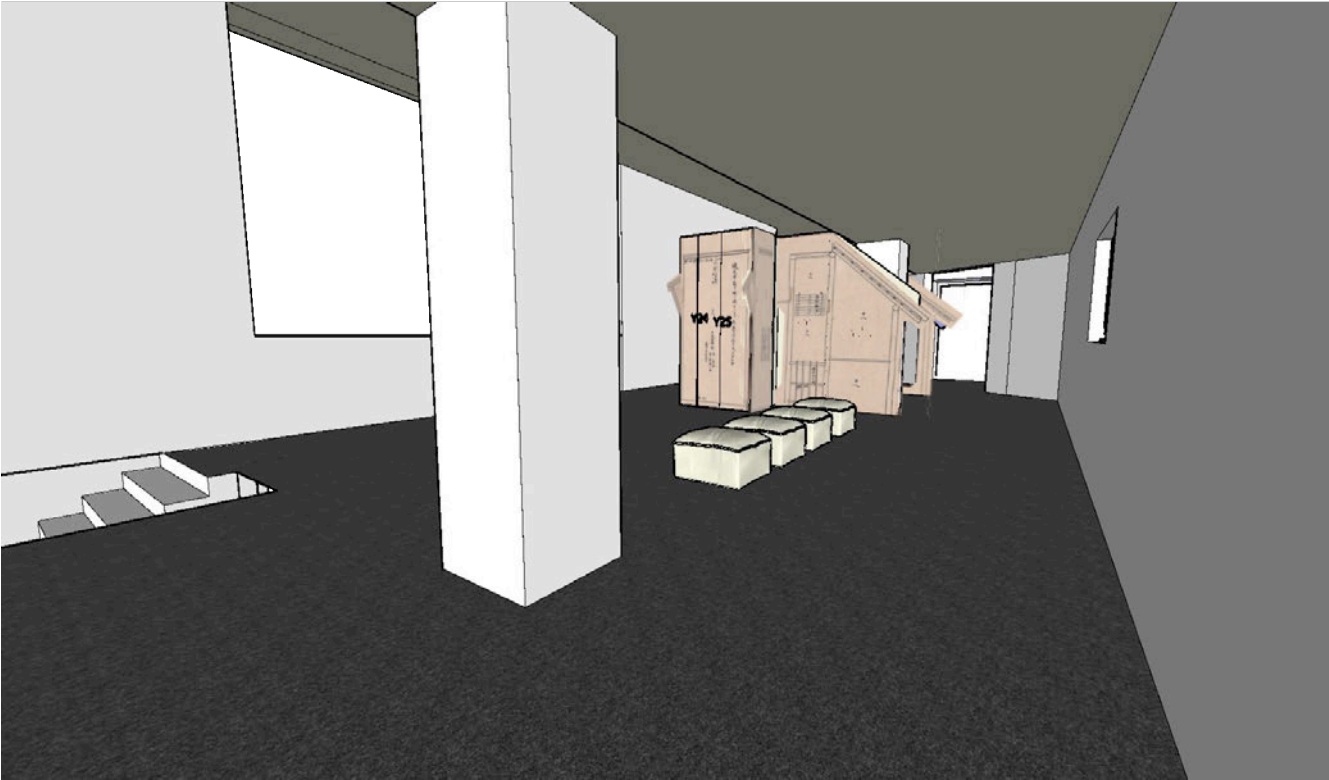




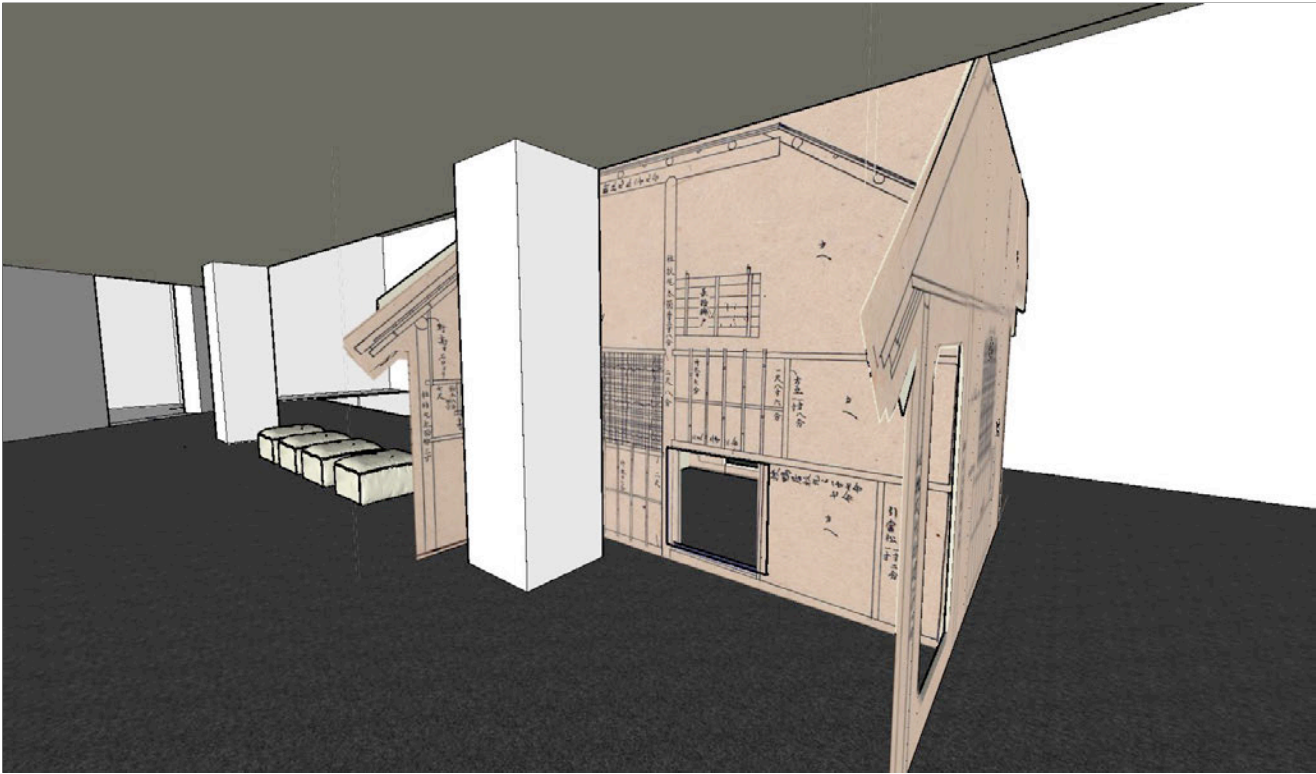
A		01	
REVISIONS		REMARKS	
MM/DD/YY		1:50 (A4)	
07/11/2024	1	...	...
/	2	...	...
/	3	...	...
/	4	...	...
/	5	...	...

Amanek Inc. Around Architecture and Culture	
LEAF	堀口捨己展 擁翠亭写しレイアウト

後藤勘兵衛茶室（現・太閤山荘擁翠亭）原寸写し：設置検討



	LEAF Amanek Inc. Around Architecture and Culture	REVISIONS		02
		MM/DD/YY	REMARKS	
		1 07/11/2024	1:50 (A4)	
		2	...	
		3	...	
		4	...	
	堀口捨己展 擁翠亭写しレイアウト		5	...



	LEAF Amanek Inc. Around Architecture and Culture	REVISIONS		03
		MM/DD/YY	REMARKS	
		107/11/2024	1:50 (A4)	
		2/ /	...	
		3/ /	...	
		4/ /	...	
		5/ /	...	
	堀口捨己展 擁翠亭写しレイアウト			A

1. 分離派建築会設立と表現主義の影響 1920-29



1-1 分離派建築会結成前後



1-2 平和記念東京博覧会



[illegible]

小出部

Kobode / House

住所 | 東京都文京区 | Baroque Tokyo | 完成 | Winter '07 | 総面積 174.68㎡
建築主 | 株式会社、江戸幕末博物館 | 建築家 | 堀江浩久
Site | Toshinoki Land & House Co Ltd Tokyo Open-Air Museum Architectural Museum

邸宅であった平家邸を東京博覧会館の敷地を整え、堀江による創作的な建築作品であり、都市の住宅作品である。外観は、西洋建築と日本伝統を特徴とし、建物に対して室内空間に沿って設計が展開しているのは、その後の住宅作品に通じる特徴である。玄関ホールの間の空間では、垂直の柱頭と水平面の床が対峙し、連続する空間と受け入れられる。天井の格子にはめ込まれた照明、水平な板による廊下など、幾何学的な構成への関心が窺われる。足場の上にある「階段」・廊下で、外景からは一掃された立体的形状や商業施設の役割の隠れ、扉と面が組み合わせた幾何学的デザインである。壁紙、窓、床、高などの色彩の使用では、色に関する関心も窺われる。

この邸宅で試みられた建築家が、数回目に現れるという意味で、開口の出発点といえる作品である。商業施設としての用途としての特徴は、江戸時代までの邸の平面図では、食堂と記載されており、商業利用されることで変わっていくものと推測される。

Leaving aside the temporary facilities for the Tokyo Peace Exhibition, this is HORIGUCHI's first permanent residential work, and his first residential work. The exterior is characterized by a hipped roof and horizontal lines, and it is aligned with the central points so as to be diagonally arranged within the site also. A feature that continues in subsequent residential works is the two rooms on the north and south of the entrance hall; an interest in abstract composition is evident in the spaces created by a regular sequence of columnar walls and ceiling beams. The three-dimensional object that integrates shoe storage, umbrella stand, and coat rack in the entrance hall, and the storage wall in the Japanese-style room to the southwest, are also abstract design combining lines and surfaces. An interest in color is evident in the use of olive, silver, red, and black.

In the series that the artist explores HORIGUCHI experimented with in this residence also appear in Shiroko, this work can be considered his point of departure. The guest room shown on the floor plan in the construction documents is described as a dining room in the floor plan at the Edo-Tokyo Open-Air Architectural Museum, suggesting that the function of the room changed over many years of use.

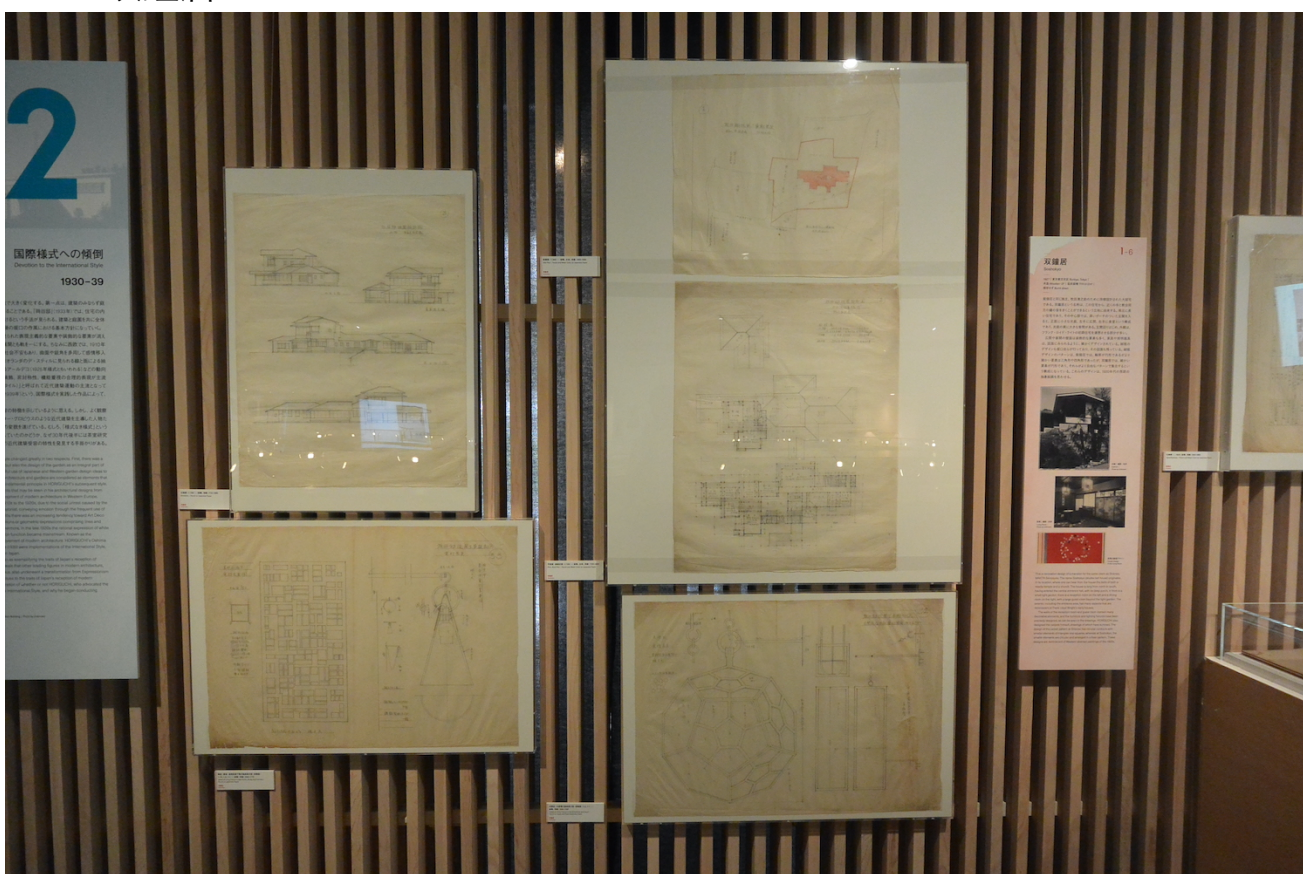
江戸幕末博物館
Edo-Tokyo Open-Air Museum

江戸幕末博物館
Edo-Tokyo Open-Air Museum

1-5 紫烟荘



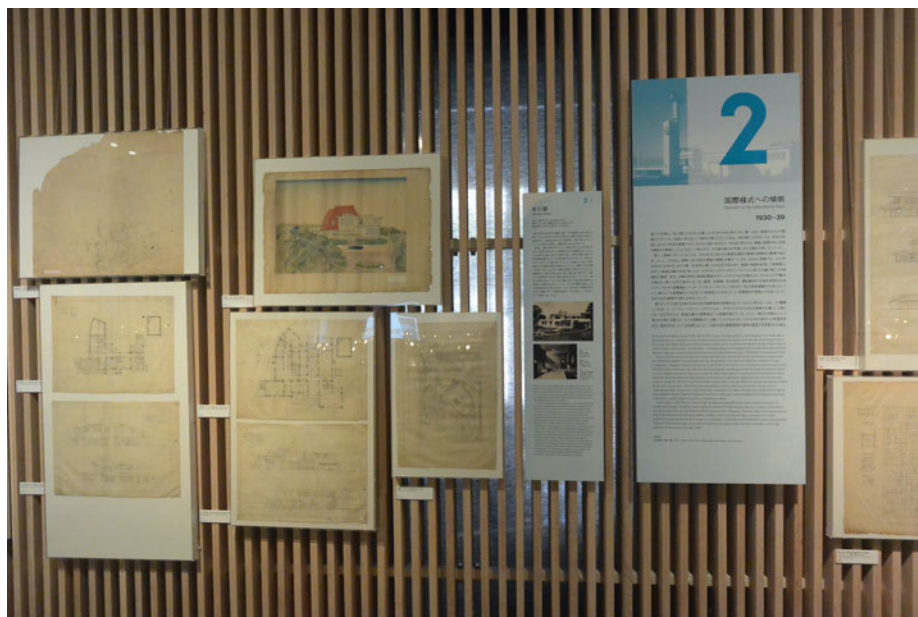
1-6 双鐘居



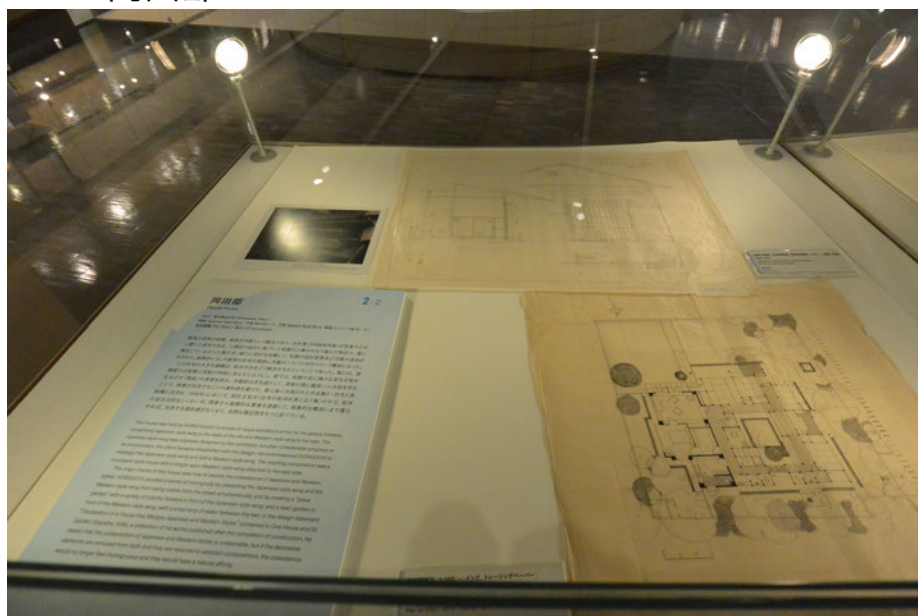
2. 国際様式への傾倒



2-1 吉川邸



2-2 岡田邸



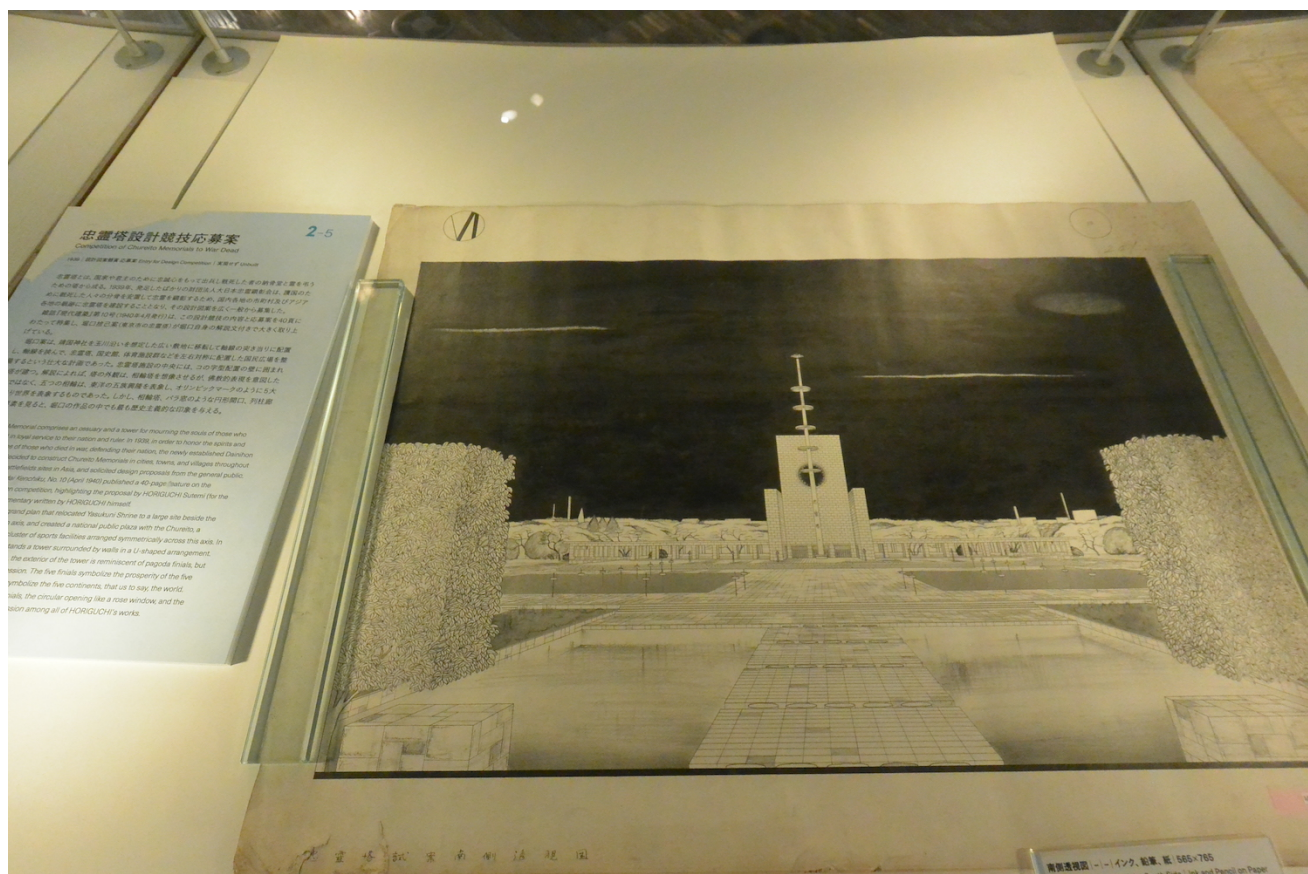
2-3 大島測候所



2-4 若狭邸



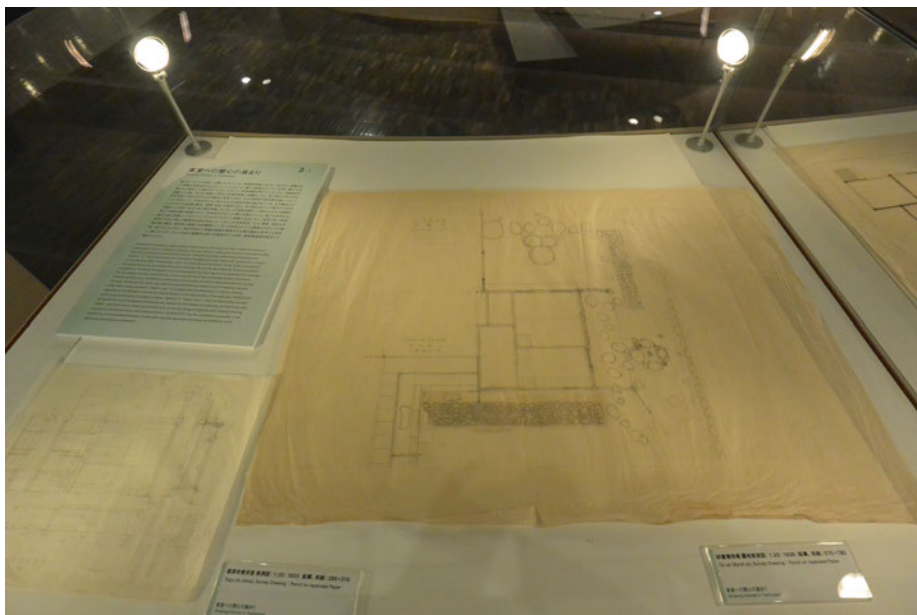
2-5 忠霊塔設計競技案



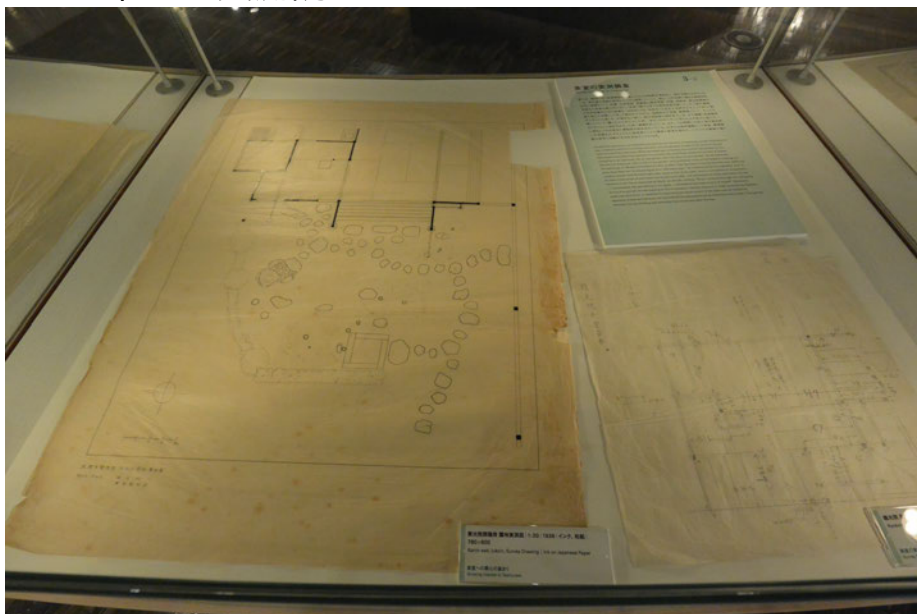
3. 「日本」の探求



3-1 茶室への関心の高まり



3-2 茶室の実測調査



3-3 八勝館八事店



オープンリール展示



参考書籍コーナー



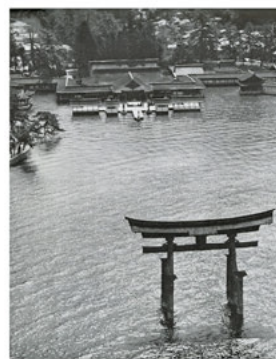
造園講義映像資料



講義をする堀口（1941年）

これまでと違う意味の庭園を考えてみたい。

I would like to consider a "Teien (Japanese Garden)" with a different meaning.



堀口が設計した「大森の神社」の鳥居（1930年）

これまで、造園家も建築家も説明できていない。
建築、庭園、自然とまとめて、大きな空間構成、
スペースデザインという視点で考えることが大切。

So far, neither landscape architects nor architects have been able to explain it.
It is important to consider architecture, gardens, and nature collectively from the perspective of large scale composition and space design.



堀口に於ける庭園（大森邸）（1941年）（撮影：西沢昌利）

デザインにおいて、
デザイナーが主人でなければならない。
建築家による、デザインとしての庭園字が必要。
デザインとして、庭園はどう定義できるか？

In design, the designer must be the master.
Garden studies as designed by architects are necessary.
How can gardens be defined as design?



堀口が設計した「大森の神社」の庭園（1930年）

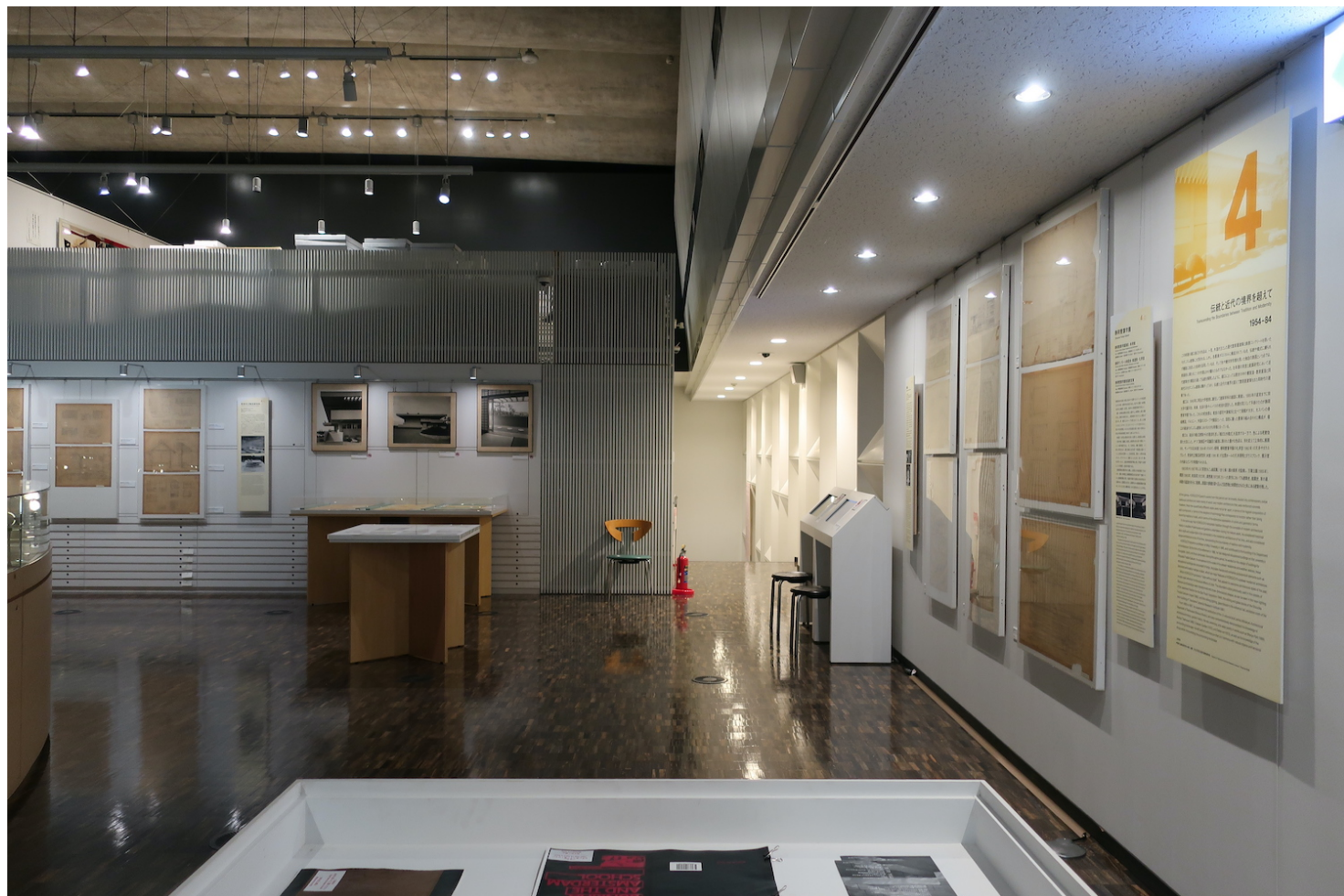
庭園の素材である自然物の生命を
知っておく必要がある。
草花、秋草の庭などは面白いが、
その命は一年もない。
庭園は、時間を区切つて、美しさを表現するもの。
庭園の理解のためには、人間生活の習慣や宗教も
一緒に考えねばならない。

It is necessary to know the life of the natural objects that are the materials of the garden. A grass garden, a garden of autumn grasses,
etc., is interesting, but its life does not last a year. A garden is an expression of beauty, separated by time. To understand gardens, we
must also consider the customs of human life and religion together.

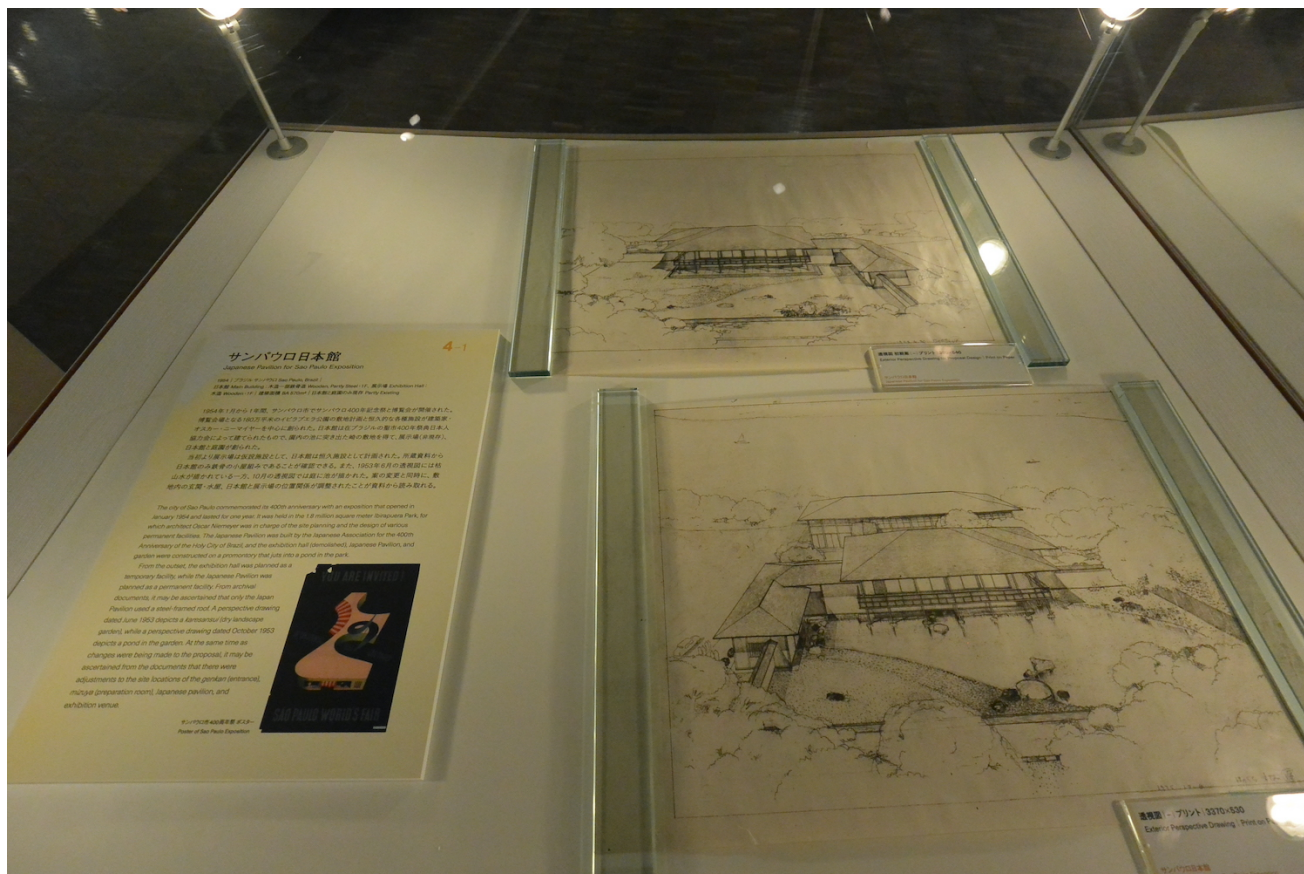
ヘットシップ映像キャプチャ



4. 伝統と近代の境界を超えて



4-1 サンパウロ日本館



4-2 万葉公園・万葉館・万葉亭



4-3 静岡雙葉学園



4-4 常滑市立陶芸研究所



4-5 清恵庵



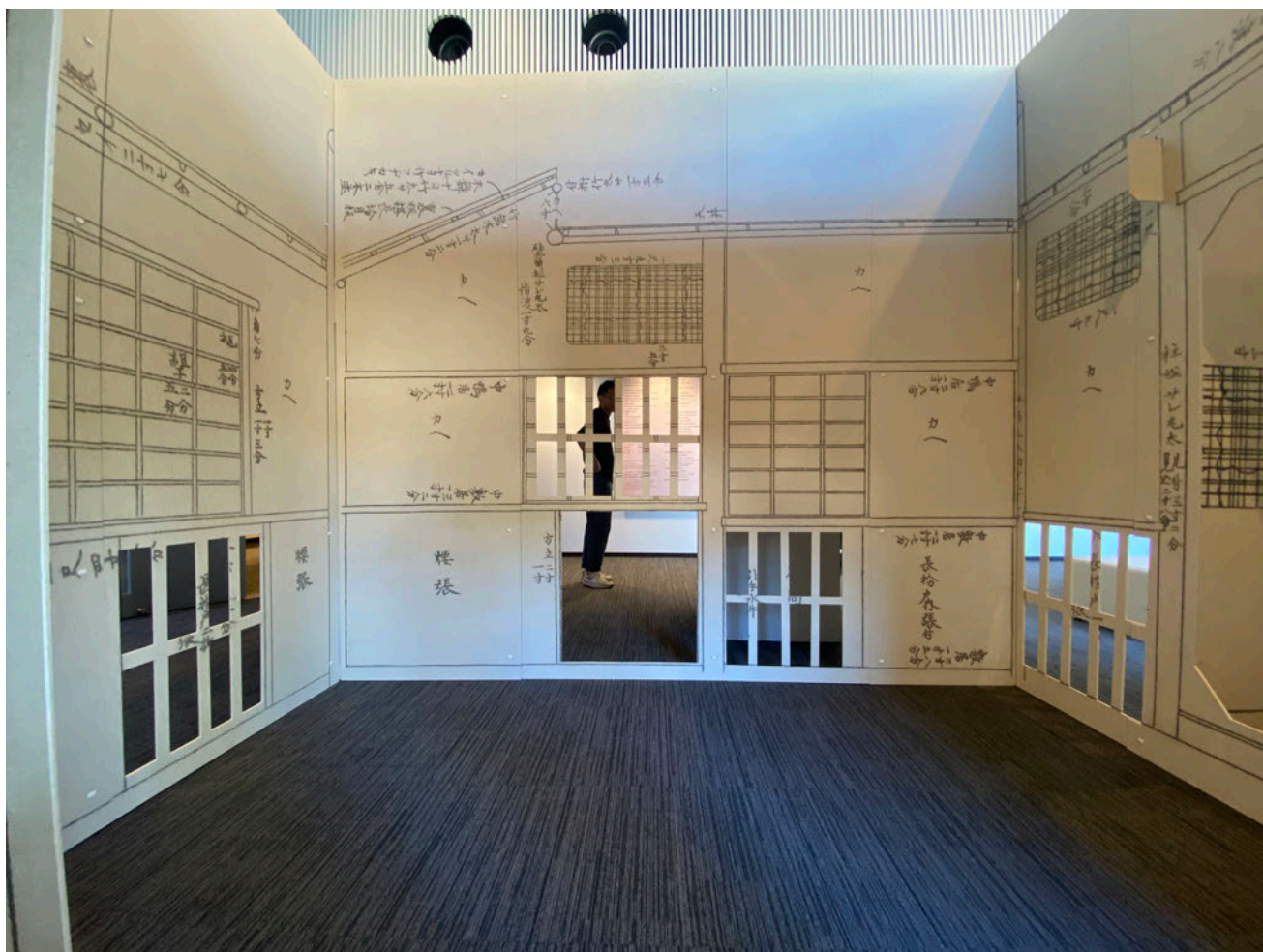
中央円形 年譜コーナー



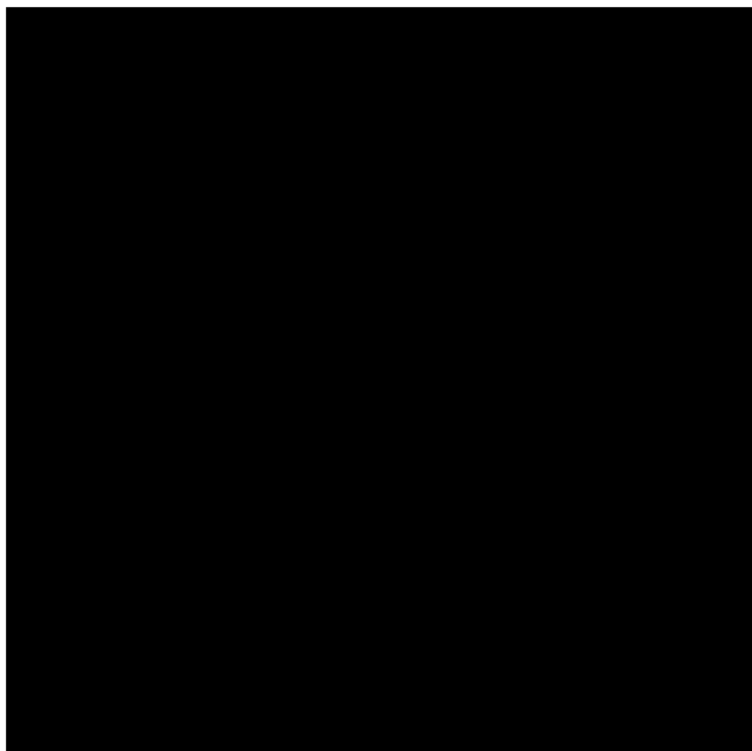
中央円形 年譜コーナー



ロビー：後藤勘兵衛茶室（現・太閤山荘擁翠亭）原寸写し



当館展示担当職員によるガイドツアー



参加人数

*全日14時より1時間程度開催

8月22日／17名

8月29日／12名

9月5日／8名

9月12日／11名

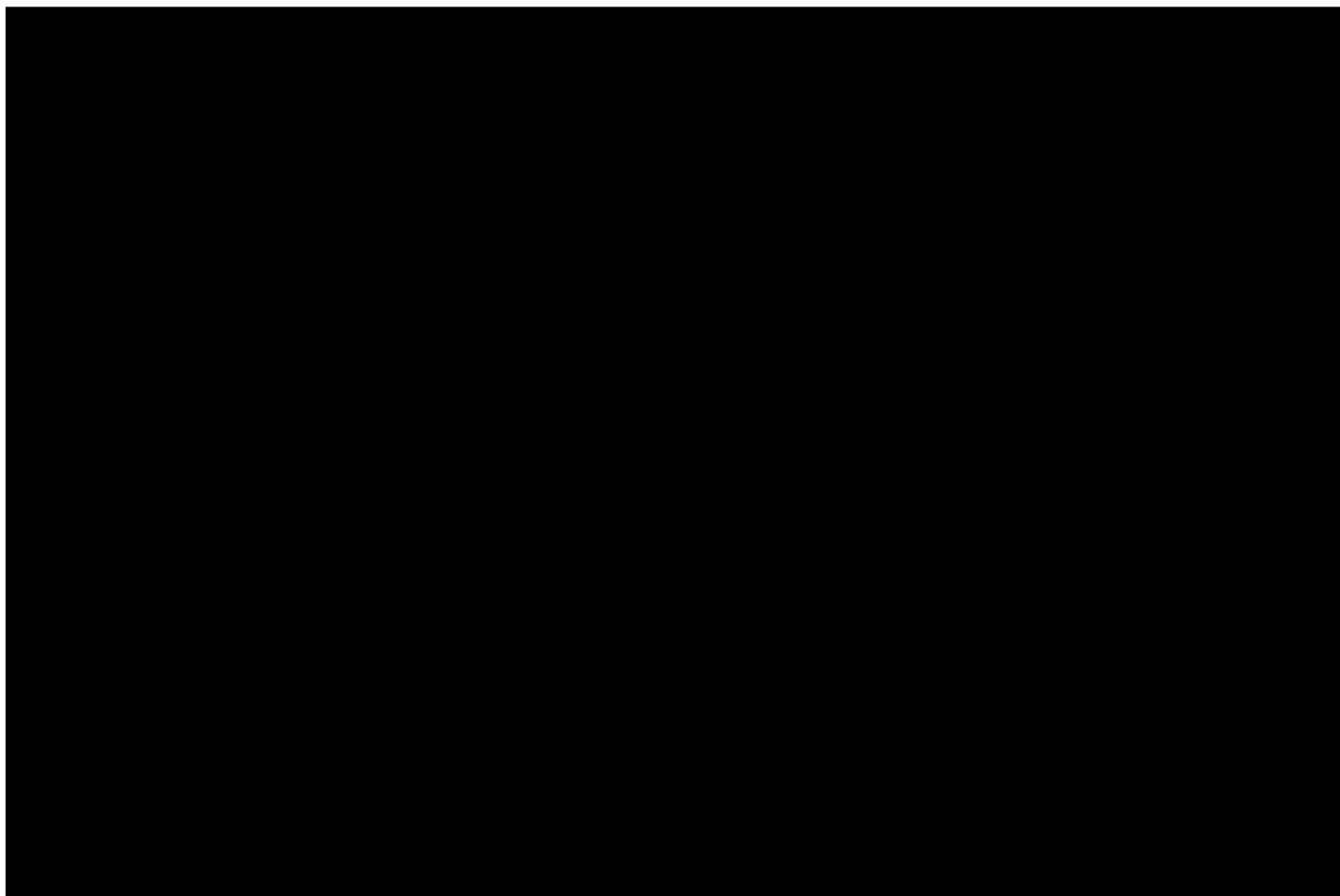
9月19日／10名

9月26日／18名

10月3日／19名

10月10日／14名

10月17日／21名 合計130名



イベント「1923年：堀口捨己とアムステルダム派の出会い」

展示室内で上映した「堀口捨己とアムステルダム派」を制作したヘットシップミュージアムの創設者・名誉館長のアリス・ルーホルト氏をお迎えし、ギャラリートークを開催。100年以上前に建築家・堀口捨己を介して行われた建築分野の日蘭交流に関して、アムステルダムにおける調査で新たに発見した事柄をお話しいただいた。

日時 2024年10月18日(金) 16:30-17:30

講演 「1923年：堀口捨己とアムステルダム派の出会い」

講師 アリス・ルーホルト氏（ヘットシップミュージアム創設者・名誉館長）

参加人数：38名

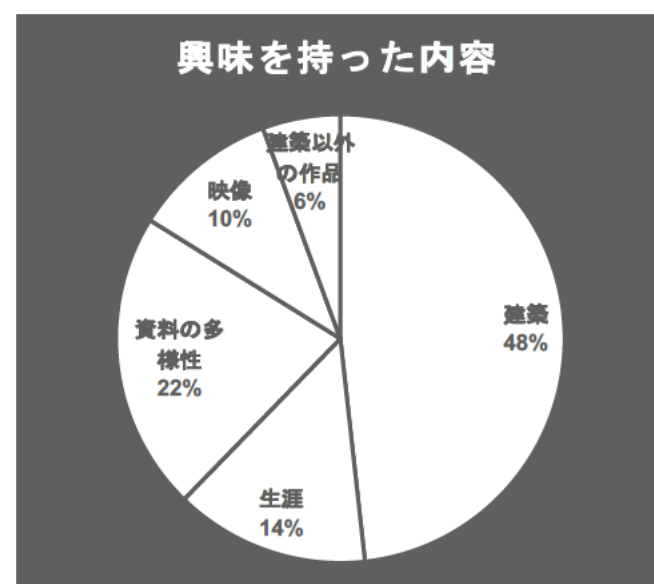
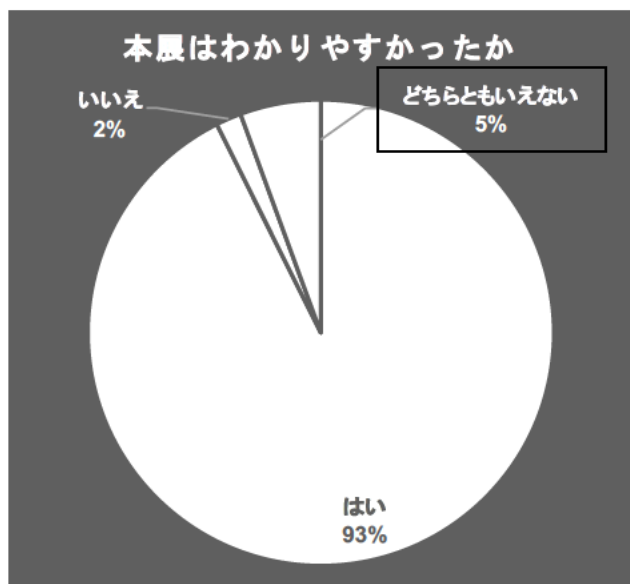
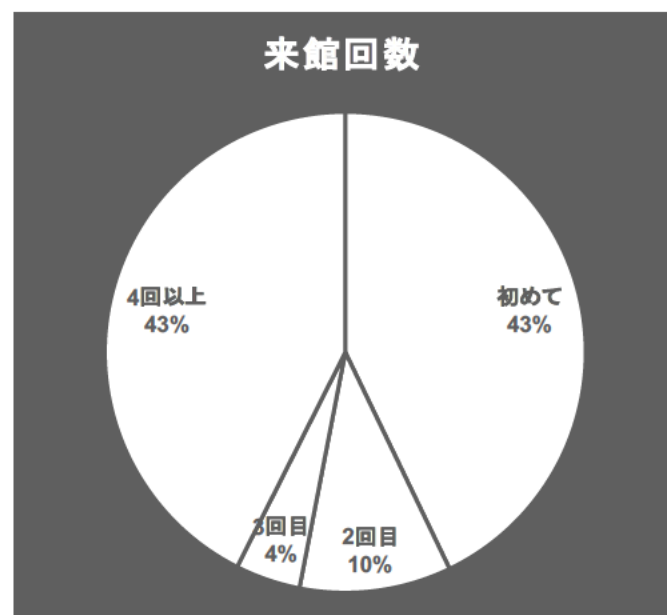
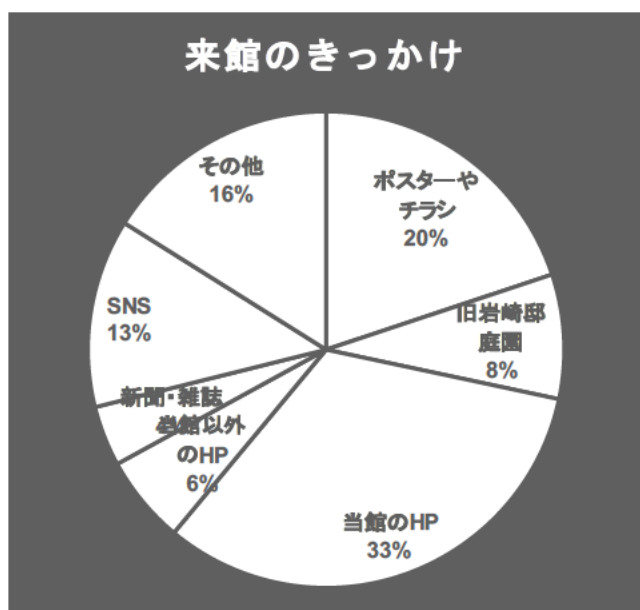
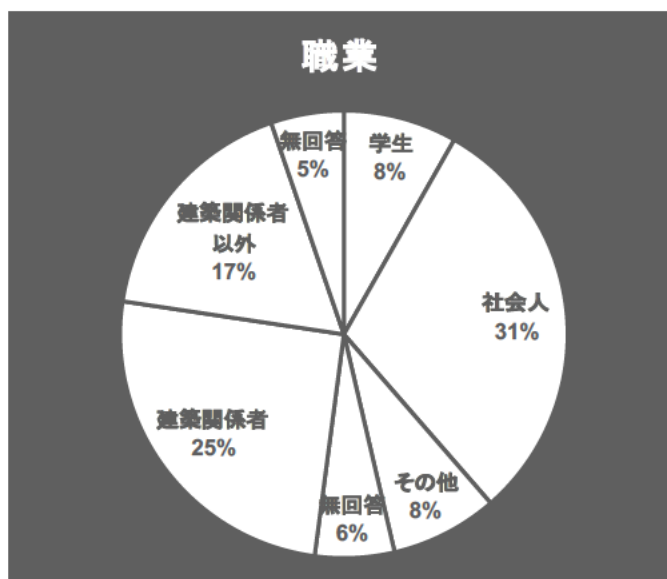
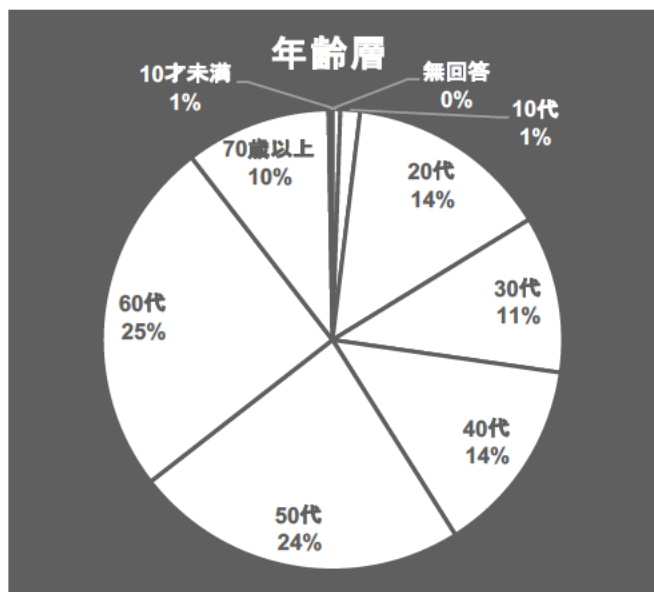


広報

日にち	曜	入館者数			連絡事項
2024年		正門	岩崎邸	合計	
08/08	木	34	0	34	プレビュー
08/09	金	75	26	101	
08/10	土	-	73	73	
08/11	日	-	117	117	
08/12	月・祝	-	121	121	
08/13	火	休館日			
08/14	水	107	74	181	
08/15	木	100	68	168	
08/16	金	臨時休館（台風）			
08/17	土	-	98	98	
08/18	日	-	91	91	
08/19	月	休館日			
08/20	火	38	25	63	
08/21	水	54	24	78	
08/22	木	58	22	80	ガイドツアー
08/23	金	49	19	68	
08/24	土	-	120	120	
08/25	日	-	143	143	ギャラリートーク
08/26	月	休館日			
08/27	火	32	23	55	
08/28	水	69	59	128	
08/29	木	74	32	106	ガイドツアー
08/30	金	50	7	57	
08/31	土	-	77	77	
09/01	日	-	75	75	
09/02	月	休館日			
09/03	火	42	18	60	
09/04	水	39	27	66	
09/05	木	44	31	75	ガイドツアー
09/06	金	40	23	63	
09/07	土	-	98	98	
09/08	日	-	117	117	
09/09	月	11		11	ギャラリートーク撮影
09/10	火	29	30	59	
09/11	水	20	47	67	
09/12	木	31	29	60	ガイドツアー
09/13	金	48	20	68	
09/14	土	-	127	127	ギャラリートーク
09/15	日	-	158	158	
09/16	月・祝	-	115	115	

日にち	曜	入館者数			連絡事項
2024年		正門	岩崎邸	合計	
09/17	火	休館日			
09/18	水	38	37	75	
09/19	木	34	33	67	ガイドツアー
09/20	金	53	40	93	
09/21	土	-	126	126	
09/22	日	-	108	108	
09/23	月・祝	-	138	138	
09/24	火	休館日			
09/25	水	39	62	101	
09/26	木	56	28	84	ガイドツアー
09/27	金	23	24	47	
09/28	土	-	148	148	ギャラリートーク
09/29	日		105	105	
09/30	月	休館日			
10/01	火	31	191	222	
10/02	水	49	32	81	
10/03	木	57	14	71	ガイドツアー
10/04	金	49	32	81	
10/05	土	-	100	100	
10/06	日		107	107	
10/07	月	休館日			
10/08	火	32	25	57	
10/09	水	32	15	47	
10/10	木	62	60	122	ガイドツアー
10/11	金	55	29	84	
10/12	土	0	127	127	
10/13	日	-	147	147	
10/14	月・祝	-	170	170	
10/15	火	休館日			
10/16	水	37	47	84	
10/17	木	55	27	82	ガイドツアー
10/18	金	97	42	139	ヘットシップ講演会
10/19	土	-	136	136	
10/20	日	-	183	183	
10/21	月	休館日			
10/22	火	74	47	121	
10/23	水	71	35	106	
10/24	木	67	61	128	
10/25	金	59	98	157	
10/26	土	-	231	231	
10/27	日	-	217	217	
計		2115	5156	7271	

「建築家・堀口捨己の探求」展 アンケートまとめ
回答数 344件



国立近現代建築資料館公式website
<https://nama.bunka.go.jp/exhibitions/2408>

現代建築資料館

Modern Architecture Museum, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology

Language

English

日本語

YouTube

検索

建築資料館について

> HOME > 「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」

施設案内と当館までの道のり

資料閲覧

>

収蔵資料

>

展示

>

共催展

>

「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」

モダニズム 利休 庭園 和歌

建築家・堀口捨己の探求

8月 - 10月27日

入場方法:
■観覧会のみ観覧の場合（平日のみ）
通島地方合同庁舎正門より入館。無料。都立旧岩崎邸庭園には入場できません。
■都立旧岩崎邸庭園と国立近代建築資料館観覧会を同時観覧の場合（土日祝及び平日）
都立旧岩崎邸庭園より入館。都立旧岩崎邸庭園入館料無料（一般400円）
「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」

開催期間：2024年8月9日（金）～10月27日（日）
休館日：毎週月曜日 但し、祝日の場合は閉館し翌日休館。
（8月12日、9月16日、9月23日、10月14日開館。8月13日、9月17日、9月24日、10月15日休館）
※会期中、一部展示入れ替えがあります。
開館時間 1000～1830
入館方法:
■観覧会のみ観覧の場合（平日のみ）
通島地方合同庁舎正門より入館。無料。都立旧岩崎邸庭園には入場できません。
■都立旧岩崎邸庭園と国立近代建築資料館観覧会を同時観覧の場合（土日祝及び平日）
都立旧岩崎邸庭園より入館。都立旧岩崎邸庭園入館料無料（一般400円）
「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」

主催 文化庁
企画 文化庁国立近代建築資料館
協力 公益財団法人 東京都公園協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益財団法人 京研研究所
ヘットシップミュージアム（阿姆斯特ダム）
会場 文化庁国立近代建築資料館
（〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 通島地方合同庁舎内）
会期 2024年8月9日（金）～10月27日（日）
休館日：毎週月曜日 但し、祝日の場合は閉館し翌日休館。
（8月12日、9月16日、9月23日、10月14日開館。8月13日、9月17日、9月24日、10月15日休館）
※会期中、一部展示入れ替えがあります。
開 1000～1830
入館方法:
・観覧会のみ観覧の場合（平日のみ）
通島地方合同庁舎正門より入館。無料。都立旧岩崎邸庭園には入場できません。
・都立旧岩崎邸庭園と同時観覧の場合（土日祝及び平日）
都立旧岩崎邸庭園より入館。都立旧岩崎邸庭園入館料無料（一般400円）
お問い合せ
当館に駐車場はありません。車いす等ご利用の方は事前にご連絡ください。
また、当館は従来の基準で建てられた建物を改修して利用しているため、バリアフリー対応になっていないところもあるかまじご了承ください。

展示内容

1 分館開業式と西郷三善の墓 1920～1929

建築作品に、「分館庁舎建設」、「昭和記念堂寄贈品」、「小出邸」、「紫雲荘」、「双蓮庵」

分館開業式と「分館庁舎建設寄贈品」。右図：築山、堀口捨己
Q | 1929

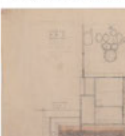
2 国策住宅への関わり 1930～1939

建築作品に、「吉川閣」、「黒田邸」、「大島漁船所」、「若狭屋」、「忠告設計院建築」

吉川閣 黒田邸 | 1925

若狭屋 二面図 | 作成年未詳

3 「日本」の探求 1936～1958

研究及び建築作品に、「東京への関心の高まり」、「茶室の実用調査」、「八景館八事品」



PR timesリリース

<https://primes.jp/main/html/rd/p/000000802.000047048.html>

PRESS RELEASE
文化庁
報道関係各位
文化庁

国立近現代建築資料館 建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」開催のご案内

文化庁国立近現代建築資料館では、2024年8月9日から10月27日「建築家・堀口捨己の探求 ダニズム・利休・庭園・和歌」を開催いたします。



公式ウェブサイト <https://nama.bunka.go.jp>

建築家・堀口捨己の資料が、文化庁国立近現代建築資料館に！

文化庁立近代文芸館建館は、平成24年の開館以来、我が国の近代文芸界にまたる著名建築家とその建築に関する数多くの資料を収集し、展覧会やデジタル カイブを通じて際次公開してきました。昨半、開館から10周年を記念し、収点数も20万点を越えました。著名建築家に関わった建物は、空港や官庁など我が国に於ける社会基盤を支えるものも少なくなく、その関連資料が有する情報は、社会基盤の設計図であったり、いばわが国社会の「安全確保」に関わることに資するものと見られます。資料収集としましては、こうした情報を収集・保管するミッションの重要性としっかり向き合い、取組をさらに強化していきます。

さて、かねてから我が国の建築領域は、歴 的に美しさと、安心安全の観点から耐久性を兼ね備えている点で世界的に評価が高く、文化庁ではそれを未来に継承されるべき重要な文化要素（建築文化）と捉えています。今後は資料館から世界に広く発信する取組を強化し、さらに、ア カイブ、展示、発信にとどまらず、幅広い建築文化に関連する団体との連携を強化し、多様な取組の場としての充実を目指すこととしていきます。

そして今年、資料館に新たに建築家・堀口捨己の資料が ありました。それを記念して、本展「建築家・堀口捨己の探求 ダニズム・利休・庭園・和歌」を開催いたします。

さて、ではその「リグチ・すてみ」とは、どのような建築家なのでしうか。

近代建築を先駆けた人として

堀口は、大学卒業と同時に「分館派読書会」という日本初の本格的な近代読書運動を始め、読書家として知られている人です。分館派とは不思議な名前ですが、それは、自分たちは、それまでの読書、つまり明治以降、近代化と称して建てられてきた西洋の古本様式をよめた読書とは、線を画し（分館し）新しい読書を目指す、という宣言でした。そして堀口は、当時よく知られた「読友」で芽吹いた近代読書の流れをいす早く取り入れようとしたのです。近代読書の巨匠として当時 ロッパの心、カルビンが本格的に活動を始めると、ほぼ同時期より、日本における堀口の存在は、近代読書の世界同時多発性を物語るうえで貴重な存在であるということができています。

和洋の通底音

近代建築の直線を いた自由な構成に、日本の数寄屋建築との共通点を感じた堀口は、徐に日本文化へ傾倒していきます。茶室研究も堀口の偉大な業績といえますが、それも近代の建築家としての眼差しによるものでした。西洋文化と日本文化に共通するものを見出すと模倣を続ける堀口の発想はまさにインタ ナショナル! 近代文明の理想を追い求めた偉大な20世紀人の姿であるといえるのではないで しょうか。

本展は、これまで、いつかに分かれて収蔵されていた堀口の資料が、一括して国立近代建築資料館に収蔵されたことで初めて可能となった堀口捨己の本格的な回顧展です。ぜひとも当館にお運びいただき、今から100年前に、近代という新しい時代における我が国の建築の進む道を示した堀口の世界をご堪能ください。

- **基本情報**

【展覧会名】	建築家・堀口信己の探求 ダニズム・利休・庭園・和歌
【会 期】	2024年8月9日（金）～10月27日（日）
	休館日：毎週月曜日 但し、祝日の月曜日は開館し翌日休館。 （8月12日、9月16日、9月23日、10月14日開館、8月13日、9月17日、9月24日、10月15日休館）
	※会期、一部展示入れ替えがあります。
【時 間】	10:00 16:30
【会 場】	文化庁国立近現代建築資料館 （ 113-8553 東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎 ）
【主 催】	文化庁
【企 画】	文化庁国立近現代建築資料館
【協 力】	公益財団法人 東京都公園協会 一般社団法人 日本建築学会 関東支部 公益財団法人 窓研究所 ヘッ シップミュー ジアム（アムステルダム）

・ 展覧会のみ観覧の場合（平日のみ）
湯島地方合同庁舎正門より入館。無料。都立 岩崎邸には入場できません。
・ 岩崎邸庭園と同時観覧の場合（日祝、及び平日）
都立岩崎邸庭園より入館。有料。岩崎邸庭園入園料（ 約400円 か）が必要。

建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌

文化庁公式X

https://x.com/prmag_bunka/status/1821735653358629245



公式ウェブサイトアクセス数

7月12日（16:00公開）～10月27日（23:59）

訪問数：42,893件

PV数：99,306件

公式ウェブサイトの堀口展ページアクセス数

7月12日（16:00）～10月27日（23:59）

訪問数：21,498件

PV数：25,397件

公式X

リツイート：17件

いいね：37件

ブックマーク：9件

閲覧数：4,472件

公式facebook

7/12分

いいね：80件、コメント：2件、シェア：22件

8/9分

いいね：71件、コメント：3件、シェア：18件

文化庁公式facebook

<https://www.facebook.com/photo/?fbid=792259823087694&set=a.246283364352012>



7/12と8/9の2回投稿

媒体	掲載先	WEB URL
web, 雑誌	日経クロステック／日経アーキテクチャ	https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/mag/na/18/00159/073100080/
雑誌	月刊「東京人」2024年10月号	
web	文化庁	https://www.bunka.go.jp/
web	Tokyo Live & Exhibits	https://tokyo-live-exhibits.com/pum_tkbnk_nationalarchivesofmodernarchitecture/
web	Fashion Press	https://www.fashion-press.net/news/121392
web	NEWSRELEA.SE	https://newsrelea.se/7MnY84
web	Tokyo Art Beat	https://www.tokyoartbeat.com/events/-/Explorations-of-Sutemi-Horiguchi-Modernism-Rikyu-Garden-Waka/E43-F6156/2024-08-09
web	ニコニコニュース	https://news.nicovideo.jp/watch/nw16098608?news_ref=search_search
web	展覧会・博物館・美術館・記念館	https://abc0120.net/2024/07/18/154396/
web	Niftyニュース	https://news.nifty.com/article/economy/business/12365-3216305/photo/
web	PR TIMES	https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000802.000047048.html
web	毎日Infoseekニュース	https://news.infoseek.co.jp/article/prtimes_000000802_000047048/
web	ADF webmagazine	https://www.adfwebmagazine.jp/architect/explorations-of-horiguchi-sutemi-modernism-rikyu-garden-and-waka-at-national-
web	AIJ日本建築学会（関東支部）	https://taiikai2024.aij.or.jp/related-events-accompanying-events/
SNS	museumnews.jp	https://x.com/museumnews_jp/status/1814439773685329921
SNS	文学通信	https://www.facebook.com/story.php?story_fbid=1015319993934149&id=100063684727505
SNS	一般財団法人 古田織部美術館	https://www.facebook.com/story.php?story_fbid=979411240638767&id=100057097014361&rd_rdr
web	Aoyama Design Forum	https://www.adfwebmagazine.jp/architect/explorations-of-horiguchi-sutemi-modernism-rikyu-garden-and-waka-at-national-
SNS	建築家／都市計画家-古宇田 卓	https://x.com/KfKouda/status/1811949969613738438
web	Mapion ニュース	https://www.mapion.co.jp/news/release/000000802.000047048/
web	住宅情報web	https://www.jutaku-s.com/news/id/0000034913
web	一般社団法人茨木県建築士会	https://i-shikai.com/category/gyousei
web	NIKKEI COMPASS（日本経済新聞社）	https://www.nikkei.com/compass/content/PRTKDB000000802_000047048/preview
web	DOCOMOMO Japan	https://docomomojapan.com/%E4%BC%9A%E5%A0%B128%E5%8F%B7%E3%81%8A%E3%82%88%
雑誌	季刊『住む。』91号（2024年秋号）★	https://www.sumu.jp/numbers/91.shtml
web	公益財団法人窓研究所website	https://madoken.jp/announcement/28391/
SNS	公益財団法人窓研究所Instagram★	https://www.instagram.com/p/DAIPNzhoQle/?utm_source=ig_web_copy_link&igsh=MzRIODBiNWFIZA==
web	タイムアウト	https://www.timeout.jp/tokyo/ja/%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%88/horiguchisutemi-
雑誌	『建築画報 399 Vol.60』2024年9月号	https://www.kenchiku-gahou.com/
web	BUNGA NET	https://bunganet.tokyo/horiguchi/
パンフレット	文京ミューズネットマップ	https://www.city.bunkyo.lg.jp/documents/4082/20231219304.pdf
新聞	公益財団法人文京アカデミー財団広報誌スクエア	https://www.b-academy.jp/square/upload/Square_vol284.pdf
雑誌	『新建築』2024年9月号★	https://shinkenichiku.online/
新聞、web	日刊建設通信	https://www.kensetsunews.com/archives/986020
web	住宅新法	https://www.jutaku-s.com/news/id/34913
web	JDN	https://www.japandesign.ne.jp/event/horiguchisutemi-nama/
雑誌	『CONFORT』2024年12月号★	https://confortmag.net/no-200/
web	TECTURE MAG	https://mag.texture.jp/event/20240927-117970/

『新建築』2024年9月号

建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌

開催中

@文化庁国立近現代建築資料館／東京
2024.8.9～10.27

国内初の近代建築運動「分離派建築会」の結成の中心人物であり、茶室や数寄屋研究で功績を残す堀口捨己（1895～1984年）の回顧展。代表作品や設計案のオリジナル図面や写真などの展示に加え、茶室や庭園の研究資料など、堀口の思想や世界観を総合的に紹介する。

展示会場は、堀口の活動の年表が掲示された台を中心に広がり、時系列で区切った4章で構成される。1章は、海外の近代建築を巡り、初期の代表作を生んだ1920年代に注目する。「紫煙荘」（1926年）では、茅葺き屋根の形態と堀口がオランダで見た住宅との相似点などが図面と写真で示され、近代建築の動向を反映しようとしたことが分かる。

2章は、機能的合理性を求める当時海外で主流だった国際様式を取り入れた1930年代がテーマ。深い庇によって水平と垂直が強調された「吉川邸」（1930年）や、実用性に加えて記念性も持たせようとした「大

島測候所」（1938年）など、当時の潮流を受けながら独自の方法論を見出すまでの変化を辿れる。

その後、戦中期に始めた茶室と数寄屋の研究成果が結実した「八勝館 八事店」（本誌5803、6406）などの作品を3章で紹介。如庵や龍光院といった茶室や茶亭の実測図の展示と共に、待庵の調査を通して千利休を建築家・総合芸術家として評価していたことについてキャプションで触れている。

4章は、1954年以降の作品が並ぶ。これまでの設計や研究を経て堀口は「様式なき様式」を追求するようになったという。「常滑市立陶芸研究所」（同6112）では風土が持つ条件から庇の深さや屋根の採光の形態を決めるなど、様式からの脱却に

向かっていった。一方で、約50の茶室をおこし絵図として12巻の冊子にまとめた『茶室おこし絵図集』（1963～67年）や黄金の茶室復元の監修（1981年）、茶室の実作なども手掛けており、伝統を見つめ直していたことも窺える。

堀口の活動の数々から、さまざまな角度や領域に目を向けて考えることで、オリジナリティが獲得されていくのだということを再認識できる展示となっている。



左：会場中心の展示台。堀口の年譜や茶室の調査資料、詠んだ和歌が展示される。／右上：吉川邸の初期案透視図（文化庁国立近現代建築資料館所蔵）。／右下：常滑市立陶芸研究所。

2024p09|021

公益財団法人窓研究所Instagram (2024/9/20掲載)



『CONFORT』 2024年12月号

REVIEWS &
REPORTS

国内の近現代建築に関する資料の収集・保管を行う文化庁国立近現代建築資料館で、展覧会「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」が開催された。長年、堀口の資料を保管してきた堀口捨己建築アーカイヴズからの寄贈を受けたことで、堀口の活動を網羅的に振り返る回顧展が初めて実現した。

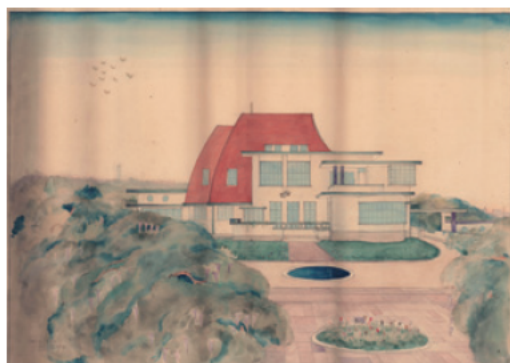
堀口の学生時代から晩年に至るまでの代表作品のオリジナル図面に加えて、1920年代欧州視察時の写真、分離派建築会展資料といった同館収蔵資料が一堂に会した。また1930年代から40年代前半にかけて茶室の研究に傾倒した堀口ならではの要素として、茶室や庭園の実測研究資料も並んだ。展示室へ入室するエントランスホールでは、茶室おとし絵図を基にした原寸茶室模型が迫力をもって出迎える。収集された資料を年代ごとに展示する形式は、キュレーションに力を入れた現代建築展と比べると、そこらなにもを得るかは鑑賞者の読み解きに委ねられているといえるだろう。

歴史からなにを学ぶのか。本展に限らず歴史的資料を題材とする展示には、そのような問いが含まれているように思う。この展覧会は、堀口の建築活動を通して現代で創作に携わる者の模範となる姿勢の一端を

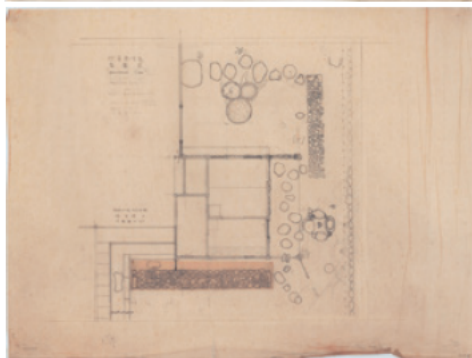
取材・文／ロンロ・ボナベティ

「茶室こそがモダニズムの建築である」 西洋と渡り合おうとする気概

建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌



上右／代表作の紫煙荘（しえんそう）は、堀口捨己がオランダ現代建築の視察をもとに刊行した『現代オランダ建築』を見た施主から依頼を受け設計したもの。アムステルダム派の彫塑的な造形と、幾何学を基本要素とするデ・ステイルなど堀口が視察した建築からの影響が窺える。完成後の1927年には『紫煙荘図集』を刊行し、メディア重視の姿勢や茶室を評価するなど、後の建築思想の萌芽がある。堀口捨己「紫煙荘 平面図及立面図」上左／吉川邸の計画段階の透視図。当初は紫煙荘を思わせる大屋根が付いていた。完成した住宅は陸屋根で国際様式のデザインだが、平面計画は大屋根付きの当初案とほぼ同じ。堀口捨己「吉川邸案 透視図」下／設計活動と並行して茶室建築の研究に傾倒した堀口は、学位論文『書院造と数寄屋造の研究』（1944年）、著書『利休の茶室』（1949年）などの研究業績と著作を残した。こうした研究を通じ、日本建築の独自性と普遍性を見出し、実践に結びつけていく。堀口捨己実測作図「妙喜庵待庵庭園図実測図」すべて国立近現代建築資料館所蔵
同展は、東京・湯島の国立近現代建築資料館で8月9日（金）～10月27日（日）に開催された。https://nama.bunka.go.jp/



示している。展示は4つに分かれている。第1のセクションではオランダ表現主義を中心とする近代建築、第2セクションでは国際様式（インターナショナルスタイル）、そして第3セクションでは茶室や数寄屋、庭園、茶の湯や和歌といった日本の伝統文化と、年代ごとに堀口がなから学び、どのような建築に昇華させていったのが示される。30年代までは、当時最先端の西欧建築を伝える役割を担った堀口は、以降は日本の伝統文化に専心していく。しかし堀口捨己建築アーカイヴズを組織化した一人の藤岡洋保は、それは懐古的な伝統回帰ではなく、日本の茶室こそが西洋に先んじてモダニズムを実践した建築であり、それを武器に西洋の建築家と渡り合おうとしていたのだと指摘する。堀口はその研究成果を、自作の設計に活かすだけでなく論文や書籍にまとめている。そのような姿勢によってこそ生み出された「八勝館」みゆきの間、さくらの間などの数寄屋作品の代表例は、それ以前の堀口の試行錯誤と併せて見ることで別物に見えてくるはずだ。第4セクションでは、「様式なき様式」を追求してたどり着いた独自の表現が紹介される。探求され創作の源泉となるべく、歴史資料が今後も充実していくことを期待したい。

『住む』91号 (2024年秋号)

sumu square Autumn 2024

スム・スクエアは、読者の方々からのお便り、編集部レポートが集まる情報広場です。
「住」はもちろん、「食」「衣」に関する地域の出来事や行事、店などの情報をお寄せください。
宛先: 162-0805 東京都新宿区矢来町112 神楽坂ホワイトコート403 株式会社泰文館『住む』編集部 sqr@sumu.jp

architecture

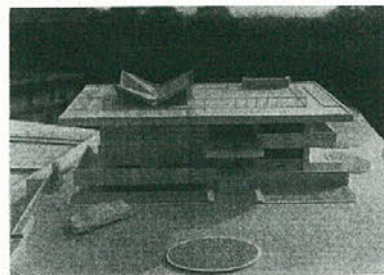
近代という新しい時代に 建築が進む道を示した 建築家、堀口捨己の足跡

「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」

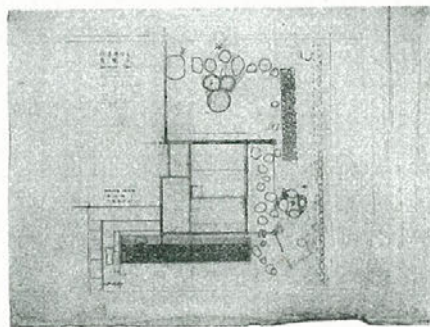
- ~10月27日(日)
- 文化庁国立近現代建築資料館
- <https://nama.bunka.go.jp>



分離派建築会
「分離派建築会宣言と作品」
岩波書店
表紙画 堀口捨己



常滑市立陶芸研究所 模型写真
撮影者未詳
国立近現代建築資料館所蔵



堀口捨己実測作図
妙喜庵待庵庭園図 実測図
国立近現代建築資料館蔵

ル・コルビュジエがフランスでモダニズム建築を模索しはじめた頃、日本でも新しい建築を目指し、「分離派建築会」を立ち上げた若き建築家たちがいた。そのひとりが、当時東京帝国大学を卒業したばかりの堀口捨己だ。このことは、近代建築が世界で同時多発的に起こったことの証左でもある。

没後40年にあたる今年、これまで各所で分散保管されてきた資料群が、国立近現代建築資料館に寄贈され、堀口捨己建築資料として一堂に会した。これによって、堀口の生涯にわたる活動を多面的、総合的に紹介する本格的な回顧展が実現することとなった。

会場には代表建築作品の原図を

含む約200点の展示資料が並び、近代建築を先駆けた人としての足跡、その後に続く茶室研究や西洋と日本の文化に通底するものを見出そうとした活動など、近代文明の理想を追い求めた20世紀人の姿を目の当たりにすることができる。

1920年代の欧州視察時の写真や分離派建築会の資料、茶室や庭

園の実測研究資料のほか和歌や手紙など貴重な展示物の数々は、来訪者を100年前、近代に向けて動き出した日本へ連れて行ってくれる。堀口が監修した図集から、「後藤勘兵衛茶室(現・太閤山荘擁翠亭)」を原寸拡大した模型も見どころ。内部に入り、その室内を体験することができる。

BUNGA NET (2024/8/8掲載)

「あの「紫烟荘（しえんそう）」の原図も！「建築家・堀口捨己の探求」展@国立近現代建築資料館が開幕」

BUNGA NET

Architecture, City, Design & Life

ホーム NEWS一覧 プロフィールOffice Bunga メルマガ申し込みや仕事の依頼

あの「紫烟荘（しえんそう）」の原図も！「建築家・堀口捨己の探求」展@国立近現代建築資料館が開幕

2024年8月8日

カテゴリ: 建築, 建築家, 展覧会

miyazawa_bunga

Like 46 Post 0 Pocket 0

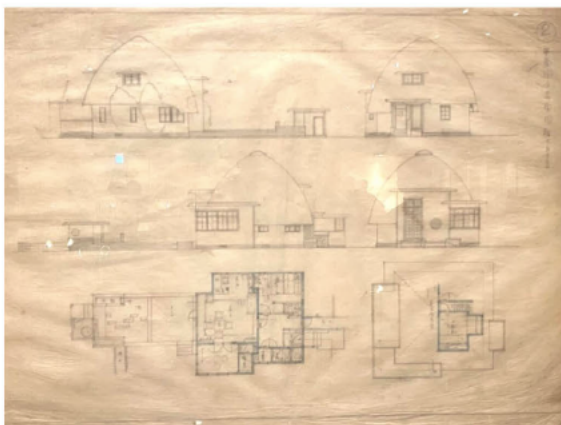
東京・温島の文化庁国立近現代建築資料館で「建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌」が8月6日（金）始まるから始まる。前日の8月8日（木）に行われた内覧会に行ってきた。



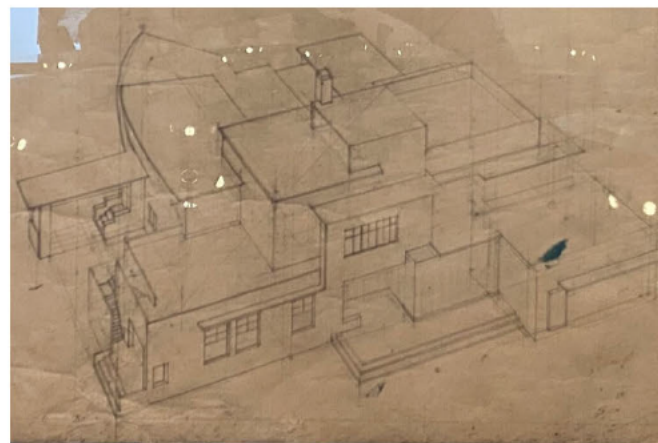
(会場写真: 宮沢洋)



筆者（宮沢）ほど、ここで何行われる展覧会を見続けている人も珍しいのではないと思うが、そんな筆者でも今回は、9割以上が見たことのない資料だった。それもそのはずで、堀口捨己（すてみ、1895-1984）の原図集が国立近現代建築資料館に寄贈されたのは最近のことだ。それらを惜しげもなく展示している。だから、注意深く見ないと、すきいものを見逃す。特にこれ！花。



わかっただろうか。建築好きならば、屋根の形ですぐにわかってほしい。若き堀口による「伝説」の逸話、「紫烟荘（しえんそう）」（1928年、埼玉県川口市、火災により存在せず）だ。



...と、こんな調子で書いていくと、1冊の本になってしまいそうなので、あとは会場を自分の目で見ていただきたい。

堀口は「飛び出す絵本」の監修をしていた

ところで、本展は、会場に入る前のロビー部分にこんな実物大展示がある。



本展のポスターにもなっている紙模型（右）を拡大したのだから、ということはずぐにわかったが、何の模型なのかを知らずにびくびく。てっきり実作（茶室）のスタディ風景だと思っていたのだが、そうではなかった。

この原寸展示のタイトルは、「堀口捨己監修『茶室おこし絵図集』」に基づく原寸茶室模型。つまり堀口は、今でいう「飛び出す絵本」のようなものを監修していたのだ。それも茶室縛りで、12巻も！（墨本書房より1963〜67年に発刊）



中にも入れる。この原寸茶室模型は堀口捨己監修『茶室おこし絵図集』第5巻に掲載された「太田山崎亭」（小堀遠州作）の起し絵図に基づいて、2020年に原寸模型を制作したもの（所蔵：公益財団法人建築研究所）。海外4カ所で展示されたが、日本では本展初公開

それを知って、本サイトで連載をお願いしている五十嵐浩さんの折り紙建築作品のこれ！と、ビビッと頷く中でつなげた。



実施記録

企画・運営：NAMA

企画担当

- ・資料原物調査
- ・文献調査
- ・企画／作品選定
- ・展示構成（レイアウト）
- ・導入及び鑑賞補助ツール（序文、資料群紹介、解説等）
- ・プレスリリース（PRTIMES）
- ・ガイドツアー
- ・イベント開催

研究者

- ・論考執筆
- ・情報提供、助言
- ・レクチャー

資料担当

- ・資料整理、寄贈契約、目録作成
- ・展示及び図録に必要な資料のデジタル化

情報担当

- ・広報（プレス、ウェブ、SNS）

資料館事務

- ・内覧会開催準備
- ・内覧会出席者名簿作成
- ・図録着払い送付
- ・アンケート記録

外部業務委託社：株式会社LEAF

展覧会製作担当

翻訳

Thomas DANIELL

グラフィックデザイン

下田健斗

- ・キービジュアル、フライヤー
- ・看板、会場内グラフィック
- ・図録

展示設営

LEAF, Amanek, 芸宣

- ・茶室組立
- ・会場設営（屋内外）

広報補助業務

LEAF

- ・フライヤー＋ポスター郵送
- ・開催案内郵送

記録映像

宮川貴光

- ・ギャラリートーク動画製作

教育普及物製作

LEAF、下田健斗

- ・中央展示室年表等デザイン、製作

【展覧会】

企画・展示構成

文化庁国立近現代建築資料館
小林克弘〔主任建築資料調査官〕
王聖美〔研究補佐員〕
久下高豊〔研究補佐員〕

運営・資料保管

橋本純〔主任建築資料調査官〕
Lambiasi James〔主任建築資料調査官〕
秋岡安季〔研究補佐員〕
齋藤菜那〔研究補佐員〕
平川千絵子〔事務補佐員〕
室田恵実〔事務補佐員〕
北島真希子〔事務補佐員〕

翻訳

Thomas DANIELL

グラフィックデザイン

下田健斗

茶室現寸模型展示

公益財団法人 窓研究所
太閤山荘擁翠亭
小池周子／Amanek Inc.

映像

宮川貴光（ギャラリートーク撮影・編集）
小池周子／Amanek Inc.（展示映像制作編集）

会場制作・設営

株式会社リーフ
株式会社芸宣
株式会社トップアート鎌倉
合同会社サムサラ

警備・美観管理

株式会社新東美装

【展覧会図録】

発行・監修

文化庁

編集

文化庁国立近現代建築資料館

執筆

藤岡洋保
青山（高瀬）道乃
小林克弘
王聖美
久下高豊

翻訳

Thomas DANIELL

デザイン

下田健斗

印刷・製本

株式会社リーフ

	項目	〆切／実施日程	4月	5月	6月	7月	8月
企画	文献調査		●				
	寄贈契約	5月末までに締結を目標	●	●	●		
	資料整理・目録採録		●	●	●	●	
	展示資料（図面・写真）候補	4月末	●	●			
	展示資料候補リスト化（日・英）	4月末	●	●			
	資料デジタル化（館内スキャン）	4月末	●	●			
	音声フィルムデジタル化（仕様書・見積）	3月末	●				
	章立て	委員会までに概要、4月中FIX	●				
	展示ゾーニング	6月末	●	●	●	●	
	館長プレゼン	5月中	●				
フライヤー	フライヤー用画像（キャプションとクレジット日英）		●	●	●	●	
	①フライヤー用導入文（日）		●				
	フライヤー用テキスト翻訳（英）	①5/10翻訳回し～5/29納品	●				
	フライヤー用基本情報（日・英）		●				
	デザイン、入稿	6/12入校～			●		
	納品	6/21納品			●		
	ゲスト及び関係者へ案内のための郵送	6月17日～21日配送			●		
	配付のための郵送	6月17日～21日配送			●		
プレス	プレスリリーステキスト	6月7日に公開			●		
	②建築家・資料群の紹介文（日）		●	●			
	②の翻訳	翻訳①5/10翻訳回し～5/29納品			●		
	みどころ（日・英）	5月中			●		
	プレス用画像（キャプションとクレジット）	4月中	●	●			
	グラフィックキービ、バナー	6月7日納品			●		
	プレスへの案内メール送付	6月21日までに送付完了			●		
	OBへの案内メール送付	6月21日までに送付完了			●		
コンテンツ＋鑑賞補助	堀口音声フィルム活用						●
	ヘッドシップ映像活用						●
	茶室の活用				●	●	●
	③館長挨拶		●	●	●		
	④導入序文		●	●			
	⑤藤岡先生論考（来歴について）	5月末	●	●	●		
	⑥章解説	5月末		●	●		
	⑦作品解説	5月末		●	●		
	キャプション原稿	6月末			●		
	③～⑦翻訳	翻訳②5/31翻訳回し～6/28納品			●	●	
	他翻訳	翻訳④6/18提出～			●		
	投影用スライド作成	8月					●
	看板（外看板、タイトルウォール）	7/16入稿～7/31仕上り				●	●
	各種パネル	7/16入稿～7/31仕上り				●	●
	中央円形年表	7/23or24入稿				●	
	キャプション	第一弾：8/1入稿～8/5上り				●	●

	項目	〆切／実施日程	4月	5月	6月	7月	8月
図録	台割	5月末	●	● ●			
	編集・構成	5月末	●	● ●			
	テキスト類（日英）	5月末	●	● ●			
	デザイン、入稿	7月18日入稿～7月24日戻し			● ●	● ●	
	印刷・納品	8月7日					●
	関係者送付	8月8日～15日までに送付完了					●
展示 構成	レイアウト	7月中				● ●	
	資料採寸と額合わせ	6月中			● ●		
配布 物	館員配布用マニュアル作成	8月7日中					●
	棒リスト作成～出力	8月7日中					●
	アンケート（日・英）	8月7日中					●
広報	館内撮影（スチル・ムービー）	8月7日／8日撮影					●
	プレス対応	都度対応					
イベ ント	ギャラリートーク	会期中開催					●
	オランダ大使館	10月開催					
設営 ／ 撤去	現場監理（額装、設営、照明）	8月1，2，5，6日					●
	現場監理（茶室模型）	8月1，2，5，6日					●
	映像・スライド4面セッティング	8月1，2，5，6日					●
	キャプション設置・番号設置	8月2，5，6日					●
	撤去	10月28、31日					
報告	報告書作成&バインダー作成	会期終了後					
	レポート作成（委員会用、アニュアル用）	会期終了後					

2024年	
19-Apr	委託業務契約締結
	参加者：LEAF
22-Apr	第一回：キックオフmtg
	参加者：小林主任、王／NAMA、山口、小池／LEAF
	仕様書読み合わせ、データやり取り確認
	デザイナー選定
	スケジュール確認
25-Apr	第二回：定例
	参加者：小林主任、王、久家／NAMA、山口、小池／LEAF
	教育普及業務事業の別立て内容確認
	翻訳者選定
	原寸起こし絵図の配置計画検討
09-May	第三回：定例
	参加者：小林主任、王、久家／NAMA、山口、小池／LEAF、下田／デザイン
	デザイナー下田氏顔合わせ、業務内容確認
	工程確認～翻訳、製作物
	Het Schipとの許可証等の確認
	テキスト文字数変更に伴う全体調整確認
23-May	第四回：定例
	参加者：小林主任、王、久家／NAMA、山口、小池／LEAF、風坂／芸宣
	進捗状況確認
	キービジュアル案からのセレクション
	翻訳戻り分のチェックバック共有
	遅延業務確認
	広報：送付物リスト確認～チラシ、開催案内
	図録：台割、レイアウト、素材展開スケジュール確定
	起こし絵図原寸の配置、現物チェック
	照明フィルター取り替えのお願い
	会場計画素案確認
	ギャラリートーク企画概要確認
20-Jun	第五回：定例
	参加者：小林主任、王、久家／NAMA、山口、小池／LEAF
	進捗状況確認
	起こし絵図原寸配置計画確認、場所決定
	翻訳進捗確認
	広報進捗確認～発送件数確定（チラシ200+15件、開催案内600件）
	他進捗共有～リリース、看板デザイン、図録、会場計画
11-Jul	第六回：定例
	参加者：小林主任、王、久下／NAMA、山口、小池／LEAF、風坂／芸宣
	進捗状況確認
	スケジュール調整～パネル、図録、キャプション
	教育普及事業の状況共有
	他、会場設営関連の確認～写真パネル額装、作業工程

2024年	
01-Aug	設営1日目
	参加者：小林主任、王、久下／NAMA、山口、小池／LEAF、風坂、作業員5名／芸宣、泉澤、中村／トップアート鎌倉
	額装
	会場内レイアウト什器ほか設置作業
02-Aug	設営2日目
	参加者：小林主任、王、久下／NAMA、山口、小池／LEAF、風坂、作業員9名／芸宣、泉澤、中村／トップアート鎌倉
	額装
	会場造作仕上げ
	サイン看板貼り+取付作業
05-Aug	設営3日目
	参加者：小林主任、王、久下／NAMA、山口、小池／LEAF、風坂、作業員4名／芸宣
	原寸起こし絵図の組立作業
06-Aug	設営4日目
	参加者：小林主任、王、久下／NAMA、山口／LEAF、風坂／芸宣、竹下／サムサラ
	ライティング作業
28-Oct	撤去1日目
	参加者：小林主任、王、久下／NAMA、山口、小池／LEAF、風坂、作業員1名／芸宣
	屋外看板の撤去と転用部品以外の廃棄
	1階タイトルウォールの返却
	原寸起こし絵図解体、一部梱包
31-Oct	撤去2日目
	参加者：小林主任、王、久下／NAMA、山口／LEAF、風坂、作業員6名／芸宣、泉澤、中村／トップアート鎌倉
	原寸起こし絵図梱包
	会場内撤去作業
	会場1階ボックス看板の解体、廃棄
	検収

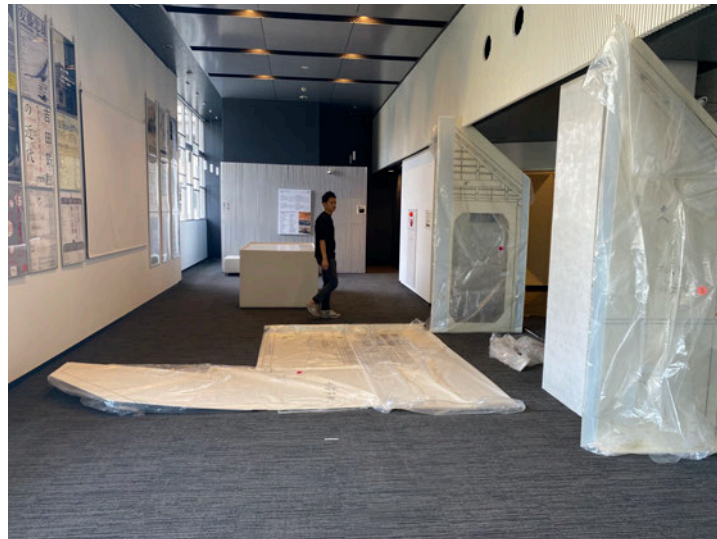
2024/5/9 デザイナー下田氏顔合わせ、堀口資料、書籍をご覧いただく



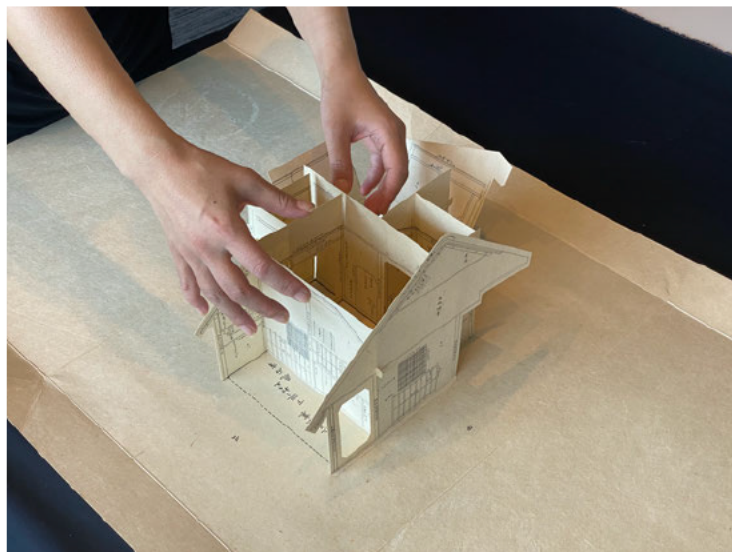
2024/5/23 起こし絵図原寸の現物確認



2024/6/20 起こし絵図原寸の設置場所決定、仮置き



2024/7/11 設営作業確認、起こし絵図動画撮影



2024/8/1,2 設営1,2日目



2024/8/5 設営3日目



2024/10/28 撤去1日目



2024/10/31 撤去2日目



建築家・堀口捨己の探求 モダニズム・利休・庭園・和歌

報告書作成

株式会社リーフ

150-0012 東京都渋谷区広尾5-23-5 長谷部第1ビル501

担当者：山口 真志 yama@leaf.bz